

今帰仁村文化財調査報告書 第8集

古宇利原遺跡発掘調査報告書

1983年3月

沖縄県今帰仁村教育委員会

序

本報告書は古宇利原遺跡群の範囲確認調査の結果を収録したものです。

調査は沖縄県教育庁文化課の指導協力を得て実施いたしました。

今回の調査結果より、厚い石灰岩の岩盤上に石を積み上げて築いた沖縄貝塚時代中期の環状遺構や岩盤を削りぬき柱穴とする17、18世紀頃の建物遺構が検出されたのをはじめ、多くの自然遺物や人工遺物が検出されています。

これらのことより、我々の遠い祖先達の生活跡や文化状況が明らかになっています。

近年、都市農村地域を問わず諸開発事業が盛んに行われていますが、これらの諸事業により地下に埋蔵されている埋蔵文化財は破壊と滅失の危機に瀕している現状であります。

それらの開発事業の進行に伴ない埋蔵文化財の破壊が危惧されますが、今後において各関係機関との協議を密にして、その意見調整を行ない遺跡の保存策に協調をしていくべきと思料します。

終りに、本調査にあたり経費の補助を賜った文化庁と沖縄県および調査の指導、報告書作成等で協力を得た県文化課また調査に参加協力くださった古宇利島の作業員の皆さんに記して厚くお礼を申し上げます。

1983年3月

沖縄県今帰仁村教育委員会

教育長 大城 勝 三

目 次

あいさつ	
例 言	
はじめに	2
I 遺跡の位置と環境	4
II 調査の概要	7
1 層 序	7
2 自然遺物	9
a. 魚骨	9
b. 獣骨	14
c. 貝殻	28
3 先史時代以後の遺構	19
a. 柱穴	21
b. 溜井戸	21
B. 遺 物	21
a. 青磁	21
b. 白磁	24
c. 染付	24
d. 鉄製品	24
e. 銅製品	24
f. 古 銭	26
g. 貝製品	26
4 先史時代の遺構及び遺物	42
A. 環状集石遺構	42
B. 遺構内の遺物	46
a. 骨牙製品	46
b. 貝製品	48
c. 石 器	51
d. 土 器	55
C. 遺構外の遺物	74
a. 土 器	74
b. その他	101
III おわりに	110

例 言

1. 本報告書は、今帰仁村教育委員会が昭和82年5月18日～昭和82年7月7日の間に実施した、古宇利原遺跡発掘調査の内容を記録したものである。

2. 本事業の実施にあたり、文化庁（80％）、沖縄県（10％）の補助を受けた。

3. 発掘調査および調査報告書作成にあたっては、沖縄県教育庁文化課の指導協力を得た。

4. 発掘調査は次の者により実施された。

調査責任者	大城勝三	（今帰仁村教育委員会教育長）		
調査事務局	松田朝雄	（ 〃 事務主事）		
調査担当	上原 静	（沖縄県教育庁文化課専門員）		
調査補助員	玉城朝健	（沖縄考古学会員）		
発掘作業員	玉城善吉	小浜清一	比嘉多子	玉城幸子
	金城ハナ	古宇利順子	久場初美	

5. 遺物整理にあたり、石器の石質については大城逸朗氏（沖縄県立博物館学芸員）、獣骨については川島由次氏（琉球大学農学部助教授）、魚骨については伊波寿賀子氏（筑波大学考古学研究室）の鑑定を受けた。記して感謝申し上げる次第である。

6. 発掘調査後の資料整理実測及び報告書作成は、沖縄県教育庁文化課でおこなった。

7. 調査報告書は下記の者により執筆され、編集は上原があたった。

上原 静	はじめに、II 1. 3、Bg、4A、Ba～C	III
松田 朝雄	B. a～f	
島袋 洋	4 D. C	
伊波寿賀子	II a	
比嘉 春美	II b	

8. 資料整理 貝殻分類、比嘉寿子
土器、石器実測、島袋 洋、松川 章、比嘉春美
トレース、仲村美代子、大城朋子
図版作成、城間光子、知念千恵子

はじめに

古宇利原遺跡は、今帰仁村字古宇利原に形成された遺跡群の総称である。古宇利島の棧橋を約20mほどのぼった字古宇利公民館一帯の遺跡を古宇利原A遺跡、古宇利部落の東側、つまりA遺跡の東方約300mの畑地附近を古宇利原B遺跡、(注1)そして同部落の西側を古宇利原C遺跡(注2)として称されている。これらの遺跡は管見の範囲では、1967年に金武正紀氏によって表面調査がなされている。(注3)その後1968年、1970年の間に数次に亘り表面調査と一部の試掘調査が行なわれ、また、その間を並行するように(1969年)豊見城高校郷土研究クラブによる踏査が実施され、それぞれある程度遺跡の内容と状況が報告されている。ただ主として表面調査にもとづくため具体的な遺跡の範囲を表示することないため、過去、道路の改修、拡張及び突堤工事等の開発工事のたびに破壊を受けていたのである。そこで今回の調査は、遺跡の範囲を確認し開発調整の資料を得ることにあった。とくに本年度、古宇利島では離島地区進興事業に係る道路の改修や公民館改修工事が予定され、その当該地に所在する古宇利原A遺跡及びC遺跡がかかわる可能性が事前に知られたため、今回の調査は主として緊急度の高い古宇利原A遺跡を中心にそして後半にC遺跡を並行して実施した。その結果、公民館改修予定地における古宇利原A遺跡は、すでに大半が削平および掘削により破壊され、わずかに発掘地の南側(海側)地域に残存することが明らかとなったが数cmの未攪乱層をのぞく上部の層は攪乱されていることが判明した。ただ岩盤を加工した柱穴及びため井戸また岩盤の凹地に構築された環状集石遺構は、構築場所が基盤の凹という理由からか破壊をまぬがれていた。遺物では新しくは青磁器(染付)、陶器、須恵器、古銭等の先史時代以後のものと、室川式土器を主として伊波式土器、萩堂式、仲泊式土器等の前～中期の土器が得られ、遺構を含めて大きくは二時代に生活地として営まれていたことが明らかになった。古宇利原C遺跡の道路改修予定地の調査は、路線に沿い数mおきに1m×1mのピット設定で行なったが、改修予定道路に於いては遺物包含層はみられなかった。なお先述の古宇利原A遺跡発見の遺構について、公民館建設関係者(古宇利区)と協議を行なったが、公民館敷地の代変地が無いことや区財政の貧困等の諸事情から公民館建設の回避が困難であったため、遺構部については原因者負担による記録保存の措置をとることにした。ところで今調査により古宇利原A遺跡は、南側の道路下及び北側の民家側にいまだ岩盤の凹地にたまる如く広がっていることが知られた。

注1 豊見高郷土史第3号「古宇利島調査報告」 1970年

注2 注1に同じ

注3 金武正紀「古宇利島の先史遺跡調査概報」 南島考古4号 沖縄考古学会

I 古宇利島の地形及遺跡の環境

古宇利島は、沖縄本島北部の本部半島北東方向に位置（N-36°、E-128°）する面積が2.99km²の島で 行政区は今帰仁村に属する。対岸の運天まで 1.5km、一日六回往復する定期連絡船で約10分程の近距離にある。島の頂部からは、北に伊是名島、伊平屋島、西に伊江島、南から東には本部の連山及び国頭の山々又塩屋湾が望め、眼下に屋我地島がみられるところにある。

島は、隆起珊瑚礁を基盤とし同島中央部が古世紀石灰岩からなる。最高部が 100m をはかり標高70m 附近までは漸次ゆるやかに傾斜しているが、それ以後は斜面をもって海岸にいたっている。したがって海岸から島の中央部に行くには坂が急でやや登山ににてきびしい。海岸地形は、北東部と南東部に砂丘が形成されているが、外周の70%は3～5mの隆起した岸縁でかまれている。土壌は石灰岩風化のマーチからなり島全体をおおっているが海岸地域はその被覆が薄い。

古宇利島は、沖縄人類の発祥地であるという神話伝説の島で、サーザウェー、海神祭の古い民俗行事を残している。文献上では、検地帳に「沖の郡島」、乾隆帳に「古宇理村」、由来記に「郡村」、薩摩文書に「こほり」とあり、北部地方では「フィ」また「フィジマ」と呼ばれている。古くから今帰仁村に属し、代々の今帰仁間切地頭代の御掛島であった。

現在の古宇利集落は、本島側（南側）に面した斜面地に形成されている。また明治以降同集落の屋取として島の中央に上原部落、北西側に下原部落がそれぞれみられるが小集落で、島の中心は前記の古宇利部落である。島の世帯数は132戸、人口397人と過疎の村のひとつである。

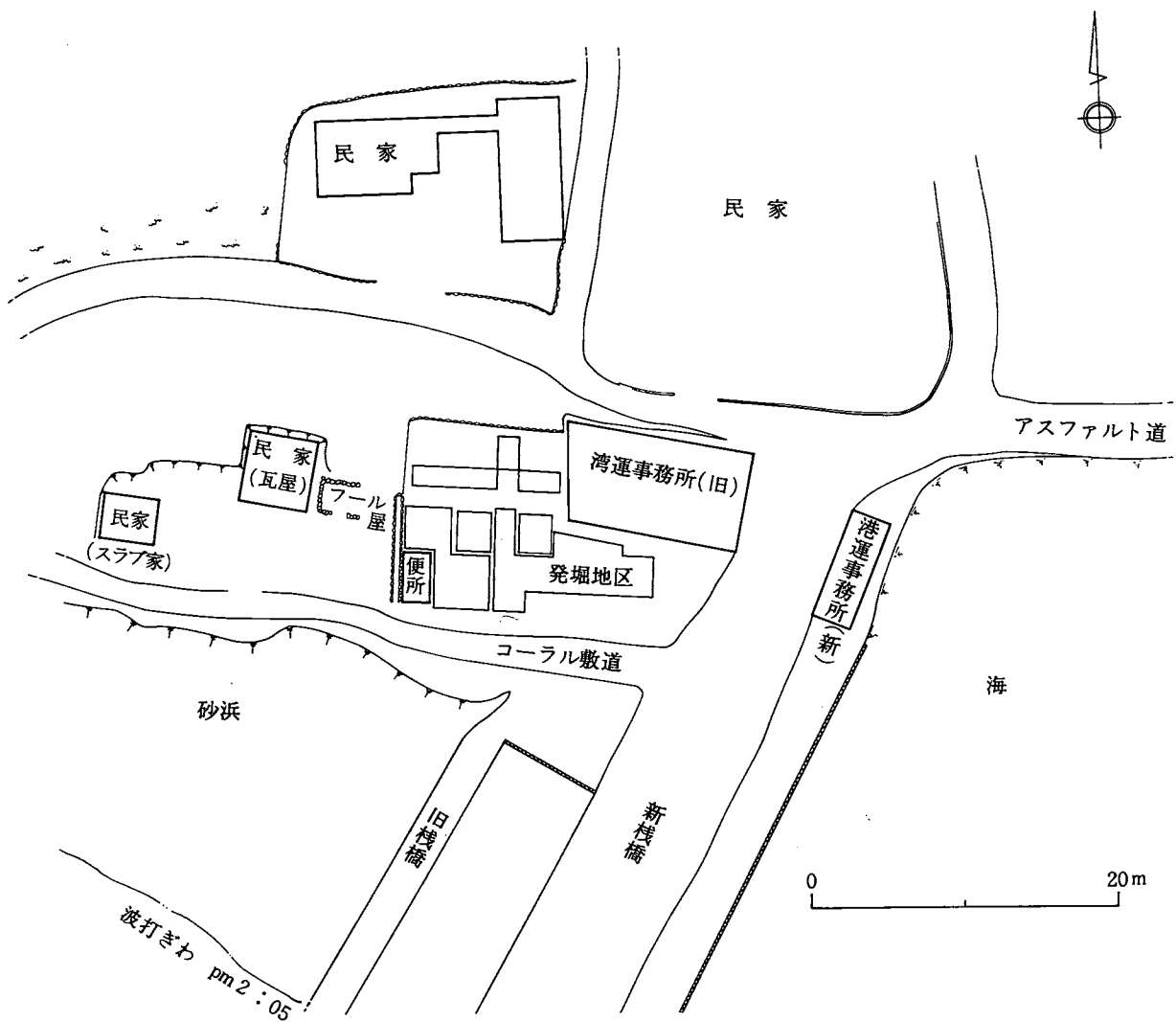
古宇利原遺跡は、現集落と同じ本島向の斜面に分布し、そのまま集落が重なるようにある。そのため、宅地の周辺や、畑地には遺物がみられその切れ目の判断が難しいところでもある。

今回調査を主とした古宇利原A遺跡は、現浅橋前に形成されていて特に宅地化が進んでいるところで、したがって破壊の大きいところでもある。調査地は以前の公民館跡地で、整地の際に北側は掘削がなされ岩壁がつくられている。これは西方の民家も同様で、基盤を水平に広くとるための結果としてみられ、いずれも家屋の背は岩壁がせまっている。

ところで当該遺跡の前面には堤防と浅橋がきづかれ、小砂浜が存在する。この砂浜は浅橋建設後に形成されたものである。眼前の海は、先にも触れたが本部半島から国頭まで囲繞するため内海の観を呈している。漁労は貝、ウニ、イカ操の採集、めあじ、めばる、かつお、たい等の採撈がなされ、海の幸は現在でも富なところである。古宇利島は河川がなく、かつては天水に依存するもので、家蓄、農業水は共同のため井戸でなされていたが、現在は、直接本島からケーブルにより水が引かれている。



第2図 古宇利原遺跡の位置図(2)



第3図 調査地区図面

II 調査の概要

遺跡は前述の通り海岸に沿った標高6mの石灰岩風化土壌の赤土上に形成されている。調査は当面調整を要する古宇利原A遺跡を中心に、そして並行し道路の拡張が予定されている西側の古宇利原C遺跡を対象とし、今回古宇利原B遺跡については時間的な余裕がなかったので確認するまでにはいたっていない。

古宇利原A遺跡

調査地は、以前公民館が建っていたところで、カワラ、ブロックの礫が散在し、地上に基礎の鉄筋が露出していて、そのため包含層の存在の期待が薄いところであった。トレンチは、南北軸をアルファベット、東西軸を算用数字で呼び、調査地区の北側から発掘を開始した。北側は数cm下にブロックコンクリート敷や、平坦な岩盤が露呈し、包含層が無かったため、漸次、南側へ移動することにした。南側では、表土層下に、攪されているが包含層が認められ、基部においては、柱穴、ため井戸、環状集石遺構を発見することが出来た。包含層は、南に傾斜するもので、未調査地の道路下にも広がっていることが明らかになった。調査地の西側は、グリットの壁面及び試掘調査の結果、攪乱され破壊されていることが知られた。

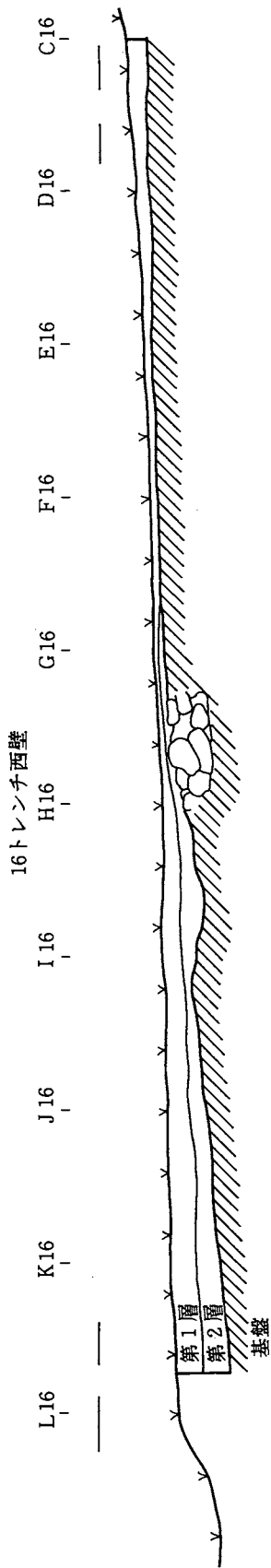
古宇利原C遺跡

古宇利42番地の西方、及び53番地畑地に遺物が地表面で確認され、試掘においても数10cmの包含層が存在することが確認された。道路の改修予定部分にあっては5～6m間隔で試掘を実施したが、コーラル及び石灰礫土層で遺物及び包含層は認められなかった。今回の調査は時間的都合で具体的範囲までおさえることはできず、当面の開発部局との調整カ所のための調査となった。

1 層 序

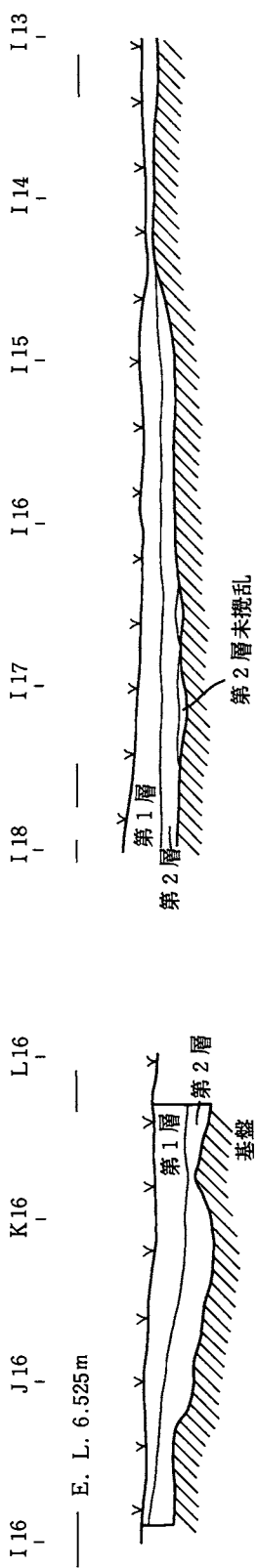
本調査地区には調査に入る数ヵ月までブロック積の基礎をもった公民館が建っていたところであり、さらに以前は耕作地であったところである。そのためか堆積層は薄く、しかも攪乱を深く受けた状態にあった。層は基本的に2枚からなり、第I層が瓦礫混りのコーラル層、第II層が文化層で、その下は比較的平坦な岩盤が広がっている。第II層の大半が青磁器や染付等現代遺物が先史遺物と混在するようにあり攪乱され、わずかに下位の数cm未攪乱の先史文化層が存在する状況にある。

岩盤には、掘り抜きによる井戸や柱穴、環状集石遺構等やところによってはシャボのスキ跡が残されている。以下層について記述する。

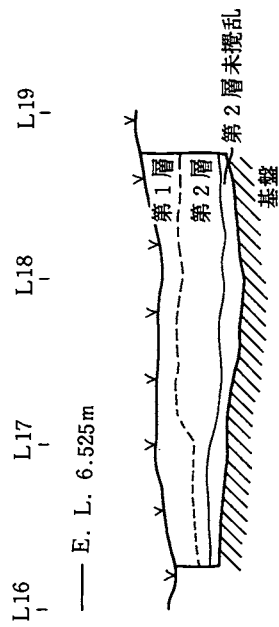


第4図 古宇利原遺跡調査側壁図

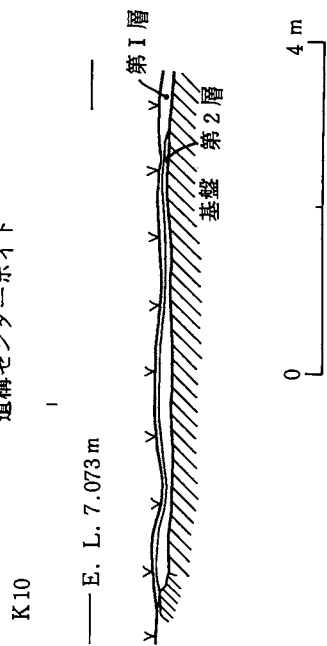
16トレンチ東壁



Lトレンチ南壁



遺構センターポイント



0 4 m

第II層

本層は、暗褐色土からなりGトレンチラインから南方向に存在する。層は南へゆるやかに傾斜し厚くなる。平均厚20～30cmを呈し、最厚部は南側の80cmをはかる。遺物は中世以後の遺物と先史遺物がみられるが第II層30cmレベルまで混在し、それ以下の数cmのものが未撹乱の先史遺物層になる。J.K.L-171819グリット南トレンチでは第II層は最厚90cmをはかるが60cmまでコーラル混りの撹乱層でそれ以下の部が未撹乱層になっている。

1968年に金武正紀氏が試掘調査のおり、本層はすでに提防工事の察に削平されて地上に露呈していたことが報告され、その時の残存層であることが知られる、又同氏は当該層下に貝層の存在を記しているが、本調査地区でこの広がりとは認められない。ただ環状集石遺構内は貝殻類は多く存在し、報文に「岩盤の凹凸のある凹みに存する」と記されていることからすると、遺構直上に試掘ピットがあげられた可能性も考えられる。

基盤

比較的平盤な石灰岩からなるもので、調査地区の北側からGトレンチラインまでは水平方向にあり、それ以南は、ゆるやかに傾斜しながら海岸に続いている。Gトレンチ側が海拔5,925m、Lトレンチ側が4,925mを測る。基盤上部には掘り抜きによる柱穴群と、石積み囲いのため井戸、及び岩盤の凹地に構築された環状集石遺構が検出された。

2 自然遺物

自然遺物には、魚骨、獣骨、貝殻等がある、以下項目ごとに説明する。

a. 魚骨

沖縄貝塚時代中期（高宮編年前V期）に相当する遺跡においては自然遺物を出土しないことが近年までの予説であり、中期遺跡の特徴のひとつになっていた。しかし、最近、調査例の増加に伴って、西長浜原貝塚をはじめまとまった自然遺物を出土する中期遺跡が発見されてきている。本遺跡もその数少ない遺跡のひとつである。

ここでは、魚骨について若干述べてみたいと思う。

まず、魚骨を採集するにあたっては、第1遺構内の土壌すべてに3mmメッシュのフルイによる水洗選別を施した。遺構外の土壌については水洗選別は行なわれていない。ここで得られた魚骨の部位は、これまでに報告された貝塚と同様、前上顎骨（premaxillary）・歯骨（dentary）の顎骨、上、下咽頭骨（upper・under pharyngeal bone）、脊椎骨（vertebrae）が多く出土している。特に咽頭骨と脊椎骨の出土が著しく多く、出土魚骨の大半を占めている。

b. 魚種の査定

出土した魚骨は、まず、部位ごとに整理した後、顎骨と咽頭骨に着目して種同定作業を行なった。本遺跡より出土した魚種は以下の通りで、出土状況は表1に示した。

ウツボ科 Muraenidae

沖縄本島近海では10数種が知られている。体長40cm程度の小型種から3 mに達する大型種など様々であるが、通常食用とされることはない。本遺跡では最小個体数16個体を出土しているにすぎない。漁の副産物であった可能性がかなり強いと思われる。

スズキ科 Serranidae

この科に属する魚類は沖縄近海で普通に見られるもので種類もかなり多い。今回出土した顎骨からマハタ属の一種であると思われる。

タイ科 Sparidae

本遺跡で出土した3個のタイ科魚類の顎骨はすべてミナミクロダイ (*Acanthopagrus sivicolus*) であった。同種は汽水域を好んで生棲するといわれている。出土状況が極端に少ないことは、遺跡周辺に大型河川のないことが大きく影響していると思われる。

フエフキダイ科 Lethrinidae

種の査定には至らなかったが、出土した魚骨はすべてフエフキダイ属 (*Lethrinus*) に属するものと思われる。中でもハマフエフキ (*Lethrinus nebulosus*) である可能性が高い。また、ヨコシマクロダイ (*Monotaxis grandoculis*) の出土は認められなかった。

ベラ科 Labridae

ベラ科に属する魚類は沖縄近海では100種以上知られているが、食用となるのは10種程度である。今回は咽頭骨によって12種に分類することができたが、現生種との比較検討ができなかったため、種の同定を行なうには至らなかった。しかし、下咽頭骨歯板面の状態からすると、イラ属 (*Choerodon*) に属する種がその大半を占めていると思われる。

ブダイ科 Scaridae

ブダイ科魚類は咽頭によって、4属10種に分類できた。(表-3)。ナンヨウブダイ (*Scarus gibbus*)、ヒブダイ (*Scarus ghobban*)、オジロブダイ (*Scarus aeruginosus*) の出土数がブダイ科魚類の約6割を占めている。

ハリセンボン科 Diodontidae

沖縄近海では、ネズミフグ・ハリセンボン・ヒトヅラハリセンボン・イシガキフグの

4種が知られている。今回出土した鰐骨はヒトヅラハリセンボン (*Diodon liturosus*) であろうと思われる。この科の魚類の出土数も全体で5個体(最小個体数)とタイ科魚類に次いで少ない。

小結

以上の出土状況(表1)をまとめて、表-2として魚類組成表を作成した。同時に、対岸の今帰仁村渡喜仁浜原貝塚の出土魚類組成も参考のために提示しておいた。渡喜仁浜原貝塚のⅣ層は前期～中期、Ⅱ層は後期の資料である。両遺跡ともベラ科魚類・ブダイ科魚類と、サンゴ礁域に生棲している魚類が主体となっており、前期・後期に位置付けられている他の貝塚の報告例でも、ほぼ同様な結果が得られている。本遺跡では、他の魚類に比べてブダイ科魚類の出土が57.6%と顕著で、次にベラ科魚類の9.0%、フエフキダイ科魚類の7.9%と続いている。

次に、ブダイ科魚類の種構成をグラフで示したものが表-4である。グラフよりナンヨウブダイ・ヒブダイ・オジロブダイの出土がある程度まとまっていることが言える。先に例にあげた渡喜仁浜原貝塚では、ヒブダイ・オジロブダイ・タスキブダイ (*Scarus sordidus*) が主体種であったと報告されている。これはブダイ科魚類を出土する遺跡に共通して、キツネブダイ属 (*Scarus*) の魚類が漁獲対象とされていた傾向がうかがえる。

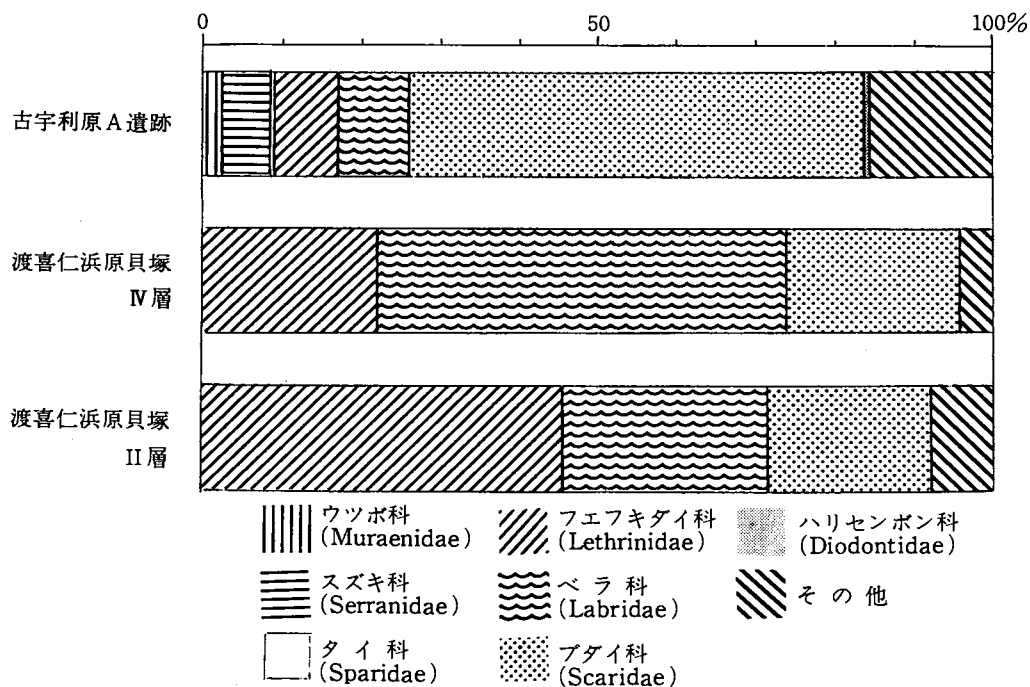
漁法について断定的なことは言えないが、ブダイ科魚類に的を絞って漁撈活動を行っていたとすれば、ブダイ科魚類の生態的特徴(1)夜間にサンゴ礁の間に眠る、(2)群れを作って移動することなどから想定できる漁法として、夜間の漁や追い込みによる捕獲が考えられる。また、漁場としては、古宇利島を取り囲むようにして発達しているサンゴ礁内の海域が考えられる。出土魚類の面から考えても、外洋での積極的な漁撈活動は行なわれず、前期や後期と同様、サンゴ礁海域内での漁撈活動が主であったと思われる。

第1表 魚骨出土状況

凡例： 上顎骨左 | 上顎骨右 | 上顎骨 | 上咽頭骨左 | 上咽頭骨右 | 下咽頭骨

層位	表採	第2 T P	第1 遺構										遺構										合計
			表土層	第2 層			集石内	集石外	7ルイ	第2 層						南壁	地山直上						
				第	層					第	層				第			層					
					0~10	10~20					20~30	30~40	0~10	10~20				20~30	30~40	40~50	50~60	60~70	
顎	ウツボ科 Muraenidae		1 1	1 1	1 1				12 1 1										16				
	スズキ科 Serranidae		2 1	2 1	1 1			+	25 17 23 26					1 1					32				
	タイ科 Sparidae								1 1 2										2				
	フエキダイ科 Lethrinidae	+	2 1	4 6	1 2				29 23 9 12		+	+		+		+			47				
	ベラ科 Labridae		1 1	4 4	4 4	+	+	+	7 8 17 8				+	+	+				31				
骨	アダイ科 Scaridae		4 8	18 18	1 2	+	+	+	146 146 173 158		+	+		+	+	+			211				
	ハリセンボン科 Diodontidae		1 1	1 1	1 1				1 1		1 1								7				
	その他			2 3					65										70				
	ベラ科 Labridae	+	1 1	1 1	1 3	+	+	+	41 24 42 42		+	+		+	+				72				
咽頭骨			7 11	7 5	1 2	1 1	1 1	281 285 139		+	+		+	+	+			304					
エイ科の歯板									1									1					
遊離歯			1 2						54						1			58					
尾骨			9 11			1 1	1 1		245		1 1						1	269					
脊椎骨	3		70 51	5 3	1 1	12 12	7 7	2 2	10,011		5 1		4 4			1 1		10,155					
合計	4		2 118	121 17	17 12	12 7	7 2	2 2	10,941		11 11	2 2	4 4	4 4	10 10	1 3 3	1 1	11,275					

第2表 魚類組成 (古宇利原遺跡・渡喜仁浜原貝塚)

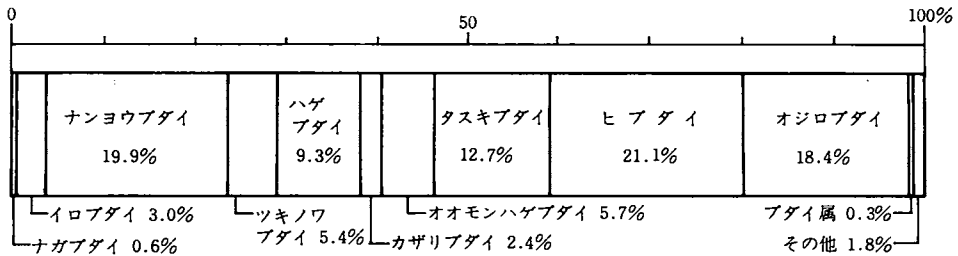


第3表 咽頭骨によるブダイ科魚類の種構成

凡例：上咽頭骨左 | 上咽頭骨右
下咽頭骨

層 位 種 名	第 1 遺 構				遺 構 外		合 計				
	第 2 層				集 石 内	フ ル イ		第 2 層			
	0 ~ 10	10 ~ 20	20 ~ 30	30 ~ 40				10 ~ 20	30 ~ 40	40 ~ 50	50 ~ 60
ナ ガ ブ デ イ Scarus rubroviolaceus					—	— ¹	— ¹				3
イ ロ ブ デ イ Cetosarus bicolor		$\frac{1}{1}$				$\frac{8}{5}$		$\frac{1}{1}$			11
ナ ン ヨ ウ ブ デ イ Scarus gibbus	$\frac{1}{2}$ ⁴	$\frac{3}{3}$	— ²			$\frac{55}{24}$ ⁵⁹			$\frac{1}{1}$		69
ツ キ ノ ワ ブ デ イ Scarus lunula	$\frac{2}{2}$			— ¹		$\frac{12}{15}$					18
ハ ゲ ブ デ イ Scarus sordidus	$\frac{1}{1}$ ³	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{1}$	$\frac{1}{1}$		$\frac{24}{6}$ ²⁶		$\frac{1}{1}$			34
ナ ザ リ ブ デ イ Scarus taenirus	$\frac{1}{1}$	$\frac{1}{2}$		$\frac{1}{1}$		$\frac{1}{4}$					8
オ オ モ ン ハ ゲ ブ デ イ Scarus bowersi	$\frac{1}{3}$	$\frac{1}{2}$				$\frac{1}{14}$					19
タ ス キ ブ デ イ Scarus dimidialis		$\frac{1}{2}$		$\frac{1}{1}$		$\frac{40}{41}$					43
ヒ ブ デ イ Scarus ghobban	$\frac{2}{3}$	$\frac{1}{5}$				$\frac{58}{57}$ ⁶⁹					74
オ シ ロ ブ デ イ Scarus aeruginos	$\frac{2}{2}$					$\frac{59}{19}$ ⁴¹				$\frac{1}{1}$	67
ブ デ イ 属 Calotomus						$\frac{1}{1}$					1
そ の 他						$\frac{4}{4}$					4
合 計	18	18	3	4	1	302	1	2	1	1	351

第4表 ブダイ科魚類の種構成



サメ目

サメは脊椎骨のみで、8個（20g）である。すべてK-16グリッドの出土で、1個はII層0～10cmで他はII層40～50cmの出土である。先史時代に伴うものと思われる。椎径は第5表に示した。種は不明である。

第5表 サメ脊椎骨出土一覧

No.	グリッド	層	個数	長径	完／破
1	K-16（遺構外）	II層0-10	1	15 mm	完
2	〃 〃	II層40-50	1	28 mm	〃
3	〃 〃	〃 〃	1	28 mm	破
4	〃 〃	〃 〃	1	30 mm	〃
5	〃 〃	〃 〃	4	計測不可	〃

b. 獣骨

本遺跡出土の獣骨は、434個（2,960g）検出され、そのうちわけはイノシシ-322個（1,770g）、ジュゴン、カメ等の海獣類-35個（370g）、大形のウシ-17個（45g）、ウマ-2個（70g）その他19個（50g）、不明-1個（250g）である。以下、それぞれについて記述する。

1. イノシシ

イノシシは全体の74.2%（重量-59.8%）と獣骨では最も多く検出された。出土状況については第6表に示した。これによると、環状遺構の検出されたグリッド（以下、遺構区）で56.4%、13～19グリッド側（以下、西地区とする。）で43.5%とやや遺構区に多く出土した。両地区を層序別にみると、前者はII層上部が65.9%と最も多く、次にII層下部が34.0%、I層が1.11%である。後者はII層上部63.8%、II層下部21.7%、I層14.5%と前者に比してI層の出土頻度が高い。

個体数を推定すると左上腕骨が最も多いが、近位端、遠位端、骨幹部のそれぞれの出土がいずれも同一個体ではないことから最小個体数は8個体を数える。

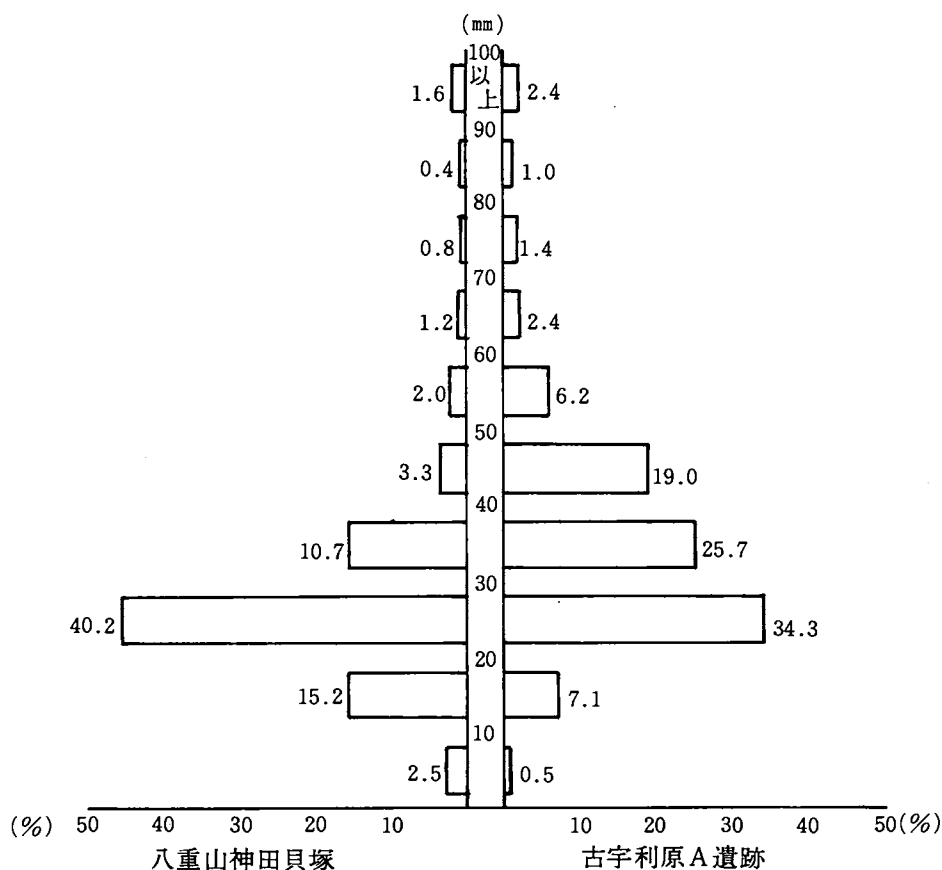
部位別の出土状況は、肢骨（上、下）が最も多く、胴骨の出土が最も少ない。骨の残存状況については、肢骨の中でも指骨、中手・足骨がほぼ完形に近い状態で残る。

第 6 表 イノシシ骨の出土状況

出土地 骨 名			13-19グリッド 西 地 区										遺 構 区										合 計		
			I層	II層										小計	I層	II層									小計
				0-10	10-20	20-30	30-40	40-50	50-60	60-70	70-80	80-90	0-10			10-20	20-30	30-40	40-50	50-60					
頭 蓋 骨	頭 蓋 骨	1	1		5							6								4	10				
	類 骨		R																	1	1				
			L																						
	後頭骨		R			1						1		1							2	3			
			L									1									1				
	下顎骨	R																							
		L																							
	前頭骨	R			1							1				2					2				
		L																			1				
	大 歯	1	2								1	3	2			2					4	7			
切 歯	1			3							5									5					
前 白 歯	4										4				2					2	6				
後 白 歯	1			1	1						3				4					4	7				
咽 骨	頸 椎	1	1								1		1		1	1				3	4				
	胸 椎														1					2	2				
	胸椎棘突起											1		2		1					3	4			
	腰 椎		1								1		3		1						4	5			
	肋 骨	2	5	2	3		2	1		1		16			2	1	2				5	21			
上 肢 骨	肩甲骨	R	2	1				2				4		1							1	5			
		L												2							2	2			
	上腕骨	R							1	1		2			1	1	2				4	6			
		L	1	1		1					3		2		3						5	8			
	前腕骨	R									3		2								2	5			
		L									1										1	1			
	腕 骨	R									2				1	1					2	4			
		L									3		1		1	2					4	7			
	中手骨	R									5				1	1	1				2	7			
		L									2		1		1	1					3	5			
指 骨																									
下 肢 骨	寛 骨	R	2													1	1				2	2			
		L																			2	2			
	大腿骨	R										1		1		1					1	2			
		L	1	2		1					3			1	1						2	5			
	下腿骨	R									4										1	5			
		L									1														
	脛 骨	R									1										1	1			
		L																							
	踵 骨	R																							
		L																							
距 骨	R																								
	L																								
中足骨	R																								
	L																								
指 骨																									
破 片	骨 幹 部	11	20	10	1	2	1		6	1		52		2	18	17	1				38	90			
	骨 端 部	1	2	5		1			1			10		46		1	1				48	58			
	不 明	1			1							2									2	2			
合 計			21	48	28	18	6	6	5	9	2	2	145	2	41	35	42	31		1	180	325			

注 1. 指骨は下肢骨と区別が困難であるため、下肢にまとめた。
 2. 中手骨、中足骨についても同様であるが、標本のできるかぎり区別し、上肢、下肢に分けて集計した。
 3. 歯骨の詳細については別表にまとめた。

また、骨の破損については、自然破損、発掘及び資料整理時の破損も考えられるが、骨の破損状況をみるため、長管骨及び部位不明の骨を対象にその残存状況を計測してみた。第7表が八重山神田貝塚との比較結果である。



第7表 長管骨の残存状況

イノシシの歯は18点検出した。その出土状況は第8表に示した。歯の摩耗についてみると、前臼歯、後臼歯の中にはエナメル質が摩耗し、ゾウゲ質の露出したのも少なくない。

頭骨についてみると図版8-A1はK-16グリッドII層上部の先史時代以降の遺構（井戸）から検出され、残存状態がよい、II層下部から検出された頭骨は小破片という点で様相を異にする。時代のちがいによる頭骨の扱いの差異か、今後の資料の追加をまちたい。

第 8 表 イノシシ歯出土一覧

No.	歯			出 土 地	
	部 位	左/右	上・下顎	グリッド	層 序
1	第 1 切 歯	L	下顎	15・16の畦	II 20-30
2	〃	〃	〃	〃	〃
3	第 2 切 歯	〃	〃	――	――
4	〃	R	〃	――	II 0-10
5	〃	〃	〃	15・16の畦	II 20-30
6	第 2 前 臼 歯	〃	――	第 1 号遺構	集 石 内
7	〃	L	――	〃	〃
8	第 3 前 臼 歯	L	上顎	L-14~15	II 0-20
9	〃	R	下顎	K-16	II 0-10
10	第 4 前 臼 歯	R	――	G・Hグリッド	II 0-10
11	第 1 後 臼 歯	L	――	第 1 号遺構	集 石 内
12	〃	L	上顎	L-14・15	II 0-10
13	〃	R	下顎	K-16	II 0-10
14	第 3 後 臼 歯	R	――	K-17	II 40-50
15	〃	〃	――	第 1 号遺構	II 30-40
16	〃	――	――	〃	集 石 内
17	第 4 後 臼 歯	L	――	〃	II 30-40
18	〃	R	――	15・16の畦	II 20-30

2. 海獣骨

a. ウミガメ (図版 7 の 29~30)

ウミガメと思われるものは22個(150 g) 検出された。図版30の下顎骨以外は細片のため部位は不明である。主にII層上部の出土で先史時代かそれ以後の時代か判然としない。なお、出土状況は第9表に示した。

b. ジュゴン (図版 7 の 31)

ジュゴンは13個(220 g) 検出された。肩甲骨、肋骨、歯?等があり、主に環状遺構のII層上部に出土した。出土状況は第9表のとおりである。

c. クジラ (図版 7 の 32)

1個検出された。ゴンドウクジラの犬歯でL-16グリッドII層40~50cmの出土である。他に第11図11の加工品もクジラの骨を利用している。

第9表 海獣骨その他の骨が出土況

出土地 骨名		13-19グリッド (西地区)										遺構内					合計
		I層	II層								小計	I層	II層				小計
			0-10	10-20	20-30	30-40	40-50	50-60	60-70	70-80			0-10	10-20	20-30	30-40	
海獣骨	カメ	2	7	3	1	3	1				15		3	5	1		9
	ジュゴン	1		1		1					3		5	2	3		10
	クジラ						1				1						1
その他	陸ガメ												1		3		4
	鳥骨	1		3			1				5		1	1		4	6
	食肉類?															2	2
	人歯?															1	1

3. 大形獣

a. ウシ (図版8Bの1~11)

ウシは17個検出された。出土状況は第10表に示した。そのほとんどは、西地区 (88.2%) の南西側のII層上部に主に出土する。右下顎骨の第2切歯がK-17グリッドII層40~50cmで検出されているが、この付近は攪乱が深い部分もあり、本品についてはII層上部の落ち込みによるものと思われる。ほとんどの骨が破損した状態で出土する。最少個体数は2個体と思われる。歯については第11表に示した。大部分の骨がエナメル質が摩耗し、ゾウゲ質が露出する。

第10表 牛・馬骨別出土状況

出土地 骨 名				13～19グリッド（西地区）						遺 構 図				合 計													
				Ⅰ 層	Ⅱ 層					小 計	Ⅰ 層	Ⅱ 層			小 計												
					0－10	10－20	20－30	30－40	40－50			0－10	10－20														
牛	頭	下顎骨	R	1		2	1		1	3	1			1	3												
		L																									
	蓋	切 齒																	2	2							
		前 白 齒																	2	2							
		後 白 齒	1		1		2	2																			
	胴骨	胸 椎 突 起												1	1												
		肋 骨	1	1					2				2														
	前肢骨	中手骨	R	2						2					1												
		L																									
	後肢骨	大腿骨	R													1						1					
		L																									
		距 骨	R	1	1																						
		L																									
手根骨		R	1					1																			
		L																									
小 計			5	2	6	1		1	15	1		1	2	17													
馬	中 手 骨						1			1		1		1	2												
	小 計						1			1		1		1	2												
合 計				5	2	6	2		1	16	1	1	1	3	19												

第11表 牛歯出土一覧

No.	歯 名		出 土 地	
1	第 1 切 歯	L 下 顎	西 地 区	I 層
2	第 2 切 歯	R "	"	II層40-50
3	第 3 前 臼 歯	L 上 顎	"	II層10-20
4	"	R "	"	" "
5	第 1 後 臼 歯	R 下 顎	"	" "
6	第 2 "	L 上 顎	"	I 層

b. ウマ

ウマは第10表によると2点検出された。いずれも左中手骨の骨幹部で、西地区、遺構区のII層上部の出土である。骨の大きさから別個体と思われ、最少個体数は2個体を数える。

4. その他

図版7-37、38、はそれぞれ食肉類の歯(?)、人歯(?)で両者とも遺構内の出土である。図版7-33、は陸ガメで遺構内II層上部で2個検出された。種は不明である。図版7-34~36は、鳥骨がある。18個検出された。出土状況は第9表に示した。

小 結

本遺跡は発掘面積ははじめでも触れている通り小範囲で量的な把握は保留したい。層序でみると相伴遺物からII層下部は先史時代の層でII層上部以上は先史時代以後の時期のものである、これによると、II層上部以上に出土するウシ・ウマの大形獣類は、現在のところそのルーツを解明する化石骨の出土例もない。ウマは、古くは貝塚時代前期の地荒原貝塚(注1)に出土するが、一般的には、ウシと同様、フェンサグスク貝塚(注2)、糸数城跡(注3)等のグスク時代に急増することから、今後は生物学的な見地からのグスク時代に検出されるウシ、ウマの研究が課題である。また、イノシシについても、古宇利島で先史時代に棲息していたものか、本島より移入してきたものか、化石骨等による研究が課題である。考古学的な見地からは骨髄接取のための詳細な破損状況の観察、頭骨、胴骨、上下肢骨などの解体や食するための切損状況等に注意をはらう必要があるのではなかろうか(注4)

なお、骨の同定については琉球大学教授川島由次氏に同定していただいた。記して深謝する。

注1. 「地荒原貝塚発掘調査報告」多和田真淳、嵩元政秀 1960年

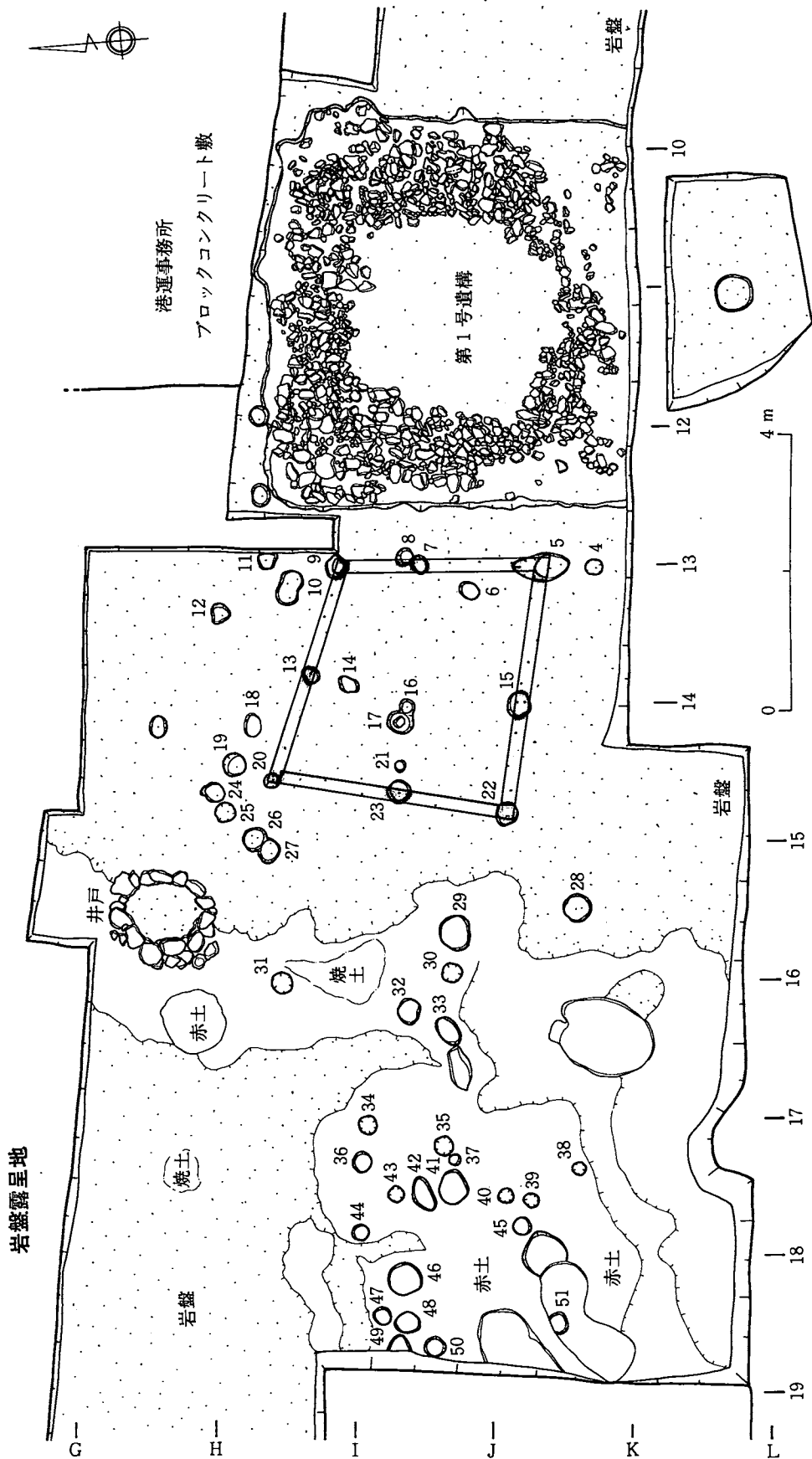
2. 友寄英一郎、嵩元政秀「グスク(城)出土牛骨歯について」南島考古 No.3 1974年

3. 2に同じ

4. 牛沢百合子「縄文時代の狩猟技術」『続・日本列島のおいたち』浜田隆士編 東海大学出版会 1981年2月

(3) 先史時代以後の遺構

主として現代及び近世遺物が出土した遺構さすもので、第5図に示した柱穴群とため井



第5図 調査地区平面図

戸である。

(柱穴) 16トレンチより東方に存在する柱穴群は、岩盤をくりぬいたもので、いくつか重複するものである。大きさは最小15cm、最大50cmを測り、ほぼ垂直に穿たれている。柱穴17号は根石が認められ、それを中心にプランとしては第5図のごとく考えられた。柱穴間は直線に平行はみられないが、柱穴間が1.6mを測った。2間×2間の建てものであろうか、今後の整った発見をまって再考したい。柱穴内からは、陶磁器、須恵器、先史土器等が教見された。なお16トレンチより西側は、岩盤までまだ土層があるため、土層穴になっているが、近世遺物の混入のものもありまた、先史遺物のものもあるため判断のむつかしいところであった。

(ため井戸) 第5図, 図版3

基底は凹みのある岩盤で、周囲に岩礫を積み上げ円形にしたものである。内径1m、深さ65.7cm。礫は石灰岩礫を主とするが、粘板礫も認められる。井戸内からは、陶磁器、獣骨及び貝殻や礫が混在していた。遺構内の土層の除去後、雨天時に雨水が石積礫頂部までたまり、保水することがわかった。

(4) 先史時代以後の遺物

a. 青磁

本遺跡から出土した陶磁器は青磁、染付、白磁等で量が比較的少なく、破片ばかりで完形品は1個も検出されなかった。器形は碗、皿、盤である。

(1) 青磁碗 L-17II層

第6図3の素地は灰白色を呈している。連弁で各弁先は剣頭状になっている。篋彫りの圈線が3～4本刻まれている。釉は透明の淡緑色で薄い。

(2) 青磁碗 溜井戸内

第6図1の素地は白色を呈し口縁部がわずかに外反する。釉は体部内外面に施されるが外面に釉が厚く淡青色を呈し、内面は釉が薄く淡白色を呈している。口縁部の先端は薄手である。

(3) 青磁碗底部 (溜井戸内)

第6図8標品は底径5.4cmで、素地は荒目で赤褐色を呈し、釉の発色はにぶい灰白色で比較的薄い。釉は高台脇までで、畳付から高台外底部にかけては露胎である。露胎の部分は鉄分が多く赤褐色である。

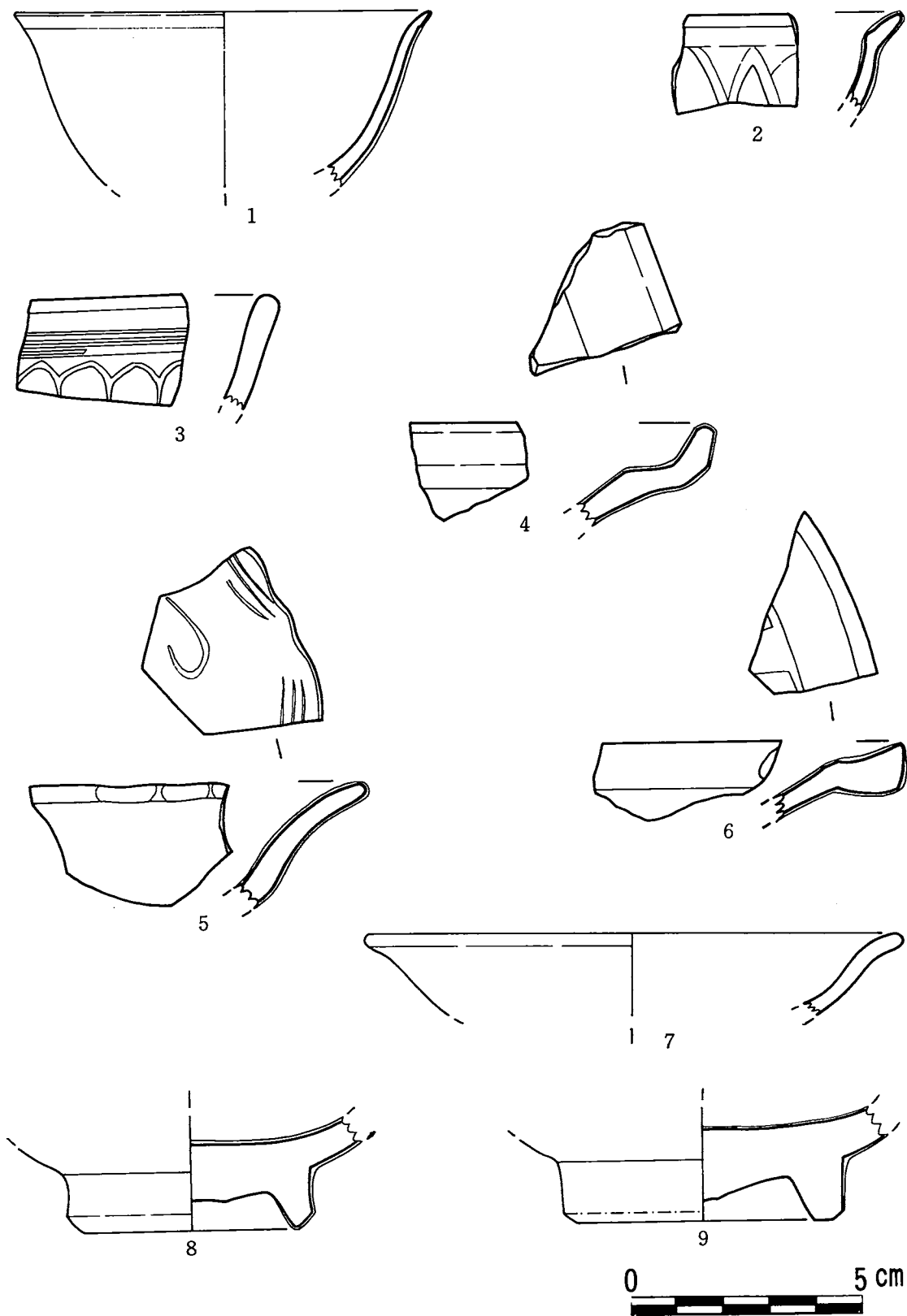
(4) 青磁碗底部 K-10II層

第6図9素地は目が細かく灰白色を呈し、釉は光沢があって薄い。高台畳付から外底部半分ほど施釉がみられる。畳付に微粒石が付着する。底径は4.5cmである。

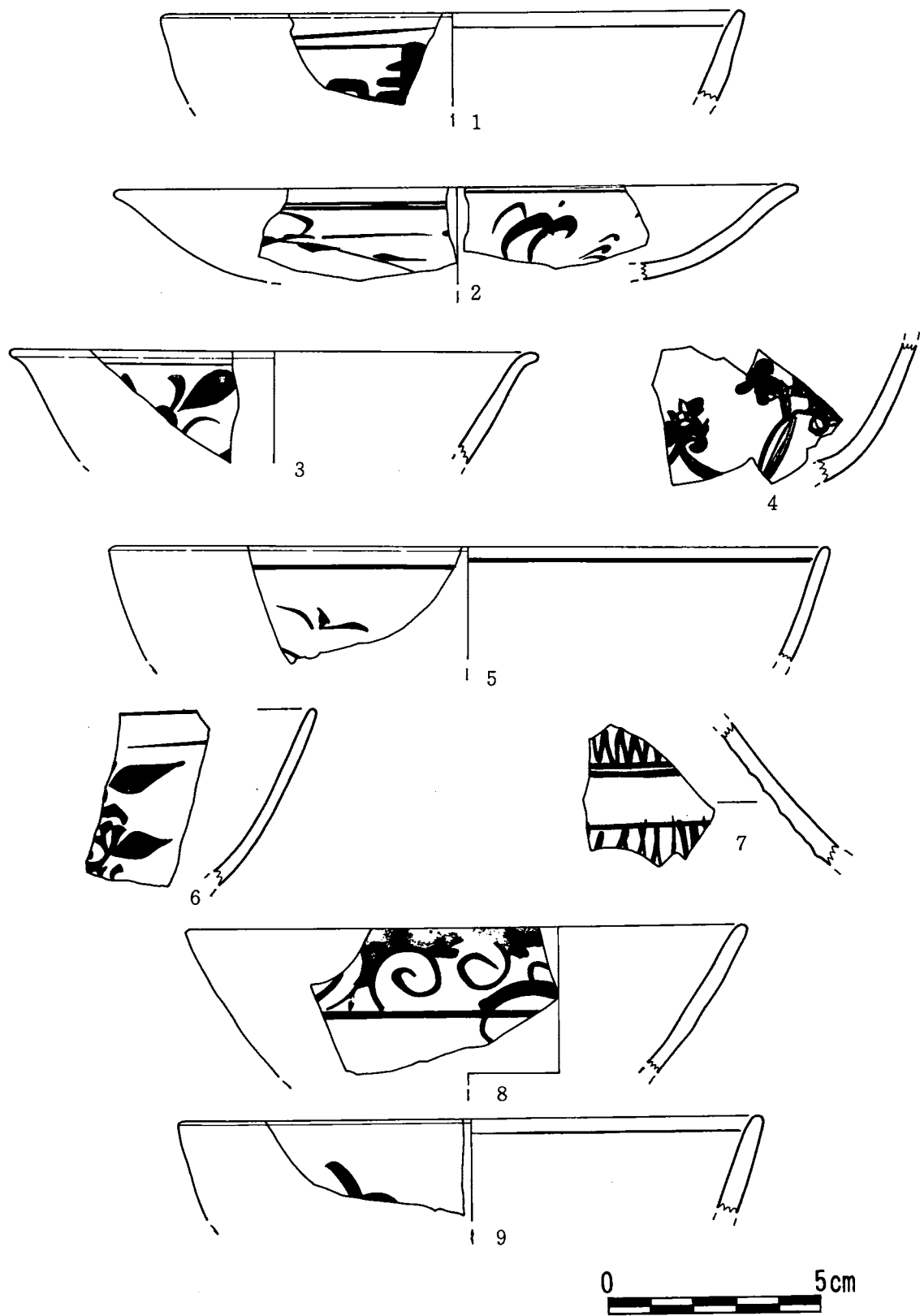
(5) 青磁皿 J-15II層

第6図5素地は灰白色を呈している。標品は口縁部破片で、口縁が輪花状になっている。口縁部は外反し内底にかけて内湾する。内面に刻花文がみられる。釉は淡緑色を呈して薄い。

(6) K-18II層



第6図 磁器



第7図 磁器

第6図2素地は淡白色を呈している。標品は口縁部が外反し口唇部がやや水平になるもので、体部外面に連弁文が刻まれる。釉は透明な淡緑色をしている。

(7) 青磁盤 H 1-16、17Ⅱ層

第6図4、6標品は口縁部破片で体部内面に連弁文を描いた盤で、口縁部を水平方向に曲げ、その先端をL状に折り曲げている。(H 1-16Ⅱ層)。素地は淡白色を呈し、釉は透明の淡緑色でやや厚い。

b. 白磁 (H 1-15Ⅱ層) 第6図7

白磁は皿の口縁部一片である。口縁部を外反させるもので、素地は白色を呈し釉は淡灰白色で比較的薄い。体部内外面に細かい貫入が走っている。

c. 染付 第7図

染付は9点出土した。完形品はなくすべて破片である。器形は碗8点、瓶1点が得られた。素地は灰白色又は淡白色を呈し、にぶい書料で外面に寿字文、花草文、唐草文でいずれも口縁部内外に一条か二条の線をめぐらす。

瓶の素地は白濁色を呈し、釉は濃い青料で、全体に細かい貫入が入っている。内側に轆轤の痕を残している。

d. 鉄製品

鉄製品の出土数は極めて少なく、鉄釘3本用途不明のものが1点を数えるのみである。

(1) 鉄釘 (J-18GⅡ層10/20)

①は頭部がL状になったもので先端部で湾曲している。断面は長方形状を示していて、錆化が進行しているがしっかりしている。長さ8.0cm幅1.2cm×0.8cm 8図-①

②は頭部が①同様にL状になっている。角釘で従方向にヒビ割状の線が走っている。断面は四角形である。長さ8.3cm 8図-②

③も頭部が①②同様L状になっていて、角釘の類である。断面は四角形である。長さ4.8cm 8図-③

d'. 鉄製品用途不明 (I-16、17Ⅱ層20/30)

断面は長方形状になっていて、先端部は丸みを帯びている。全体がねじれた形状を示し内割りがみられる。半分は欠失していて用途は不明である。製品はしっかりしている。

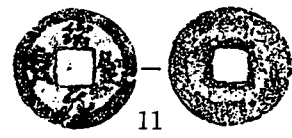
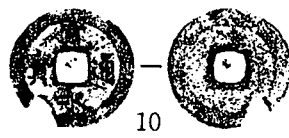
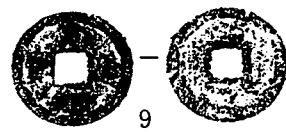
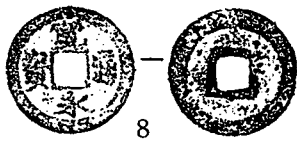
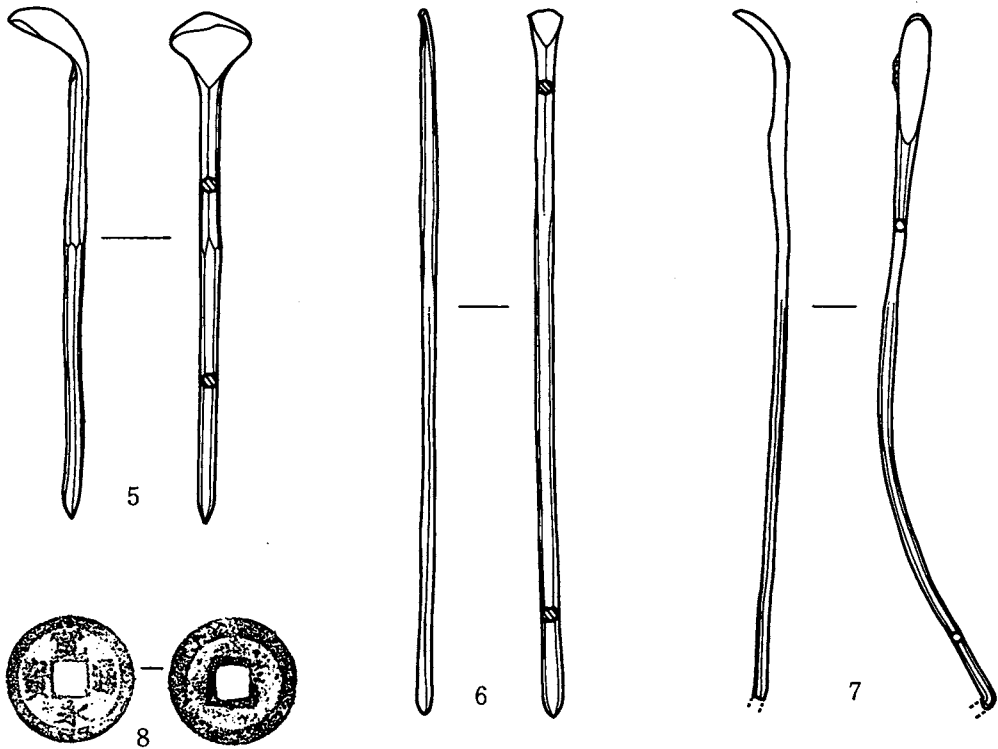
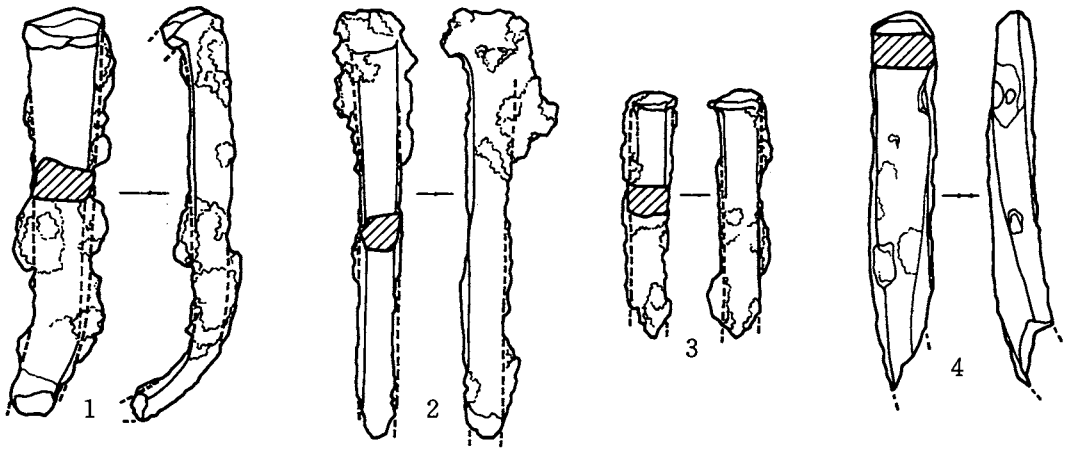
長さ7.3cm 幅1.2cm×0.75cm 8図-④

e. 銅製品 (K-16、17表土層、J-1718-Ⅱ層0/10)

⑤は全長が9.9cmの小さいカンザシである。頭部は直径1.5cmの円形状になっていて、形ちとしてスプーンに以る。竿は頭部付け根より中央部にかけて六角形になっているが、中央部ふくらみのところで面取りの形状が交互にかみ合い、先端部は角錐状になる。頭部外面の中心より竿の中央部にかけて一条の隆線が走っている。竿の長さは8.4cmで断面は六角形をなす。中央部で0.4cm先端部で0.25cmである。

先端は角錐状を呈する。

⑥は頭部が欠失していて、全体の形状は不明である。竿の首部分より頭部へ末広がり状にふくらむものと思われる。竿の全長は13cmで断面は四角形で、先端部にかけて丸みを帯



第 8 図 鉄・銅製品

び太めになる。先端は角錐状となる。竿の中央から頭部よりのところで①同様面の方向が交互にかみ合う形となる。厚さ幅0.3cm

⑦も頭部が欠失していて全体的な形状は不明である。竿の部分は湾曲し先端が細いスプーン状になる。全長は13.8cmで断面は六角形で先端部の付け根より丸みを帯び、先端にかけて挟りが入れている。先端は湾曲している。

幅0.2×0.3cm

f. 古銭 第8図8～11

古銭は全部で4箇検出された。3点は完形品で、1点はわずかに欠失している。

寛永通宝 3箇 紹元聖宝 1箇

II層

1溜井戸内

g. 貝鏝

タカラガイの殻頂部を打ち欠いた製品が37点得られた。出土層が第II層20cmレベルで近世の遺物とともに先史遺物も混在するが、グスク時代以後また民俗例から推して、先史時代以後の貝製品と判断し本項で説明することにした。出土グリットもJ K 17、18と一定していることからもとまった使用を示さしているものとする。貝種は、ハナマルユキが全体の94%を占め他にヤクシマダカラ、キイロダカラ等がみられる。

古宇利原A遺跡出土柱穴法量

法量 cm

柱 番	穴 号	径	柱穴外 レベル	基底レベル	柱 番	穴 号	径	柱穴外 レベル	基底レベル
1		50	205.0	221.0	27		30	103.0	115.2
2		26	77.0	98.0	28		38	150.5	158.7
3		30×25	78.0	97.0	29		50×40	129.7	144.3
4		20	129.0	134.0	30		26	127.2	141.2
5		40×80	127.7	144.0	31		30	113.5	129.0
6		20	116.8	127.5	32		35	123.0	140.0
7		25	104.5	116.5	33		40×22	123.0	134.1
8		20	101.8	114.3	34		25	126.5	135.2
9		30	85.6	109.0	35		28	128.6	145.5
10		50×30	85.8	108.6	36		30	126.5	135.2
11		20	81.0	98.4	37		12	128.6	145.5
12		25×25	82.9	100.3	38		20	121.8	123.8
13		20	94.8	100.8	39		20	127.1	140.7
14		20×30	97.3	109.9	40		20	123.0	141.5
15		35	116.0	130.0	41		50×40	128.6	137.4
16		20	116.0	127.0	42		50×28	133.6	145.4
17		30	116.0	130.0	43		22	133.2	145.5
18		30×20	88.2	103.9	44		20	126.5	135.2
19		30	94.5	112.3	45		25	125.5	137.3
20		20	102.7	114.0	46		45	133.2	135.7
21		14	116.0	127.0	47		22	120.8	131.5
22		30	116.0	127.0	48		30	125.0	136.3
23		30	116.0	127.0	49		20	121.8	128.5
24		26	90.5	103.6	50		28	123.9	135.5
25		25	96.4	112.6	51		30	134.3	159.0
26		30	103.3	117.8	52		30×20	94.5	112.0

基準レベル 652.5

古宇利原遺跡 タカラガイ製鍾出土一覧

単位: mm、g

No	貝 種	完 破	出 土 地 点				殻 底		孔		殻 厚	重 量	備 考	
			ト レ ン チ	Ⅱ	レ ベ ル	た て	よ こ	た て	よ こ					
1	ハナマルユキ	完	I	11	Ⅱ	10／20	32.5	25.0	23.0	17.1	9.9	5.4	風化	
2	＃	＃	＃	15	Ⅱ	＃	32.8	22.7	23.8	16.8	8.8	4.7	風化	
3	＃	＃	＃	＃	＃	＃	28.0	21.0	20.1	18.8	7.7	3.6		
4	＃	左	I・J	＃	＃	＃	33.6	—	—	—	10.0	(3.7)	風化	
5	＃	＃	＃	＃	＃	＃	29.5	—	—	—	7.5	(1.6)		
6	＃	完	J	18	＃	0／10	31.3	20.5	20.4	14.8	11.4	6.2	殻底中央打割	
7	＃	右	＃	＃	＃	＃	29.7	—	—	—	11.6	(3.1)	風化	
8	＃	左	＃	＃	＃	＃	36.7	—	(29.0)	—	9.2	(3.8)	殻底中央打割	
9	ヤクシマダカラ	左	＃	＃	＃	10／20	(48.2)	—	—	—	14.0	(6.8)		
10	ハナマルユキ(?)	右	＃	＃	＃	10／20	(28.2)	—	—	—	10.4	(2.3)		
11	＃	左	＃	＃	＃	＃	31.7	—	—	—	7.7	(2.7)		
12	＃	完	＃	＃	＃	＃	32.0	24.0	20.0	14.5	11.0	6.9		
13	＃	＃	＃	＃	＃	＃	32.0	24.8	18.6	15.6	11.1	6.9		
14	＃	＃	＃	＃	＃	＃	30.5	21.8	19.0	14.5	10.6	4.7		
15	＃	＃	＃	＃	＃	＃	31.4	23.8	20.7	13.9	9.8	6.8		
16	＃	＃	＃	＃	＃	＃	32.0	25.3	20.9	13.9	10.8	7.3		
17	＃	＃	＃	＃	＃	＃	35.8	25.4	24.8	15.8	11.5	8.7		
18	＃	＃	＃	＃	＃	＃	31.5	23.7	20.2	14.0	11.2	6.5		
19	＃	＃	＃	＃	＃	＃	32.1	23.1	20.5	14.6	10.6	6.3		
20	ハナビダカラ	＃	＃	＃	＃	＃	20.3	14.6	14.6	10.4	6.4	1.5	自然の感が強い。	
21	ハナマルユキ	＃	J・K	17・18	Ⅱ	—	35.6	26.6	21.6	16.3	13.8	9.8	殻底下部若干打割	
22	＃	右	＃	＃	＃	0／10	29.7	—	—	—	11.6	(3.1)		
23	＃	完	＃	＃	＃	＃	30.6	22.9	21.4	15.2	11.7	7.0	殻軸上、下端部研磨	
24	＃	＃	＃	＃	＃	＃	32.7	26.8	21.6	15.1	11.8	8.9		
25	＃	＃	＃	＃	＃	＃	30.5	23.5	20.1	13.2	10.1	6.6		
26	＃	＃	＃	＃	＃	＃	33.9	26.4	24.0	16.5	10.3	8.2		
27	＃	＃	＃	＃	＃	＃	33.8	26.7	22.5	15.2	11.4	8.3		
28	＃	＃	＃	＃	＃	10／20	30.4	23.0	19.6	13.5	11.8	6.4		
29	＃	左	K	16・17	Ⅱ	10／20	29.2	—	—	—	10.7	(2.9)		風化
30	＃	＃	＃	＃	＃	20／30	32.0	—	(22.0)	—	10.6	(3.6)		
31	＃	完	＃	17	Ⅱ	30／40	34.0	26.7	24.0	15.0	10.4	7.3		
32	＃	＃	＃	18	＃	10／20	32.6	24.5	22.8	15.1	10.8	6.9		
33	＃	＃	＃	＃	＃	＃	34.8	24.4	23.6	16.2	10.5	6.8	やや風化切味	
34	ハナビダカラ	＃	L	16～18	I	下 部	24.4	18.6	16.0	12.2	7.8	7.8		
35	ハナマルユキ	＃	第1号遺構石積中				29.7	23.4	18.7	12.7	10.0	6.5		
36	キイロダカラ	＃	第1号遺構構内				25.2	20.4	15.8	10.6	9.6	3.8		
37	ハナマルユキ	＃	不 明				27.8	20.8	18.5	12.2	8.1	3.9	殻軸上、下端部研磨	

<凡例>

- ① 一印は計測不可 —
- ② ()は残存部の計測
- ③ 「完・破」の項、完→完形、左→左側殻のみ、右→右側殻のみを示す。
- ④ レベルの項、10/20→10cm~20cmの意
- ⑤ 「殻厚」とは、殻底からの最大厚

※貝種の同定は、白井祥平著『原色沖縄海中動物生態図鑑』1977年6月を参照にした。

C. 貝 殻

番号	生息地 貝 種	層・レベル 個体数・g	表 採		I 層		II									
							0～10cm		10～20cm		20～30cm		30～40cm		40～50cm	
			個体数	重量 g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g
A	陸 産															
1	バンダナマイマイ						4	5	4	<5	△	<5				
2	ヤンバルマイマイ															
3	シュリマイマイ				5	10	5	5	5	15	△	<5	2	<5	△	<5
4	オキナワヤマタニシ		△	<5	8	10	69	155	41	107	△	<5	1	<5	△	<5
5	ツ ヤ ギ セ ル								1	<5						
6	オキナワウスカワマイマイ															
7	アフリカマイマイ															
B	淡 水 産															
a	河 口 泥 底															
1	カ ワ ニ ナ															
2	アマミカワニナ															
b	河 口 岩 場															
1	フネアマガイ															
2	カ ノ コ ガ イ										1	<5				
3	イシマキガイ															
c	マングローブ泥底															
1	キバウミニナ								1	<5						
2	イトカケヘナタリ															
3	センニンガイ				1	5										
4	シレナシジミ				3	43	10	157	8	285			2	20	△	<5
C	海 産															
a	潮間帯 砂・破泥地															
1	アラスジケマンガイ				2	<5	5	20		5	1	<5			△	<5
2	スダレハマグリ				△	<5	1	<5		10						
3	イソハマグリ		1	<5	8	3	12	3		9	1	<5	1	<5		
4	ナミノコマスオ														1	<5
b	潮間帯 岩礫・岩礁地															
1	クルマガサ						△	<5	1	<5			△	<5		
2	オオベッコウガサ								△	<5					△	<5
3	コウダカカラマツ															
4	キバアマガイ						△	<5								
5	オオマルアマオブネ															
6	クワノミカニモリ				9	15	9	10	3	<5	1	<5	2	5		

層								遺構内		10～20		20～30		30～40		遺構周辺		合 計	
50～60cm		60～70cm		70～80cm		80～90cm		0～10											
個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g
												△	<5	1	<5			9	5
								2	<5	1	<5	2	5	△	<5	7	20	29	55
△	<5					1	<5	37	95	4	30	334	915	135	435	158	351	788	2,098
																		1	<5
										1	<5	1	<5	2	<5			5	<5
										△	<5							1	<5
										△	<5							1	5
△	<5	2	20			1	5	5	65	18	378	22	435	6	80			77	1,488
1	<5	1	<5					2	5	6	20	5	10	2	25	4	15	33	100
										3	16					1	<5	8	26
1	<5							8	10	12	15	13	125	7	20	1	<5	75	185
																		1	<5
										△	<5	△	<5	1	<5	△	<5	2	<5
										△	<5	1	5			△	<5	1	5
										1	<5							1	<5
														1	<5			1	<5
										△	<5							24	30

番号	生息地 員種	層レベル 個体数・g	表 採		I 層		II									
			個体数	重量g	個	g	0～10cm		10～20cm		20～30cm		30～40cm		40～50cm	
							個	g	個	g	個	g	個	g	個	g
7	カヤノミカニモリ															
8	オオシマカニモリ															
9	ウネレイシガイダマシ															
10	ハナヒラダカラ						6	20	2	5						
11	フジダカキイロダカラ								2	5						
12	ノシガイ															
13	アツムシロ															
14	マダライモガイ				1	<5	3	10	3	20			1	<5		
15	サヤガタイモ				2	<5	2	<5	1	<5						
16	ニセマガキ				△	<5	△	25	△	263					△	<5
17	オハグロガキ				△	<5	4	80	△	45			△	<5		
18	コイハニシ															
19	コウシレイシダマシ															
20	レイシダマシモドキ															
21	ヒザラガイの一種				△	<5										
c	潮間帯															
1	イシダタミ															
2	カンギク						2	5								
3	コシダカアマガイ	1	<5	2	<5	3	<5									
4	アマオブネ			1	<5	2	<5	2	<5							
5	ニシキアマオブネ					1	<5	2	<5							
d	潮間帯下 砂・砂泥地															
1	オオウラウス			1	10	3	45									
2	トウガタカニモリ								1	<5						
3	ヒメトウガタカニモリ					10	18									
4	ヨコワカニモリ															
5	オニツノガイ			2	166	2	20	△	10							
6	コオニツノガイ			1	<5			2	<5							
7	マガキガイ	1	15	33	765	117	2,540	116	2,049	1	10	14	234	1	10	
8	スイショウガイ															
9	オハグロガイ			2	<5	6	20	4	10							
10	ネジマガキ			2	20	2	10	△	<5	△	<5	1	5			
11	ヒダトリガイ															
12	ウラスジマイノソデガイ															
13	ベニソデガイ					1	25									

[illegible]

番号	生息地 貝種	層・レベル 個体数・g	表 採		I 層		II									
			個体数	重量 g	個	g	10～20 cm		10～20 cm		20～30 cm		30～40 cm		40～50 cm	
							個	g	個	g	個	g	個	g	個	g
14	イボソデガイ						5	90	3	65						
15	スイジガイ				△	150	1	59	1	85						
16	クモガイ		△	30	1	495	△	230	3	210					△	10
17	リスガイ						1	<5	1	<5	1	<5				
18	トミガイ						1	<5								
19	シロヘソアキトミガイ						1	<5								
20	ウズラガイ															
21	オリイレムシロ															
22	ヒメオリイレムシロ						1	10								
23	ヒメヨウバイ															
24	サツマビナ				1	5	1	10	1	10						
25	ハマヅトガイ															
26	ハイロミノムシ															
27	ヒメチョウセンフデガイ						△	20	2	30						
28	トラフクダマキガイ															
29	シャジクダマキ															
30	ヒトスジツノクダマキ															
31	ハルシャガイ						1	20								
32	アンボウクロザメ				△	5	8	160	3	167						
33	クロザメモドキ						1	5								
34	クロフモドキ								△	10						
35	クロミナシ				△	<5	3	44	△	<5						
36	ミカドミナシ						△	<5								
37	コモンイモ						1	5	1	5						
38	ゴマファイキ						1	15								
39	アカシマミナシ						1	80	△	25						
40	サラサモドキ															
41	ナガサラサミナシ						1	10	△	35						
42	ヤセイモ															
43	カバミナシ				1	40										
44	ロウソクガイ				1	10	4	10	1	10			1	10		
45	オトメイモ						1	75								
46	ニシキミナシ				△	5	△	45	△	<5						
47	ヒラマキイモ															
48	ロウソクイモ															

層								遺構内		10~20		20~30		30~40		遺構周辺		合 計	
50~60cm		60~70cm		70~80cm		80~90cm		0~10											
個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g
																		8	155
										△	95	△	<5			△	70	2	459
		△	<5					△	35	2	490	3	163	△	<5	△	180	9	1,843
																		3	<5
										1	<5							2	<5
																		1	<5
																		1	10
																		3	25
																		2	50
												4	15					5	35
										1	620	1	227	△	35	△	389	13	1,603
																		1	5
																		△	10
										1	10			1	5			5	59
																		△	<5
																		2	20
																		1	15
																		1	105
																		1	45
																		1	40
																		8	50
																		1	120
																△	<5	△	50

番号	層・レベル 生息地 貝種	個体数・g	表 採		I 層		II									
			個体数	重量g	個	g	0～10cm		10～20cm		20～30cm		30～40cm		40～50cm	
							個	g	個	g	個	g	個	g	個	g
49	タガヤサンミナシガイ															
50	アンボイナ															
51	ヒモカケセコバイ															
52	ベニタケガイ															
53	タケノコガイ															
54	リュウキュウタケ															
55	キ バ タ ケ								1	15						
56	ナツメガイ															
57	リュウキュウサルボウ				8	135	7	130	10	339	1	5				
58	ミ ノ ガ イ															
59	ウラキツキガイ															
60	ツ キ ガ イ				1	<5			△	<5						
61	クチベニツキガイ															
62	カワラガイ				1	10	4	70	3	20			1	5		
63	リュウキュウザルガイ				△	<5	△	<5	1	<5						
64	シ ャ ゴ ウ				3	1,305					1	410				
65	ヌノメガイ				△	<5	1	60	1	55					1	5
66	アラヌノメ															
67	ヒメアサリ															
68	カノコアサリ				△	<5			△	<5						
69	スリガハマ															
70	マルオミナエシ								1	5						
71	ウスハマグリ								2	9						
72	アツシラオガイ				6	20	7	40	9	30			1	<5		
73	リュウキュウバカガイ								1	<5						
74	マスオガイ				1	<5	2	25	3	<5						
75	リュウキュウマスオ				2	15	11	76	15	108			△	<5	1	<5
76	サ メ ザ ラ				△	<5	1	<5	△	<5	△	<5				
77	モチヅキザラ				△	<5	1	5	3	20						
78	リュウキュウシラトリ				△	<5	△	<5								
79	ヒメニッコウガイ															
80	ヤツシロガイ科															
81	オリイレヨフバイ科の一種				△	<5										
82	〃															
e	潮間帯下 岩礫・岩礁															

層								造構内		10~20		20~30		30~40		造構周辺		合 計	
50~60cm		60~70cm		70~80cm		80~90cm		0~10											
個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g
										△	<5							△	<5
																		1	15
										△	20	△	<5	2	100	1	10	29	739
										△	<5	△	<5					△	<5
																		1	<5
										△	<5					△	<5	9	105
										△	<5							1	<5
												△	25					4	1,740
										△	5	△	15			1	35	4	175
										△	<5							△	<5
																		△	<5
																		1	5
										△	<5							2	9
										16	100	23	155	12	95	8	55	8282	495
												1	<5					2	<5
										1	<5	4	<5	1	<5	1	5	14	30
		△	<5					7	28	31	183	37	135	19	5			123	550
										△	10	△	<5	△	<5			1	10
								1	<5	10	89	8	55			9	40	32	209
												2	<5					2	<5
																		△	<5

番号	層・レベル 生息地 個体数・g	表 採		I 層		II									
						0～10cm		10～20cm		20～30cm		30～40cm		40～50cm	
		個体数	重量 g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g
1	マ ア ナ ゴ									1	5				
2	ニシキウズ							1	1,039						
3	ムカシタモト			1	<5										
4	ウキダカラ							1	<5						
5	カモンダカラ					△	<5								
6	ハナマルユキ			△	5	8	70	5	50	1	5				
7	コモンダカラ					2	25	△	<5						
8	ホシキヌタ							1	25						
9	クチムラサキダカラ														
10	ホシダカラ			△	29	△	15	△	35						
11	シ オ ボ ラ														
12	ミツカドボラ			1	35	2	<5	1	10						
13	オ キ ニ シ					3	90	△	15						
14	シロレイシガイダマシ														
15	クチムラサキサンゴヤドリ														
16	ヒメムシロ														
17	カスリシマベッコウバイ														
18	イトマキボラ							1	<5						
19	ナガイトマキボラ					△	20	△	<5						
20	コオニコブシ			4	75	6	164	6	110						
21	クロイトマキハラブトシャジク														
22	コマグライモガイ					3	5	2	10						
23	アラレイモ			1	5										
24	ヤナギシボリイモ			△	10	2	40	1	65						
25	サラサミナシ			1	<5	△	<5	△	<5						
26	イボシマイモ			3	25	8	115	5	65	2	25				
27	エ ガ イ			1	<5	4	<5	2	<5						
28	コ ネ ガ イ					1	<5	△	<5						
29	ソメワケグリ			14	114	49	364	52	615	8	35	1	<5	1	<5
30	リュウキユウヒバリガイ					△	<5	△	<5						
31	シュモクアオリ														
32	メ ン ガ イ			5	75	13	480	5	240	△	15	1	15	1	10
33	ト マ ヤ ガ イ			1	<5										
34	シ ラ ナ ミ			1	2,355	9	6,887	3	5,013	1	640	△	507	2	455
35	ヒ メ ジ ャ コ			2	20	2	25	2	24	△	<5				

層								遺構内		10~20		20~30		30~40		遺構周辺		合 計	
50~60cm		60~70cm		70~80cm		80~90cm		0~10											
個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g
																		1	5
										2	88	2	40			3	172	8	1,339
																		1	< 5
																		1	< 5
																		△	< 5
										△		2	15	3	45			19	190
												17	355					19	380
										1	240							2	265
								△	10			△	26			△	85	△	200
																△	< 5	△	< 5
										1	10							5	55
										△	5	△	15			△	< 5	3	125
												1	< 5					1	< 5
										1	345					1	100	3	445
										1	30	△	10	△	10	1	55	2	125
										5	125	1	35	2	30	4	90	28	629
										1	< 5							6	15
																		1	5
								15	32	2	45	1	25					21	217
																		1	< 5
										1	10	1	< 5			1	10	21	250
								2	< 5	1	< 5	1	< 5			2	< 5	13	< 5
						1	< 5									1	< 5	3	< 5
1	< 5			1	< 5					11	110	3	10	2	15	10	86	153	1,349
																		△	< 5
1	< 5	△	< 5					1	< 5	12	523	2	1,620	△	35	1	5	42	3,018
																		1	< 5
△	160	△	219	△	85	△	240	1	1,090	3	4,147	3	2,720	1	860	9	20,209	34	45,587
												△	40			△	5	7	102

番号	生息地 貝種	層・レベル 個体数・g	表 採		I 層		II									
			個体数	重量g	個	g	0～10cm		10～20cm		20～30cm		30～40cm		40～50	
							個	g	個	g	個	g	個	g	個	g
36	キヌカツギ				△	10	1	10	3	34						
37	リュウキュウヘビガイ															
38	カキの一種															
39	ウミギクの種類															
f	潮間帯下（リーフ外）砂地															
1	アツソデ															
2	ゴホウラ						△	85	△	32						
3	ラクダガイ															
4	スクミウズラ															
5	ショクコウラ								1	30						
6	ダイミョウイモ															
7	フミガイ				△	<5										
g	潮間帯下（リーフ外）岩礁															
1	ムラサキウズ				1	25	2	40	2	15						
2	ギンタカハマ				△	<5	1	90	1	50	50	5				
3	ベニシリダカ						2	170	1	<5						
4	サラサバテイ		△	10	△	90	△	430	351	524			1	360	△	29
5	チョウセンサザエ				6	513	28	1,570	122	1,030	1	90	1	125		
6	チョウセンサザエのフタ				17	113	65	459	95	643	1	10	6	35	1	<5
7	ヤコウガイ				△	60	△	10	△	105	△	40			△	<5
8	ヤコウガイのフタ						1	345	△	<5						
9	コシダカサザエ															
10	ソメワケカタベガイ															
11	カタベダマシ															
12	アツキクスズメ															
13	ウミウサギ															
14	ヤクシマダカラ				△	5	△	5	1	70						
15	ホラガイ		△	5	△	10	△	40	△	25						
16	ホソスジテツボラ															
17	シロナルトボラ															
18	オオナルドボラ															
19	テングガイ															
20	ツノレイシ				△	5	1	30	2	5						
21	キマダライガレイシガイ															
22	アカイガレイシガイ				△	<5			1	10	1	20				

番号	生息地 貝 種	層・レベル 個体数・g	表 採		I 層		II									
							0～10cm		10～20cm		20～30cm		30～40cm		40～50cm	
			個体数	重量g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g
23	ガンゼキボラ						△	<5								
24	キヌヨウバイ															
25	チトセボラ						1	5			△	<5				
26	アラレベニマキ															
27	ツノマタモドキ						△	5	1	<5			1	15		
28	オニコブシ				1	50	7	220	1	55	1	15	1	10		
29	ハ ナ イ モ															
30	ツ ボ イ モ						△	<5								
31	オオタカノハ						4	10								
32	ヒレインコ															
33	クロチョウガイ				△	5	1	136	2	60			1	<5		
34	チサラガイ															
35	シャコガキ	△	45	2	935	6	3,510	2	1,992	2	700	△	334			
36	ベ ニ ガ キ															
37	イシガキモドキ															
38	ケイトウガイ				4	160	7	55	2	65	△	<	2	15	△	10
39	ヒレジャコ														△	75
40	ククリボラの一種															
h	種 不 明															
1	陸産マイマイ															
2	タカラガイ科				△	25	4	100	1	45	△	<5	△	5		
3	タカラガイ科 (大形)						△	5								
4	イモガイ科				8	171	39	590	17	352	1	15	△	80	△	<5
5	イモガイ科 (大形)				1	100	△	70							1	25
6	イトマキボラ科				△	<5										
7	アツキガイ科				△	<5	1	30	5	60						
8	ソデガイ科								△	5						
9	シャコガイ科						△	149								
10	巻 貝				△	5	20	<5	△	15	△	<5	△	<5		
11	二 枚 貝				1	<5	3	5	5	15	1	<5				
12	他	△	<5	△	155	△	285	△	313	△	15	1	10	△	60	
	合 計		3	105	186	8,427	653	21,226	987	16,967	29	2,060	43	1,790	10	689

層								遺構内 0~10		10~20		20~30		30~40		遺構周辺		合 計	
50~60cm		60~70cm		70~80cm		80~90cm		個	g	個	g	個	g	個	g	個	g	個	g
																		△	<5
										△	<5							1	5
																1	5	3	25
						1	5			4	150	5	175	△	5	3	105	24	790
														1	10			1	10
																		△	<5
										1	<5							5	10
		△	<5									△	<5			1	15	1	15
△	<5							△	50	△	5	△	<5	△	<5	△	<5	4	256
△	130	△	10	△	55			2	607	10	8,340	1	3,310	△	480	16	17,104	41	37,552
										8	95	8	135	1	55	12	220	44	810
								2	2,900			△	132					2	3,107
														△	<5			△	<5
								△	<5									△	<5
						△	<5			28	53	1	75	△	10	1	20	35	333
																		△	5
		1	5			△	<5	△	<5			8	82	1	30	4	55	79	1,380
										2	120	2	160			△	70	6	545
																		△	<5
						1	<5							△	5			7	95
																		△	5
								△	80									△	229
				△	<5					△	15	△	<5			△	<5	20	35
						△	<5			2	10	△	<5					12	30
△	15	△	10	△	5	△	<5	△	<5	5	250	△	238	△	85	△	85	6	1,526
4	335	8	348	5	280	9	320	101	5,399	342	20,791	636	14,174	237	2,956	331	42,216	3,579	138,078

(5)先史時代の遺構

A. 環状集石遺構

先史時代に属する明確な遺構は、環状集石遺構の一基であった。遺構内からは、骨製品、貝製品、石器、土器、獣魚骨等の自然遺物が多く検出された。

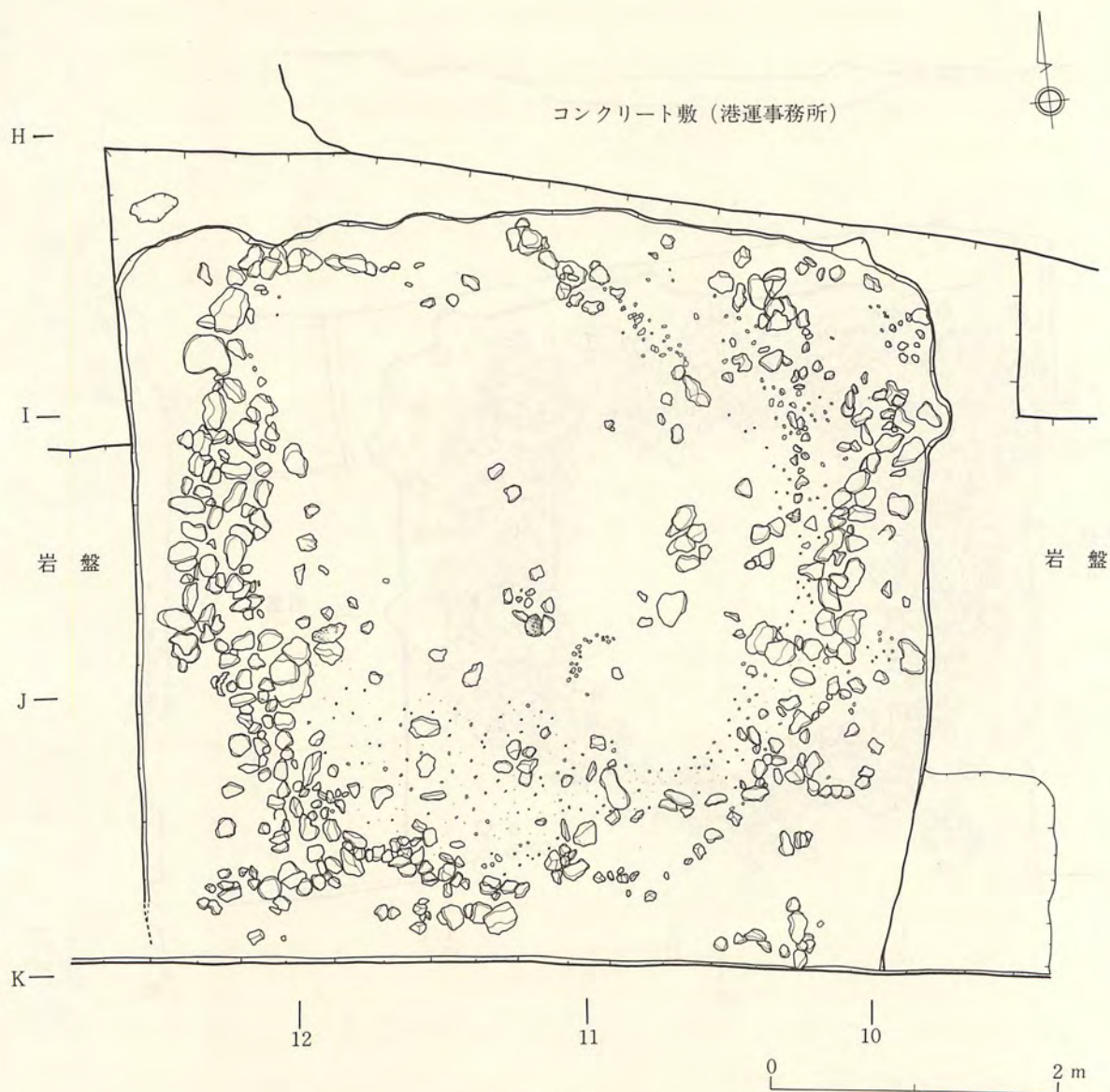
I・J・K-9・10・11・12の計12グリットの表土層（層厚4～10cm）直下に暗褐色土が露呈した。これは部分的なもので周辺のグリットでは表層直下に岩盤が広がり、当初は、岩盤の窪やもしくはフィシャー等に堆積した包含層として考えられた。そのため10cmレベルで掘り下げた結果、第9図に示す様な環状に礫を配した遺構を確認することができた。遺構面は北側から南側へ傾斜していて、周辺の岩盤の傾斜と一致してみられる。ところで発掘前から12トレンチラインのみ北から南方向に流れる雨水の溝が存在し、当初は流石の集石カ所かと思われていたが、このレベルで遺構の一辺を構成していることが理解された。なおこの部分のみは上記のように地上に露出していたため、攪乱と礫の風化がみられた。

遺構内は、黒褐色土層が堆積し、層中より、土器（伊波式、荻堂式、大山式、室川式、宇佐浜式、嘉徳Ⅰ式、嘉念Ⅰ式）、石器（石斧、カミソリ状石器、砥石、石皿、敲打器）、骨製品（骨錐、骨針、骨検、骨牙製腕輪）、貝製品（貝輪、貝製ヤス状製品、符状貝製品、二枚貝有孔製品、ホラガイ製容器）等の人工遺物とともに獣魚骨や、まとまりをみせない石灰岩礫が多く出土した。なお遺構内の堆積土は、土質、色調、遺物の出土に変化をみることができず一様に粘着性の強い黒褐色土からなっていた。基盤（床面）は平坦になり2～3cmの黒色土が岩盤の上にのるかたちをとっている。

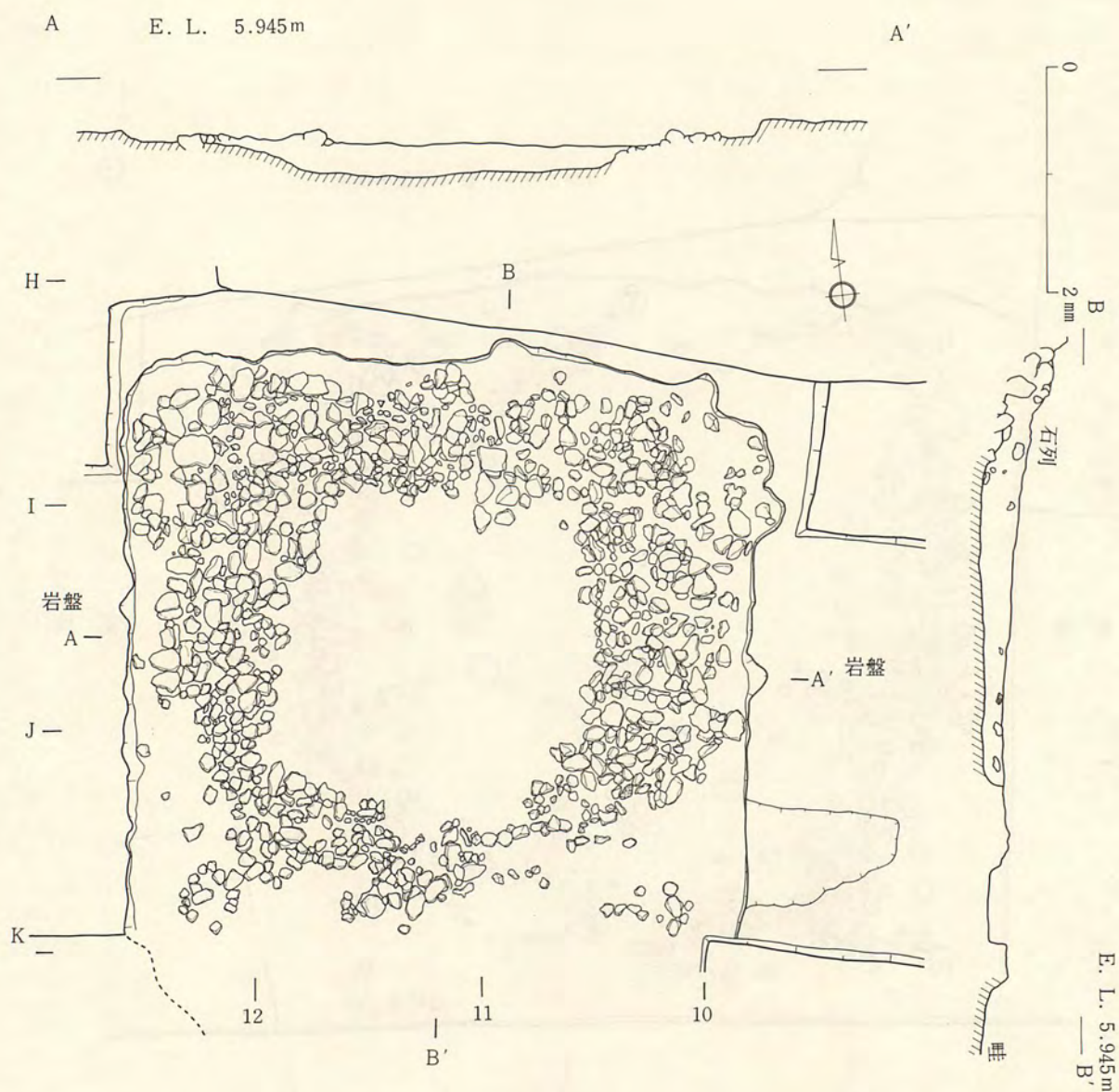
遺構内の黒褐色土層の発掘後は、第10図に示すごとく、環状の集石をみるにいたった。北側でやや方形をかたちづくり、南側でやや円みをもっている。礫の集石は、外周縁部が遺構面で最も高く、内側に向かうにしたがって低くなっている。ただし南辺部は、礫の積み上げがみられずたんに50cmの幅の集石をみるだけである。したがって遺構全体観は、遺構上面は北が高く漸次南側へ傾斜をなしている。床面は水平方向にある。検出された遺構の規模は、外径（東西×南北）5.5m×4.8m、内径（東西×南北）2.7m×2.6m、礫幅0.5～1.6m、内面積7.02㎡を測る。

遺構の取りはずしは、遺構内の北側中央部から実施した。結果、内面側の小礫が多く外側に比較的大きなものを使用するもので、礫間はいずれも密にある。最終的には第11図にあらわした様に外周礫は列をつくることが知られた。しかし東西南北の4辺は石列のあり方に若干の違いが存在する。西側は立方形（大きさ30cm）の大形礫を立て並べているのに対し、北側は扁平小礫を6数段積み重ね並べてある。一方東側はやや雑然と積み上げたものでキリツ性はみられない。南側は先にも触れたが、あいまいである。なお遺構の下部の礫はいずれも直接、基盤の岩盤に接するものではなく、2～3cmの暗褐色土にのっている。遺構を構成する石質は、石灰岩を主体とするものであるが、なかに粘板礫、サンゴ礫砂岩（石器）等が使用されている。

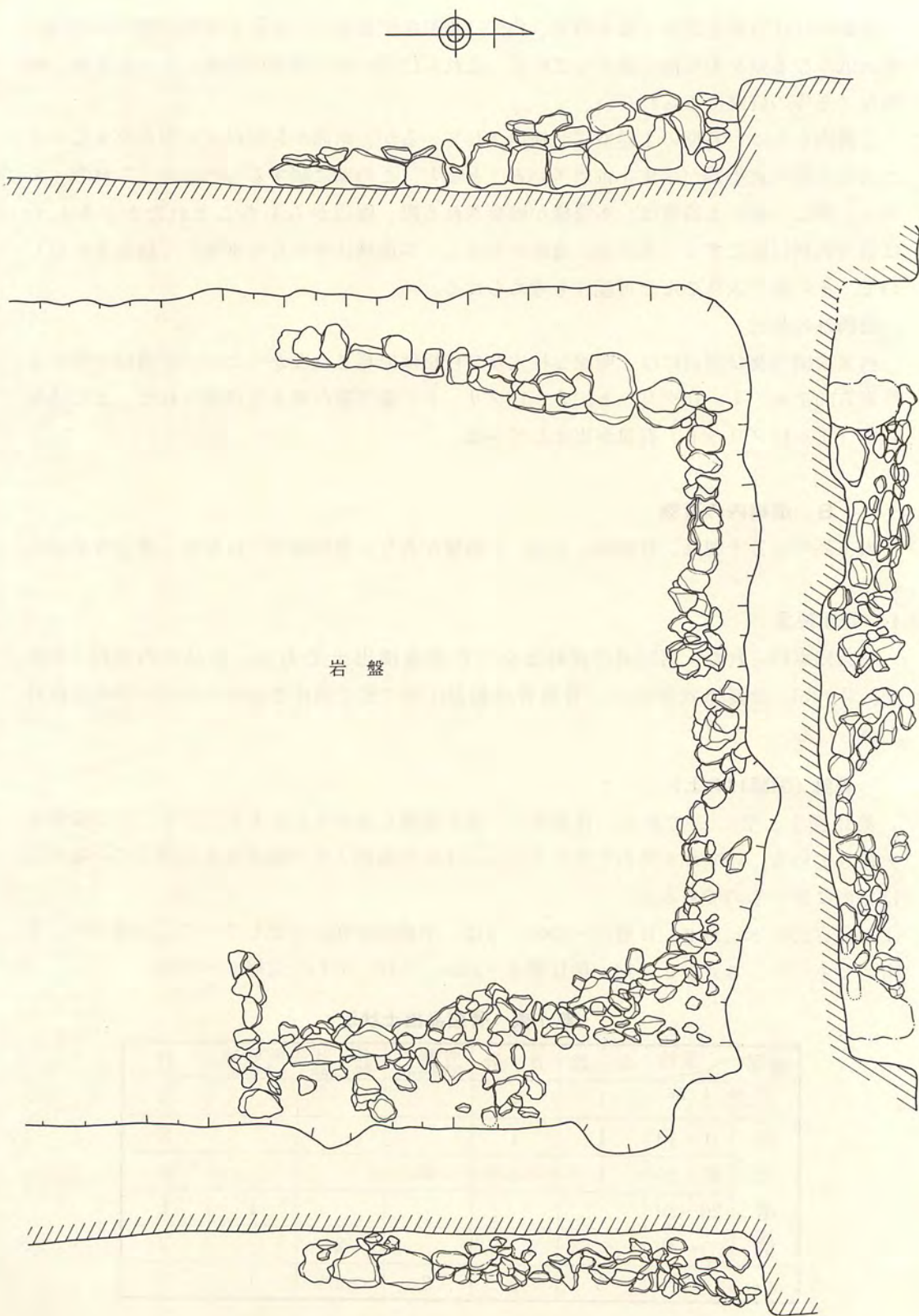
当遺構は第11図に示す様に遺構を取りまく様に岩盤が存在する。遺構との間幅は10cm～60cmをたもっている。暗褐色土はその間にも堆積し、遺物が検出された。基盤の岩は、



第 9 図 環状遺構暗褐色土層10cmレベル平面図



第10図 環状集石遺構



第11図 環状集石遺構

平面観はほぼ方形をかたどるもので、北側に垂直な壁を有し、平行する東西側に南方向に漸次低くなる壁をもち南へ開方している。これらは何らかの調整の結果とみられるが、明瞭なノミ等の痕跡はみられない。

遺構内からは、各期の土器型式が検出されているが、床面から室川式土器が出土し、また層中も室川式土器が主体を占めていることなど、この期に属するものと考えられる。室川式土器より古い土器等は、本遺構が破棄される際、周辺からもちこまれたか、もしくは室川式期以前にすでに当該地に遺跡が存在し、本遺構はそれらを破壊して構築されたもので、その際に入りこんだ可能性も考えられる。

遺構外の状況

当該遺構内及び周辺には、明瞭な柱穴及び柱根は発見されなかったが、本遺構の中心より東方向7m、I-16グリット、J-16グリットの最下層が焼土を検出された。また隣接して(J-17グリット)石皿が出土している。

B. 遺構内の遺物

人工品では骨牙製品、貝製品、石器、土器等があり、自然遺物では獣骨・魚骨等が得られた。

1. 骨牙製品

総数13点得られた。第12図の資料は全て石組遺構出土である。製品の内訳は、骨錐(3)、骨針(5)、骨製棒状製品(2)、骨製管状製品(1)等で他に細片で全体の形状が不明な資料(1)からなる。

骨錐(図版10の上)

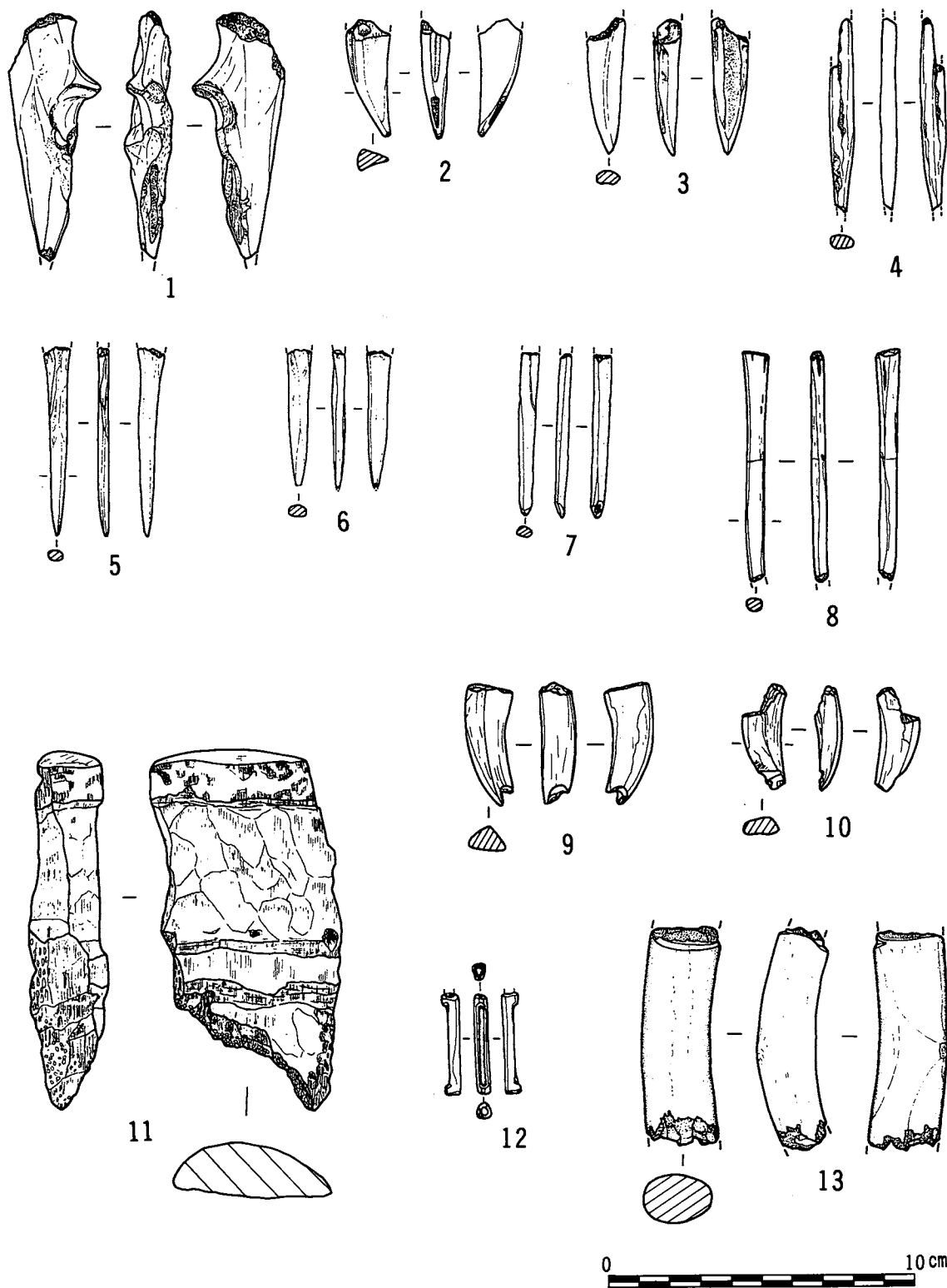
第12図1. 2. 3である。長管骨の一端を磨研し尖がらしたもので、2、3は基部を欠落している。いずれも光沢を呈している。1は先端部とその側面部を欠損しているがほぼ完形に近いものである。

1は残存長8.2cm、14g、II層10～20cm。3は、半断面が光沢を呈していて二次使用によるものであろう、3g、J-14、第II層0～10cm。2は、3.7g、II層0～10cm。

第7表 骨製品出土状況

層序	遺物	骨 錐	骨 針	骨製棒状製品	骨 牙 品	骨製品(その他)	計
遺 構 上 部 (グリット)		1	1				2
環 状 遺 構	0～10	1	1				2
	10～20	1	3	2			6
	20～30					1	1
	30～40				2		2
小 計		3	5	2	2	1	13

総数13点得られた。第 図の資料は全て石組遺構出土である



第12図 骨牙製品

骨針（図版10の下）

当製品においても完形資料はみられなく、先端部を残すもの4点、両端部を欠失し胴体部を存するもの1点からなる。

第12図4、5、6は一端に向かい漸次、鋭く尖がらしたもので、その先端は円錐状になっているが、7は端部においてのみ磨研を加え尖がらしたもので若干形状に違いがみられる。7の先端は多面的研磨をそのまま残し幾つかの稜線がみとめられる。本資料は中央部から折損したものである。8は同じく中央部分から折れたもので、形状から推すと胴部から頭端部に移向するものである。5は遺構内0～10cm。4は遺構内10～20cm。6、7はJ-12、II層10～20、8は遺構内II層20～30cm出土。

イノシシの牙製垂飾品（図版11の3）

第12図9、10に示したもので、一方の端部に両側面から孔を穿った製品である。両先端とも欠損しているため、孔の数、基部の整形については不明。器面は光沢を有する。色調は黄褐色。遺構内石組部分から検出

骨製棒状製品（図版11の1、2）

第12図11、13の二資料で形態は異なるものであるが説明の便宜上、棒状を呈するものという判断でこの項に入れた。11は大形獣の骨髄を素材としたものであるが、基部側を残し、しかも半截するように器面は一面のみ残存する。残された器面には、横位の帯状の快りを削りにより彫り出だしてある。現在は二段みることが出来がさらに数段あったのであろう。類例品は地荒原遺跡(注1)、渡喜仁浜原遺跡にみられる。第II層20cm99.6g。

第12図13は長管骨の一部に快りを入れた製品で、器面に磨研もほどこしているが、細孔のため全体の形状は不明である。骨髄部は化石化していて重量観がある。重量36g 遺構内第II層20～30cm。

骨製管状製品（第12図12）

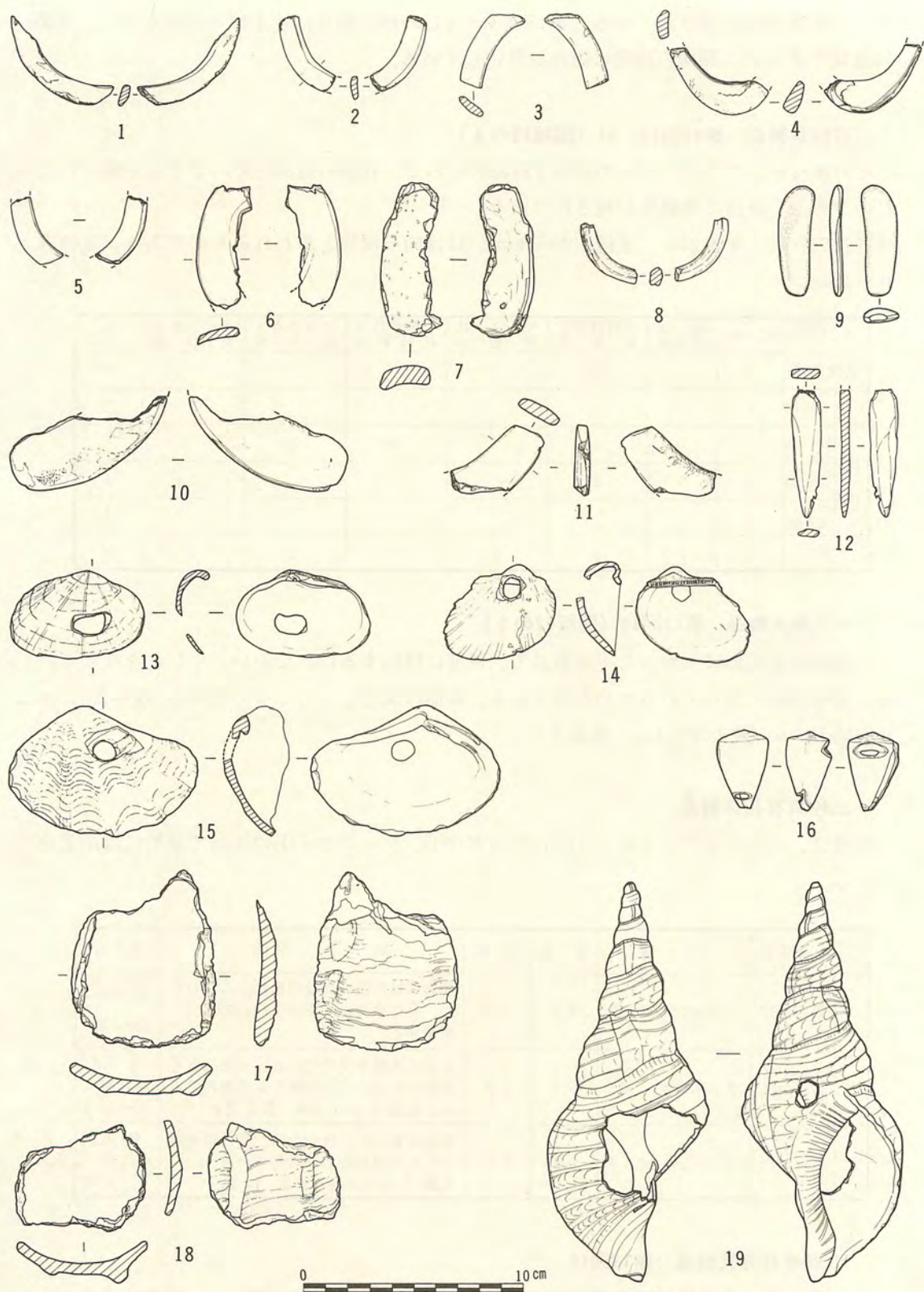
厚さ1mmの細い骨を、両端の管部は残し、その中央部を長軸に半截した製品である。全長3.3cm光沢がみられる。重量は600gと小物である。第I号遺構、石組内

b. 貝製品

貝製品は総数18点検出された。内訳は、貝輪(8)、符状貝製品(2)、二枚貝有孔貝製品(3)、小形巻貝有孔貝製品(1)、ヤコウガイ製貝匙(2)、ホラガイ製容器(1)ヤス状貝製品(1)等がある。

貝輪

8点の資料とも環状の一部のみを残した欠損資料であるが、形状、色調等から第13図1～8、図版13の下は、ゴホウラ貝を素材とするもので、第13図8は、イモガイを素材とするものであることが判断された。第13図6・7は作成段階にあるもので一部研磨



第13図 貝製品

痕と打割整形痕が残されている。第13図1～5は一樣に細身に仕上げられたもので、研磨は良好であるが、器面の風化は進み白色化している。

符状貝製品 第13図10、11（図版12の5）

その素材が、サラサバティの殻口下段部のもので、自然の湾曲をそのままに平扁にしたものである。両面に研磨痕が残されている。

残存長7.7cm、重量24g、遺構内20～30cm、11は同一個体と思われるものである。遺構内0～10cm。

器種	貝 輪	符 状 貝 製 品	二枚貝有孔 貝 製 品	ヤ ス 状 貝 製 品	小形巻貝有 孔 貝 製 品	ヤコウガイ 製 貝 匙	ホ ラ ガ イ 製 容 器	計
遺構上部	2		2					1
遺 構 内	0-10	1						1
	10-20				1	2		5
	20-30	1	1	1			1	4
	30-40	2						3
計	8	2	3	1	1	2	1	18

ヤス状貝製品 第13図12（図版12の3）

一端部が流尖形に尖がった平扁製品で、基部に移向するにしたがい、くびれをなしている。基端部は欠落しているため不明である。器面は風化しもろくなっている。残存長5.2cm 残存幅1.2cm、最大厚0.4cm、重量5g。

二枚貝有孔貝製品

貝種は、リュキュウマスオガイ(1)、ザルボウ(1)、シャコガイ(1)の3種で量的には微量といえる。

	図版番号	貝 種	殻 長	殻 高	特 徴	出土層
1	第13図13	リュキュウマスオガイ	6.0	4.0	腹縁部は欠落。比較的風化はみられない。孔は中央より下方。径1.5×1.0 重量4g。	第II層 20～30cm
2	第13図14	ザ ル ボ ウ	5.3	3.9	全面に水磨を受けている。一部腐食も認められる。孔は内側から穿たれている。孔径0.8×0.8cm 重量12g	K-18 第II層 0～10cm
3	第13図15	シャコガイ	8.4	5.6	器面は風化し、角がない。孔は中央右よりに内側からあけられている。孔径1.0×1.0cm 重量44.2g	K-18 第II層 0～10cm

小形巻貝有孔製品 第13図16

小形イモガイの体層部に水平方向の、断面がV字状の孔を穿っている。孔の大きさは、0.6×1.5cmをはかる。器面は風化が著るしくもろい。殻長3.5cm、重量4.7g。

ヤコウガイ製貝匙 第13図17、18

ヤコウガイの体層部を素材としたもので、打割調整のみが認められる匙の破損資料である。基部側が欠損している。研磨は一切みられない。2個分で、いずれも遺構内10～20cmレベルで検出された。

ホラ貝製容器 第13図9

殻口側の体層部に、粗孔(0.9×1.2cm)を穿った資料であるが、殻口と相対応する体層面は大きく割れている。殻長18.3cm、殻口径3.5×7.4cm、重量100g 遺構内出土。

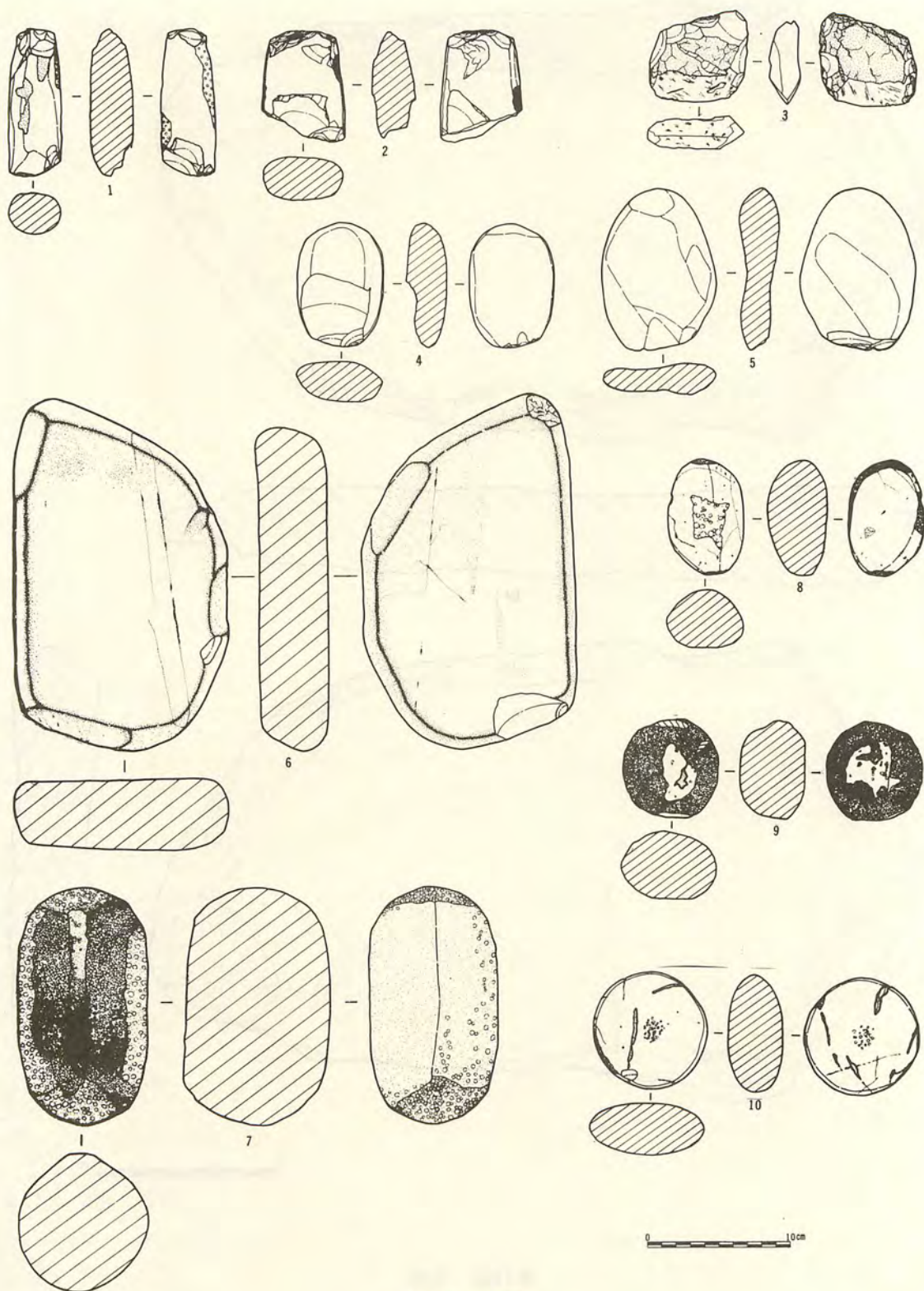
3. 石 器

遺構内から総数37点検出された。器種は石斧(3)、カミソリ状石器(2)、砥石(1)、石皿(1)、敲打器(5)、磨石片(17)、の5種からなる。以下記述は表で示す。

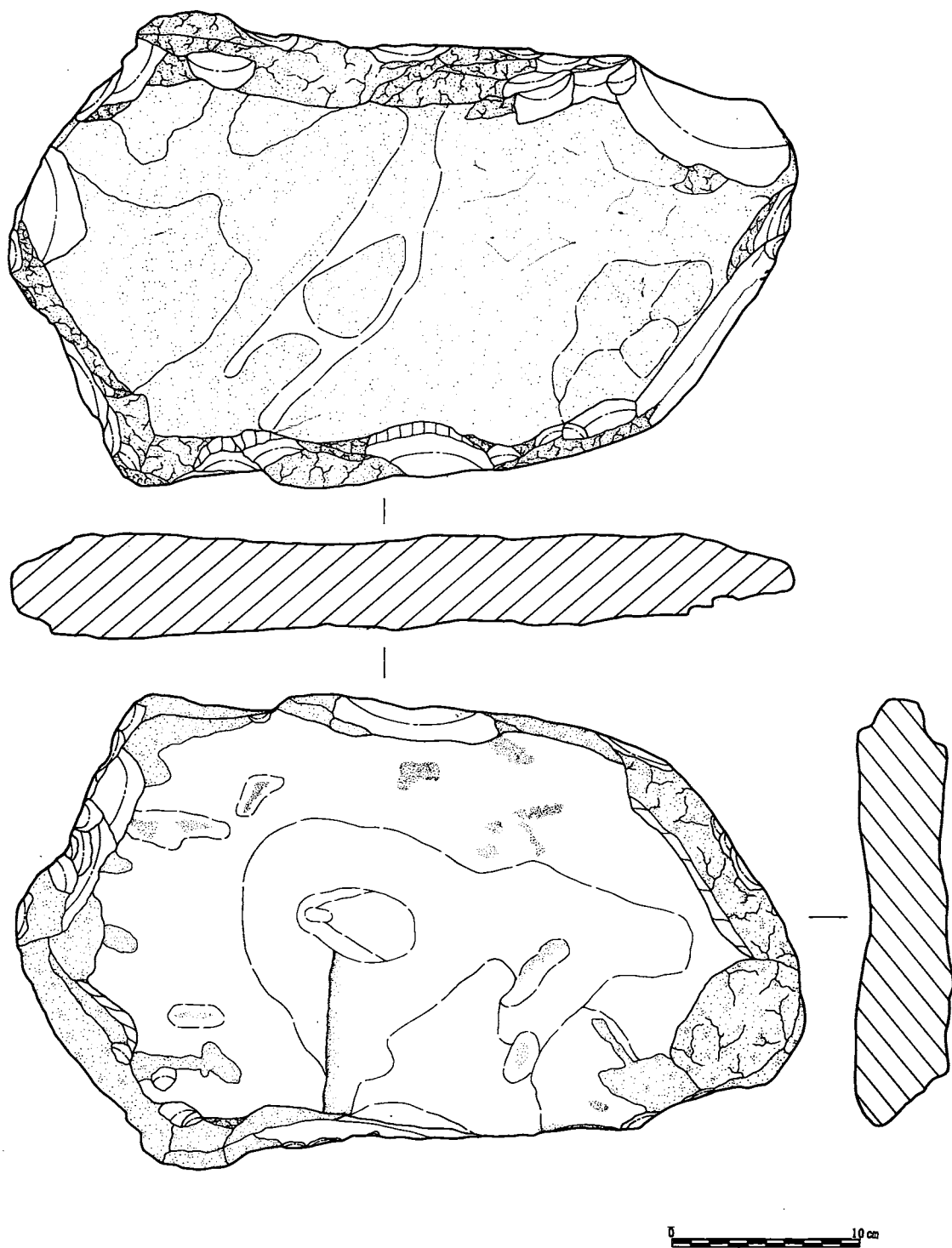
遺構	器種 レベル	石 斧	カミ ソリ 状 石 器	砥 石	石 皿	磨 石	凹 石	敲 打 器	磨 石 片	計
環 状 遺 構	0-10		1		1			1	2	5
	10-20	3	1					1	12	17
	20-30			1				3	3	7
	30-40									0
小 計		3	2	1	1	0	0	5	17	29

番号	器 種	出 土 地 トレンチ 層レベル	最大長 最大幅 最大厚	重量	石 質	事 項
図 版 15 上	カミソ リ 状 石 器	K-11 II層10-20	4.2 3.8 0.5	14	片 岩	欠損資料。板状の薄い礫を素材としたもので、一縁端部に研き出したものであるが、刃縁部は研磨がなされつづれ平面を有する。側縁は稜を有する研磨がなされているが剥離痕は消されずに残してある。遺構直上出土であるため遺構遺物に属しめた。
図 版 15 中	〃	環状遺構 II層10-20	4.8 2.3 0.3	5	片 岩	刃部の一部を欠く以外はほぼ完形資料である。長軸の両縁部に刃を附すもので一方面からの研磨が著るしく片刃をなしている。両平面と側面は研磨がなされている。
図 版 15 下	石 材	〃 II層0-10	2.5 5.8 0.3	20	片 岩	素材となる礫に研磨擦痕が認められるためとりあげたもので、加工による形態は未だ存在しない。

第14図	石 斧	A 環状遺構 II層10-20	10.4 3.7 2.95	200	斑レイ岩	棒状の石斧で刃部を大きく欠く。横断面は円形に近い。研磨は丁寧になされているが側面は細かな敲打がなされている。基部周辺は大きな打裂痕が覆うが基端部は敲打面になっている。一方破損した刃部側も敲打でつぶされている。前記3資料と同形態を有し、石斧の転用石器の可能性をもっている。
2	石 斧	A 環状遺構 II層10-20	7.8 2.95 3.3	255	砂 岩	基部及び刃部を欠損した石斧片。横断面は隅九方形を呈している。研磨は光沢を有するほどになされ側面には稜が認められる。なお基裂部及び刃部のいずれも細かな敲打がなされ、鋭い打端面はみられない。本資料も転用石器をうかがわしめる。
3	石 斧	A 環状遺構 II層10-20	6.5 6.6 2.3	150	砂 岩	刃部のみ研磨が残る他は敲打面で覆われた石斧。基部は欠落。側縁の一部に稜を有した研磨面がわずかに認められ、当初の形態の一端を残している。なお両面の敲打面及び側面のそれは、やや器面風化が認められ、やや磨面を有する。
4	敲打器	A 環状遺構 II層0-20	8.7 6.0 2.9	250	砂 岩	平扁楕円の石器。長軸の一端部に0.8×2.0cmの軽微な敲打痕がみられ、一方の端部は大きく剝離し、その縁端部に敲打痕が残されている。器面は磨面を呈し、その素材が円礫であることが知られる。
5	砥 石	A 環状遺構 石組内 20-30	11.5 7.9 2.8	315	アルコース 砂 岩	平扁の自然円礫を素材としたもので両平面に互いに交差する様に凹だ溝を残している。凹は磨面になっている。一方面の縁端部には、さらに小さな凹だ溝が認められる。その裏面部は剝離している。一平面の溝幅約5cm、一方のもの約3.5cmをはかる。
6	石 皿	A 環状遺構 集石上面	23.4 15.3 4.8	3,500	アルコース 砂 岩	平面形が略半円形を呈した盤状の礫を素材としたもので両平面に砥磨面を有するが、とくに一方のものが強い。この面は長軸方向にゆるやかに凹をつくっている。湾曲した側縁中央に敲打痕による抉りがつられている。
7	敲打器	A 環状遺構 石組内 20-30	17.0 9.6 8.95	2,000	アルコース 砂 岩	横断面が卵形状を抽く柱状の石器である。長軸方向に約1.4cm幅の稜を造るよう敲打調整したもので、したがってこの周辺部と長軸の両端面に敲打面が認められ、稜部とは対応する面側は当初の磨面を保持している。
8	敲打器	A 環状遺構 II層20-30	8.3 5.25 4.2	245	アルコース 砂 岩	やや卵形に近い石器で、長軸の両端部と短軸の一側面に細かな敲打痕が残る、平面の中央にやや粗目の敲打痕が認められる。他の面は自然面を呈する。
9	敲打器	A 環状遺構 II層10-20	6.9 6.6 4.5	310	アルコース 砂 岩	外観が平扁球状をした石器で、対応する平面にわずかに研磨面を認める以外は全側縁に比較的敲打痕の目のそろった打面がめぐっている。
10	敲打器	A II層20-30	8.3 7.9 3.7	350	アルコース 砂 岩	形の整った小形円盤状の礫で、両面中央に敲打痕がみられる。又、側縁の一部に軽微な敲打痕が残されている。
第15図	石 皿	環状遺構 II層0-10	5.75	8500	片状砂岩	板状の自然礫を素材としたもので、一平面は磨面になり、中央部は長軸方向に段状の凹を形成している。外周縁部に打痕が存在するがいずれも風化が進行して磨面に近くなっている。対応する逆の平面は自然面を呈し加工は認められない。



第22图 石器



第15図 石器

土 器

本遺構からは1700点余りの土器片が得られている（第a表）。これらはいわゆる奄美系土器と沖縄の土器に大別することが出来る。前者に含まれる資料は僅少で、後者に属するものが圧倒的であった（第10表）。以下、奄美系土器から記述する。

奄美系土器

今回得られた資料は総数9点と僅少であった。全て破片で完形及び復元して全形の窺える資料はない。既に奄美で型式設定されたもの（註1）で、嘉徳Ⅰ式・喜念Ⅰ式、宇宿上層式等が得られており、特徴的なものを第16図に示した。

1・2に示したものは嘉徳Ⅰ式の資料である。1は口縁部の資料で器形はほぼ直口を呈し、口径は推算15.3cmである。本型式の標準遺跡となった嘉徳遺跡（註2）や宇宿貝塚（註3）等を見ると、口縁部が段を有するものが知られているが、本資料は文様帯下端で破損し、段を有したかどうか不明である。又、口縁部が波状を呈するものも知られているが、現標品からすれば本資料は平口縁と思われる。

文様をみると口唇部・口頸部が施文の対象となっている。口唇部文様は斜位の刻目文で、口唇部全体に施されたものと推察される。口頸部文様は、本型式の一大特徴を示す沈線文と先の丸味を帯びたヘラによる爪形押し引き文の組合せとなっている。まず、沈線文で籠目をモチーフにした文様を配し、その沈線間に爪形文を2条施している。本型式は爪形文の工具によりA、Bに分けられており、本標品はAに属す資料といえる。

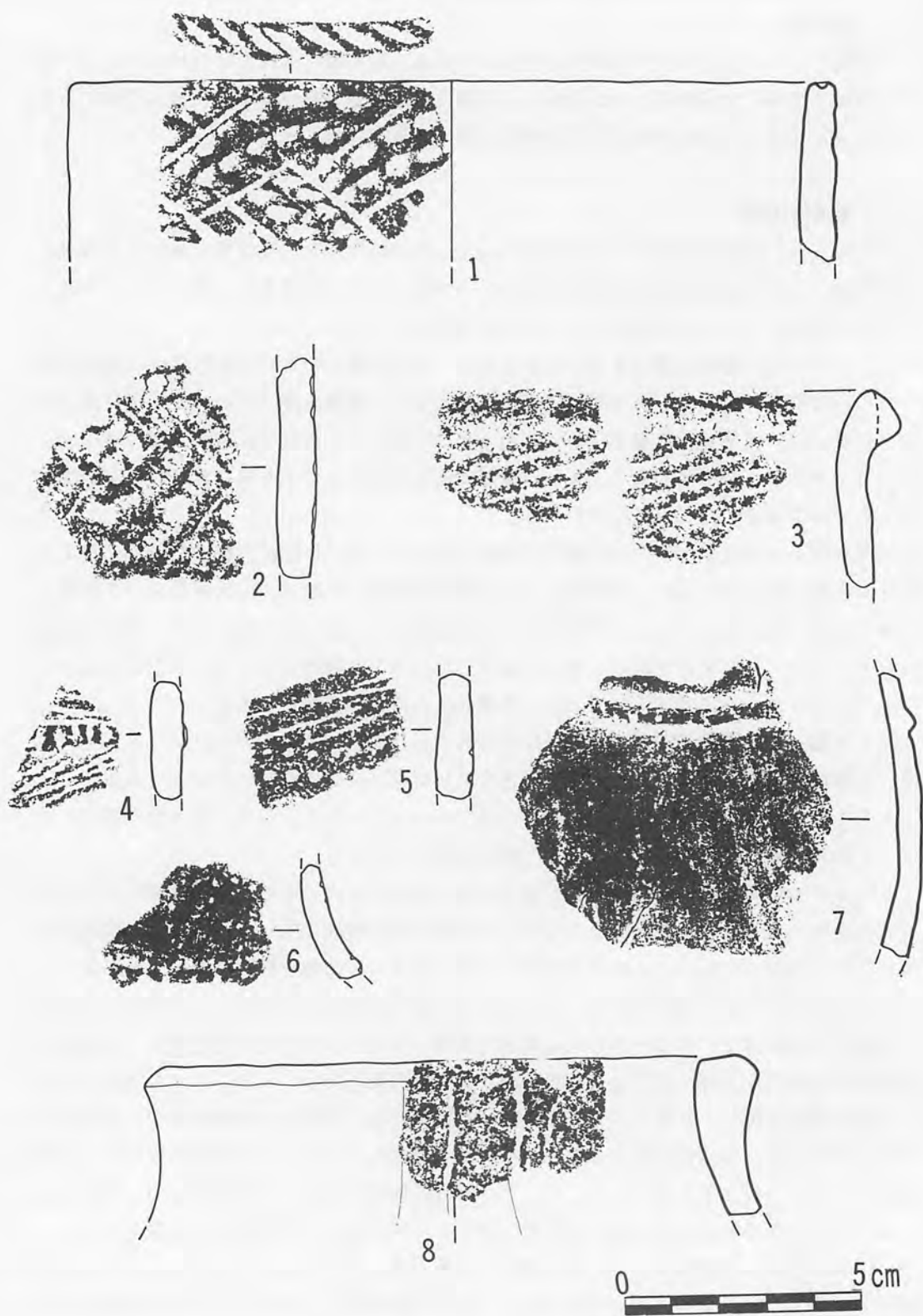
胎土は精選され緻密で多量の金雲母片を混入する。表面はよくナデられているものの裏面には横位の擦痕が見受けられる。暗褐色を呈し焼成は良好で器厚は約6mmである。

2も1に準ずる資料であるが器表面の状況に違いがみられる。即ち、混入物の石英・チャート砂粒が器表面に露出し、1に比べ粗雑な感じを受ける。

3・4に示したものは面縄西洞式か喜念Ⅰ式か不明のものである。3は口縁部がカマボコ状に肥厚する資料で、頸部にラフな斜位の沈線を羽状構成に配しているが、下端部が破損しており明確ではない。4は刻目を施した断面扁平の小凸帯を横位に配し、その上・下にラフな斜沈線を施す資料である。小破片なので全体の構図は不明だが、凸帯間を沈線文で埋めるのは喜念Ⅰ式によくみられる構図である。しかし、喜念Ⅰ式特有のミミズ張れ凸帯に側点を加えた文様ではなく、刻目を施した扁平凸帯を配していることから不明とした。

3は赤褐色を呈し、石英、チャートの砂粒を多量含む。器面はナデ調整を施しているが器面が剥げ落ち、混入物が露出し手ざわりがザラザラしている。4は暗褐色を呈し、石英砂粒の他に金雲母を多く混入する。3に比べ器面の保持は良く、ナデ調整を施している。

5～7の3点は喜念Ⅰ式に属する資料である。いずれもミミズ張れ状の凸帯とその上、下に棒状工具による刺突文（いわゆる側点）を配するものであが、7に示したものはこの刺突文が非常に細い工具によって施され、しかも凸帯両端上にきている。厳密な意味では本型式から外れるが、1つのバリエーションの中でとらえることが可能かと思われここに掲載した。



第16图 土器

5・6の2点は典型的なものであるが、両者ともミミズ張れ凸帯が剥げ落ち刺突文だけが残っている。5は沈線も組み合わせるが、6は凸帯間を無文のまま放置している。5はミミズ張れ凸帯と側点の組合せは横位に1条認められ、6はそれが2条認められる資料であるが全体として何条配されたかは不明。また、久里原貝塚(註4)や伊是名貝塚(註)等では凸帯と側点の組み合わせが横位のみでなく縦位に施されるものも報告されているが、上記両品とも小破片で縦位文と組み合わせられたかどうかは不明。

7はミミズ張れ凸帯の上・下両端に刺突文が施されるもので、刺突文は5・6に比べ細い。その凸帯は横位に1条認められ、凸帯の上方に文様は認められない。

器色は5が暗褐色、6・7は赤褐色を呈す。7は破片の下部では煤けて黒褐色となっている。3点ともナデ調整を施しており、5・6の2点は表裏それほど大差なく調整されているが、7は表面がより丁寧に調整されており滑らかである。胎土はいずれも精選され、5・6の2点は金雲母を多量含むが、7はそれを含まない。

8は宇宿上層b式に属する資料である。本型式は口縁部が肥厚するものがほとんどであるが、本資料は口縁部が頸部より若干厚くなるというだけで明確な肥厚は示さない。口縁部のやや外反するカメ形が想定され、口径は推定13cmである。

文様は破片の左側に縦位沈線文が3条認められる。工具を器面に対して斜めになるように使用しており施文は深い。伊是名貝塚(註6)ではこの種沈線文が口縁部の相対する2個所に配される例が報告されているが、本資料の場合何箇所に施したか不明である。

黄褐色を呈し、表裏面ともナデ調整を施している。胎土は精選されており、石英微砂粒と金雲母を混入する。

沖縄の土器

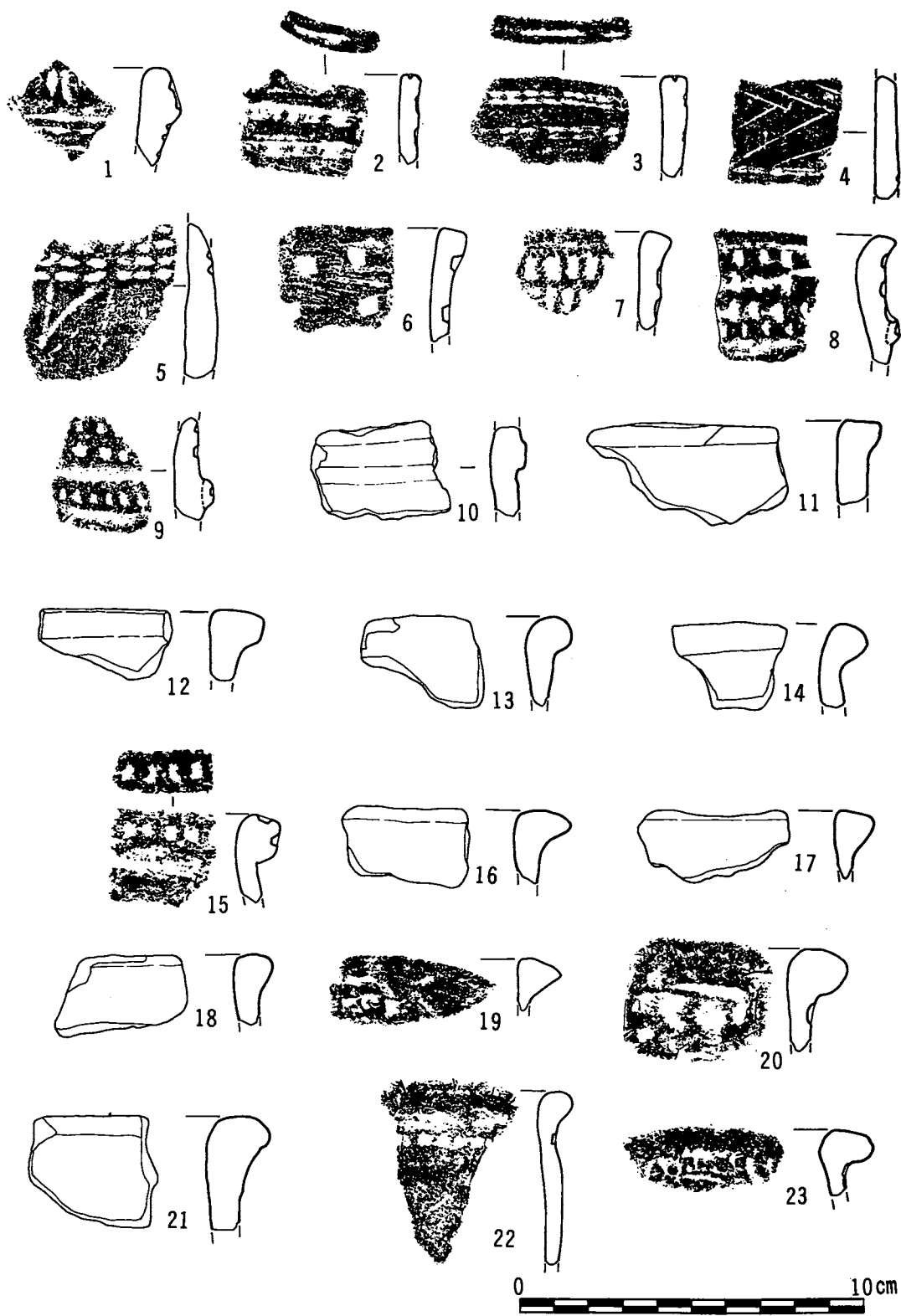
今回得られた資料はほとんどが高宮編年(註7)の前Ⅳ期に属する(第a表)。型式別にみると荻堂式、大山式、室川式等が出土しているが、室川式が圧倒的に多く荻堂式、大山式は僅少であった。その他にカヤウチバンタ式や宇佐浜式土器も若干得られている。

伊波～大山期の資料

明確な伊波式は得られていないものの、前Ⅳ期前半に属すると思われる資料も出土している。荻堂式、大山式その他これらのいずれに属するか不明のものも合わせて36点の出土であった。すべて小破片で器形、大きさ等の窺える資料は出土していない。特徴的なものを第17図1～10に示した。

1は荻堂式特有の肥厚した山形を有す口縁部の資料で、三角形の扁平な肥厚を示す。文様は叉状工具による連点文が山形の肥厚外面では縦位に1組、頸部では横位に2組認められる。山形の肥厚外面では上→下の方向へ、頸部の横位文は左→右方向の施文である。現資料でみる限り口唇部に文様は認められない。赤褐色を呈し、石英・チャート砂粒を含む。

2～5の4点は伊波式か荻堂式か不明のものである。2・3は口縁部の資料で、2は左側の傾斜が急な山を有している。この種山形は大きな山と山の間にくる場合と、独立した



第17图 土器

部位 レベル	口 縁		胴	部		底 部	計
	有文	無文	有文	無文	平	丸	
0-10	16	40	11	479	5		551
10-20	22	59	8	685	10		784
20-30	8	24	6	363	7	1	409
30-40	2	3	2	16			23
計	48	126	27	1,543	22	1	1,767

第 a 表 遺構内土器出土状況

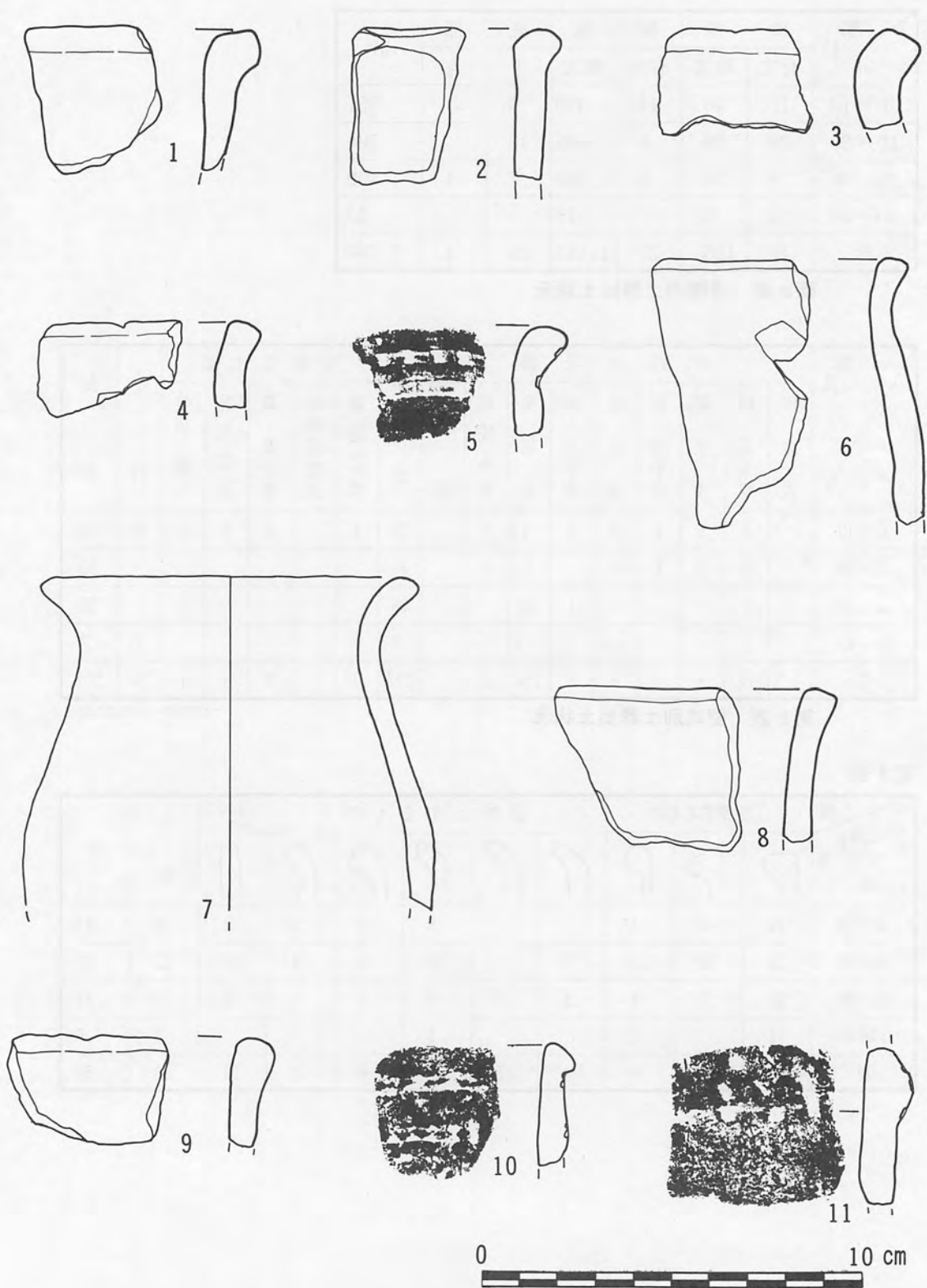
型式 レベル	沖 縄 の 土 器								小 計	奄 美 系 土 器					小 計	合 計
	伊 波 式	伊・ 荻 不明	荻 堂 式	荻・ 大 不明	大 山 式	伊・ 大 不明	室 川 式	宇 佐 浜 式		嘉 徳 工 式	面 縄 前 庭 式	覇 ・ 度 不明	喜 念 工 式	宇 宿 上 層 b		
0-10		3	1	2	3	7	42	1	59	1		2	4	1	8	67
10-20		5	2	1	5		75	1	89							89
20-30		4			1	1	32		38							38
30-40		1					5		6	1					1	7
計		13	3	3	9	8	154	2	192	2		2	4	1	9	201

第 b 表 型式別土器出土状況

カヤウチ・ハンタ式は除く

第 1 表

種 口縁形 態 レベル	①肥厚するもの			②外反するもの					①:②を ③示さ ない もの	不 明	計
	 イ	 ロ	 ハ	 ニ	 ホ	 ヘ	 ト	 チ	 リ		
0-10	16	1	4			8	1	3	2	8	43
10-20	12	10	2	3		13	4	9	10	12	75
20-30	10	1	1	1	5	5	1	1	2	4	31
30-40	1		1			1				2	5
計	39	12	8	4	5	27	6	13	14	26	154



第18図 土器

1つの山となる場合があり、そのいずれになるか不明である。2点とも口縁部、口唇部が施文の対象となっており、口縁部に半截竹管状工具による押し引き文を左→右の方向へ2条施文する。2は3に比べ施文が深い。口唇部の文様は両者とも長沈線文を施している。2は暗褐色、3は表面は暗褐色、裏面は赤褐色を呈し、2点とも石英・チャート砂粒を含む。

4・5は胴部破片で、4は引きの長い押し引き文と沈線による羽状文を配し、5は叉状工具による連点文が2組認められる。4は赤褐色、5は黒褐色で、いずれも石英の微砂粒を多量混入する。

6～9の4点は大山式に属すもので、9は胴部破片、他の3点は口縁部の資料である。6・7の2点は横捺刻文を2条施すが、6は刻文の間隔が1～2cmと広く、7は密である。6の施文は深く明瞭である。

8・9の資料は断面が方形状の凸帯と横捺刻文を組み合わす例である。8は口縁上端が折り曲げられた感じで外反する。文様は凸帯が文様帯の下部をなし、凸帯上に1条、凸帯の上方に3条の横捺刻文を施す。刻文は半月状になっている。9は胴部の資料で凸帯を1条横位に施し、凸帯上及び凸帯の上方に横捺刻文を配す。刻文は方形状を呈す。

6は表面が黒褐色、裏面が赤褐色、7は暗褐色、8・9は赤褐色を呈し、4点とも石英・チャート砂粒を多量に含む。

10は断面が方形状の凸帯を1条横位に施す資料で、他に文様はみられない。久里原貝塚（註8）で報告されている凸帯文土器のグループかと思われる。暗褐色を呈し、石英・チャート砂粒を含む。

室川式土器

室川貝塚T-16・17区下部貝層出土のものを標式とする土器で、口縁部形状及び胎土・混入物等にその特徴が見い出されている。

今回の調査で本型式に含まれる口縁部資料が154点得られており、本遺構の主体をなしている。本遺構から出土しているものも上記のような特徴を有し、口縁部は肥厚あるいは外反して口唇部を強調するものや肥厚・外反等を示さないもの等が見られる。

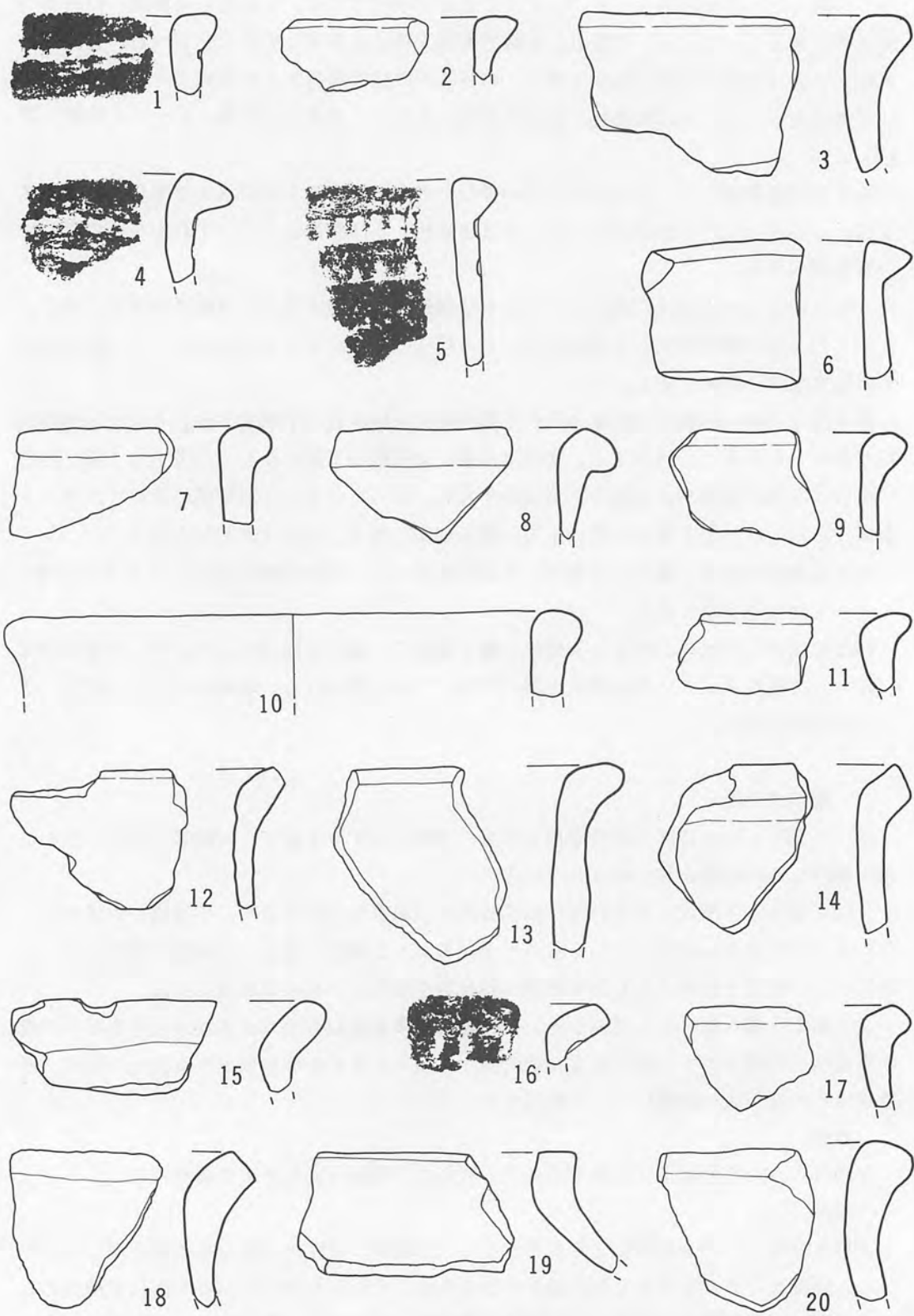
又、胎土・混入物についてみると、石英砂粒を多量含むものや石灰質砂粒を含むもの及び本遺構の特徴を示すと思われる粘板岩碎片を混入するもの等が見受けられる。以下、本遺構出土の室川式の特徴について略述する。

器種

今回得られた資料は全て深鉢形に属する資料で、明確に壺形を示す資料はない。

器形

完形及び復元して全形の窺える資料がなく、口縁部の破片から推定せざるを得ない。しかし、胴部まである割りと大形の破片が5点あり、それらを中心にみると概ね2種認められる。即ち、第18図6・7のように胴部が幾分脹らむものと、第20図1・4・5のように胴部がほとんど脹らまないでストレートに底部へ移行するものの2種である。なお、古座



第19図 土器

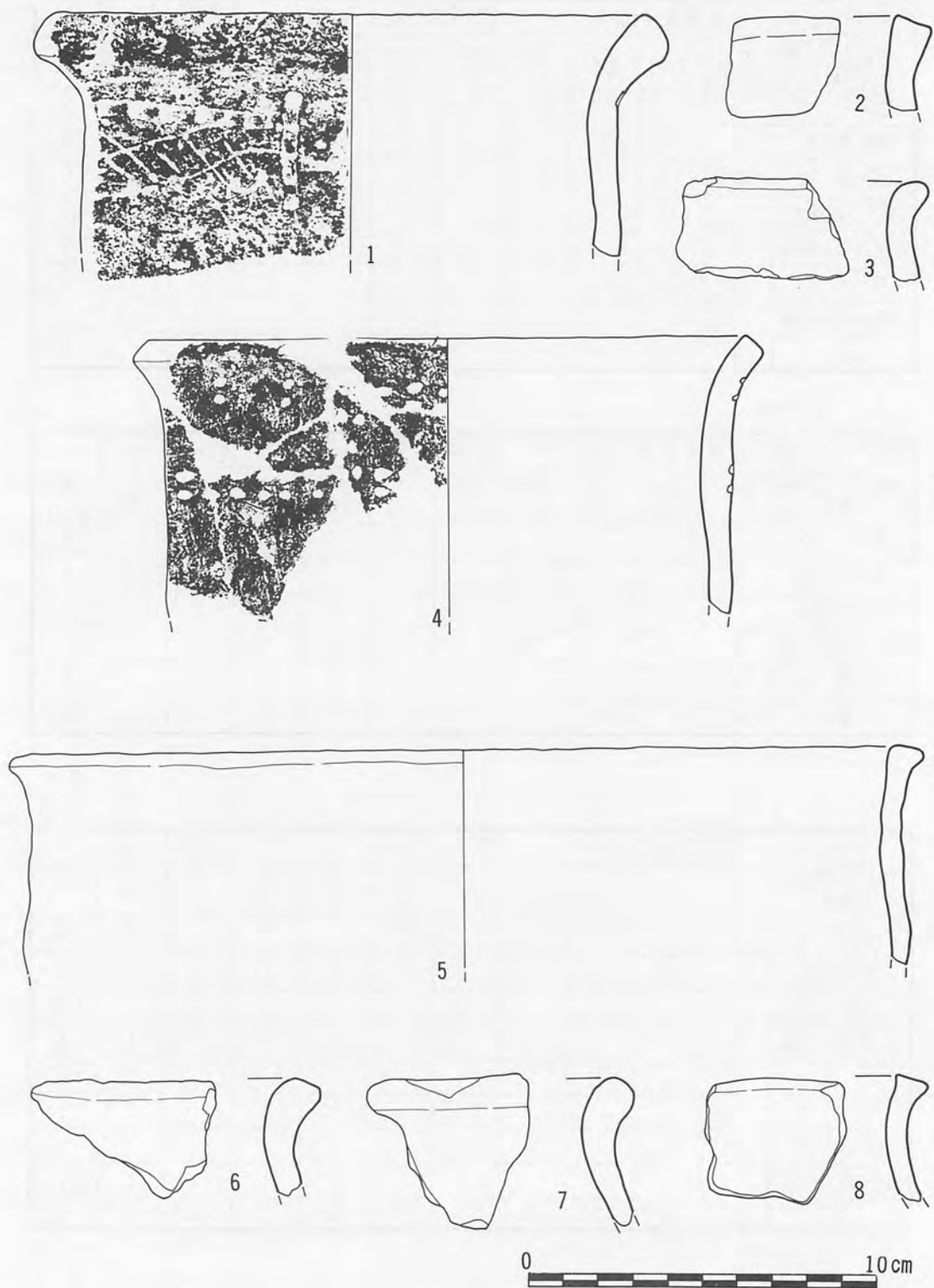
第2表 I 類

文様の種類 口縁形態	① 肥厚するもの			② 外反するもの					①・②を ③がさないもの	不明	計
刻文	2					1					3
押し引き文	2	1	1							2	6
沈線文	3			1						2	6
刻文+沈線文									1		1
押し引き文+沈線文	1									1	2
連点文	1										1
凸帯+刻文+沈線										1	1
計	9	1	1	1		1			1	6	20

II 類

文様の種類 口縁形態	① 肥厚するもの			② 外反するもの					①・②を ③がさないもの	不明	計
刻文						2				1	3
押し引き文	1		1					1	1	1	5
刻文+沈線								1	2	1	4
押し引き文+沈線							1				1
点刻文								1			1
計	1		1			2	1	3	3	3	14

文様の種類 口縁形態	① 肥厚するもの			② 外反するもの					①・②を ③がさないもの	不明	計
刻文	2					3				1	6
押し引き文	3	1	2					1	1	3	11
刻文+沈線								1	3	1	5
押し引き+沈線	1						1			1	3
沈線	3			1						2	6
点刻文								1			1
連点文	1										1
凸帯+刻文+沈線										1	1
計	10	1	2	1		3	1	3	4	9	34



第20図 土器

間味貝塚（註 9）では口縁部が直線的に開く鉢形の土器も報告されており、注意される器形である。

次に本型式の特徴の一つである口縁部の形状についてみると、①肥厚するもの、②外反するもの、③なんら肥厚・外反等を示さないものの3種に大別できる。しかし、②の外反するものには①の要素を合わせ持つものもみられる。この3種をさらに細分すれば下記の通りである。

- ①
 - イ、口縁部が肥厚し、口唇部が水平方向に広がるもの。
 - ロ、口縁部が肥厚し、口唇部は広がるが外傾するもの。
 - ハ、口縁部が丸味を帯びて肥厚し、口唇部も丸くなるもの。
- ②
 - ニ、口縁部上端が折り曲げられた感じで、口唇部が内傾するもの。
 - ホ、ニと同様な形状であるが、内面の角がとれ内傾した口唇部が丸味をもつもの。
 - ヘ、口縁部上端を角度をもって折り曲げたもの。
 - ト、頸部から口縁へ漸次厚くなりながら外反するもの。
 - チ、口縁部が外反するもの。
- ③ 一り、口縁部が肥厚・外反などを示さないもの。

これらの出土状況を第1表に示した。その中で不明としたものは小破片のためいずれの口縁形状に属するか不明のものである。

それをみると、①の肥厚するものが最も多く59点で、②の外反するものは多くのバリエーションが見られるものの55点の出土で①より若干少ない。③の肥厚・外反を示さないものは14点の出土であった。

これを細分したイ～りの口縁形態と関連させてみると、①の場合(イ)の口唇部が水平方向をなす肥厚を示すものが圧倒的に多く、次いで(ロ)の口唇部の外傾するもので、(ハ)の丸味を帯びた肥厚を示すものは少なかった。②の場合(ニ)の口縁部を角度をもって折り曲げたものが最も多く、(ホ)の外反するものがこれに次ぎ(ヘ)・(ト)の口唇部が内傾するものは量的にはそれほど多くなかった。(ト)に示したものが①の要素も合わせ持つもので6点の出土であった。

大きさ

今回得られた資料は完形品がなく、そのため確実な資料に欠けるが第18図7、第19図10第20図1・4・5の5点は口径の推算出来た資料である。第18図7は約10cm、第19図10は約16cm、第20図1は約18cm、4は約17cm、5は約26.4cmとなっている。これからすると、10cmを前後する小さ目のものと、18cmを前後する大き目のものという2種みられる。しかし、限られた資料からの結果であり、本型式の大きさがこの2種に限られたのかどうかは不明。

高さについては完形品がなく不明である。

文様

今回得られた154点の資料のうち文様を施すものは34点で約20%である。伊波～大山期の資料に比べれば著しい無文化の進行といえる。

有文のものを胎土・混入物と関連づけてみると、粘板岩碎片を含まないものは18点の出土で、この種の胎土・混入物を示すものの約22%である。粘板岩碎片を含むものは14点の

第3表

レベル \ 類	I 類	II 類	計
0-10	27	16	43
10-20	30	45	75
20-30	21	10	32
30-40	3	2	5
計	81	73	154

第4表

種別 口縁形態 類別	①肥厚するもの			②外反するもの					不明	計	
											
I 類	24	4	4	2	2	15	1	7	7	15	81
II 類	15	6	6	2	3	12	5	6	7	11	73
計	39	10	10	4	5	27	6	13	14	26	154

第5表 I類 器 色

口縁形態 器色	①肥厚するもの			②外反するもの					③口縁の厚さ	不明	計
	 イ	 ロ	 ハ	 ニ	 ホ	 ヘ	 ト	 チ	 リ		
赤褐色	4			1		3		1	2	2	13
黒褐色											
暗褐色	17	4	3	1	2	9	1	6	3	12	58
黄褐色	1		1							1	3
橙褐色	2					3			2		7
計	24	4	4	2	2	15	1	7	7	15	81

II 類 器 色

種別 口縁形態 器色	①肥厚するもの			②外反するもの					①②を 分けない	不明	計
	㇀ _イ	㇀ _ロ	㇀ _ハ	㇀ _ニ	㇀ _ホ	㇀ _ヘ	㇀ _ト	㇀ _チ	㇀ _リ		
赤褐色	1	1	1			1		2	2	1	9
黒褐色							1				1
暗褐色	8	3	2	2	2	7	1	3	3	9	40
黄褐色	1					1	1			1	4
橙褐色	5	2	3		1	3	2	1	2		19
計	15	6	6	2	3	12	5	6	7	11	73

出土で、この種土器の約20%となっている。本遺構出土のものは、粘板岩碎片を含むものと含まないものの有文と無文の比率はほとんど差がない。

次に口縁の形状でみると、粘板岩碎片を含まないものは不明のものを除けば①の肥厚するものに有文の資料が多く、②の外反するものや③の肥厚・外反等を示さないものは僅少であった。粘板岩碎片を含むものをみると、②の外反するものに有文資料が多くみられ、③の肥厚・外反を示さないもの、①の肥厚するものは少なかった。

文様を施す部位についてみると、ほとんどが小破片のため明確にし得ないが、第 図 1・4 の 2 点は施文部位の確実な資料である。この 2 点をみると、施文の対象は胴上部までのようで胴下半部に及ばない。しかし、室川貝塚（註10）では施文の対象が胴下半部に及ぶものも知られている。

又、第17図15は口唇部にも施文しており、口唇部も施文の対象となっていることが窺える。しかし、本遺構出土のものは口唇部に施文する例は本資料の 1 点のみである。これからすると、本遺構出土の室川式土器に文様が施される場合、その施文の対象となるのは口唇部及び口頸部であるが、口唇部に施文するものは極端に少なくなるようである。

施文具として使用されている工具をみると、単べら工具、又状工具・半截竹管状工具の 3 種認められるが、単べら工具使用のものが圧倒的に多く、他は 1 点ずつの出土であった。半截竹管状工具を使用したものは第18図10に示した 1 点で、石灰質砂粒を多量混入するものである。又状工具を使用しているものは第 4 図 4 の 1 点で、粘板岩碎片を混入するものである。

文様の種類についてみると第 2 表に示した通りで、8 種認められる。押し引き文・刻文それに沈線文が主体的な文様要素となっており、この 3 者を単一に施すものと組み合わせるものを含めたものが、有文資料の約90%を占める。他の連点文・点刻文及び凸帯を施すものは各 1 点ずつの出土であった。

第16図10・11に示したものは、連点文を施すものと凸帯を貼り付ける資料で、2 点とも石灰質の微砂粒を密に混入し、器色が暗褐色を呈すものである。室川貝塚出土のものに類似し、室川式 A とされるグループに含まれる資料である。

10は半截竹管状工具による連点文が横位に 2 条配されている。上・下の横位文は約 1 cm の間隔をもって左→右方向へ施文されている。施文は深い器面の保持が悪く、文様の消えかかっている部分もある。11の資料は胴部破片で断面が半円形の凸帯を 1 条横位に配し、その凸帯上および凸帯の上・下両端に横位の刻文を施している。刻文間の間隔は広い。又、凸帯の上方には右傾の斜沈線文が 1 条認められ、凸帯+刻文+沈線の組み合わせとなっているが全体としての構図は不明。

第18図 1 は押し引き文と沈線文を施す資料である。頸部に横位押し引き文を 2 条配し、その間を交差する斜沈線文で埋めている。この横位文を切るように縦位押し引き文が 2 条認められる。縦位文は 2 条だけなのかそれともまだ施されていたのか、その部分で破損しているため不明である。縦位文の間隔は約 1 cm で、下→上の方向に施文している。横位文は左→右の方向へ施文されている。横位・縦位文とも施文は深い器面の保持が悪く下

端の文様は消えかかっている。

上・中・下の横位文、それを区切る縦位の文様と伊波式によくみられるような文様構図を採用しているが、文様帯の巾は狭い。

第20図4は点刻文を施す資料である。文様構図としては伊波式のそれを採用している。上段に1組の横位点刻文を施し、下段にも同様の文様を施文する。上・下段の横位文の間は無文のままである。又、この横位文を切るように1組の縦位点刻文が施されている。横位文は左→右の方向へ、縦位文は下→上の方向へ施文されており、施文は深く明瞭で力強さを感じさせる。本資料は伊波式の文様要素及び文様構図を採用しているものの点刻文の幅が5mmぐらいのものと、15mmぐらいのものの2種認められることや、縦位文が下段の横位文より下方に及ぶことなど相違点も認められる。

胎土・混入物

今回得られた資料をみると、本遺跡出土の室川式に特徴的な現象として、粘板岩碎片を混入するということが上げられる。既に、知花遺跡(註11)や久里原貝塚(註12)等では、室川貝塚出土のものと胎土・混入物に差異の認められることが報告されている。しかし、本遺跡の場合には上記2遺跡とは異なり、室川貝塚や大原貝塚(註13)等で出土しているような石灰質砂粒を多量混入するものも僅少ではあるが得られている。

そこで本遺跡出土の室川式を胎土・混入物の面から2類に大別してみた。つまり、粘板岩碎片を含まないもの(石英砂粒を主体とするものが多いがまれに石灰質砂粒主体のものもみられる)をⅠ類、粘板岩碎片を含むもの(粘板岩碎片の粒に大・小みられる)をⅡ類としその出土状況を第3表に示した。Ⅰ類が若干多く出土している。

これを口縁部の形状でみると、Ⅰ・Ⅱ類とも同じような口縁部形状を示すものが得られ、その出土状況も同様でそれほどの差はみられない(第4表)。

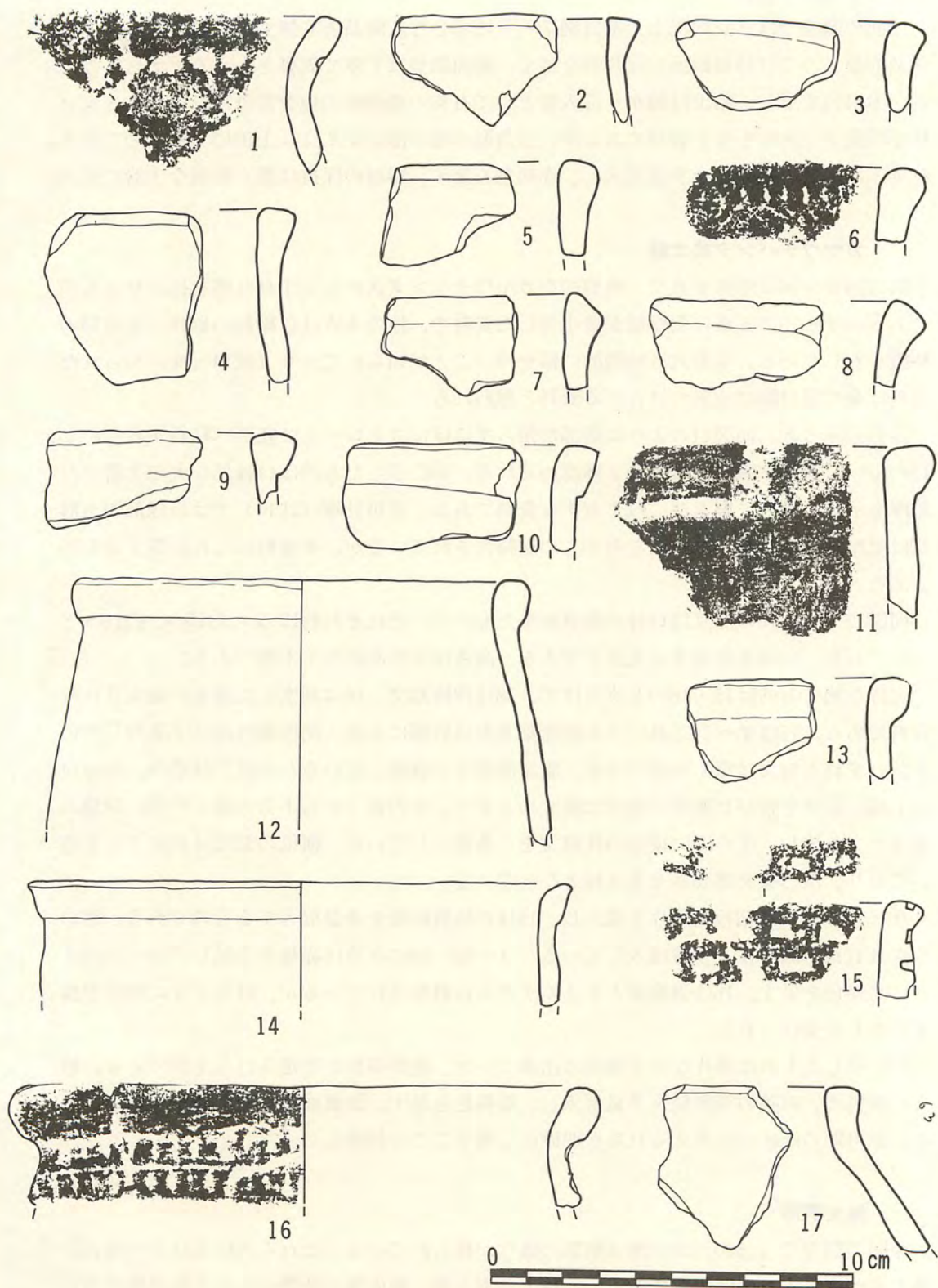
第17図11～23及び第16図はⅠ類に属す資料で、第18図10・11は石灰質砂粒を多量混入するものである。Ⅱ類に属する資料を第19図～第20図1～6に示した。

器色

本遺構出土の室川式土器の器色については第5表の通りで、赤褐色・黒褐色・暗褐色・黄褐色・橙褐色の5種みられる。その中では暗褐色のものが圧倒的で全体の60%以上を占める。次に橙褐色・赤褐色の順で、黄褐色・黒褐色を呈すものは僅少であった。これを前述の胎土・混入物の項で分類した類別にみると、Ⅰ・Ⅱ類とも暗褐色のものが主体をなすが、Ⅱ類はⅠ類に比べ赤褐色のものが少なくなり、橙褐色のものが多くなるという傾向を示している。

その他の特徴

以上、略述したような特徴の他の特徴についてみると、器面調整はナデ調整が主になっており、擦痕を残すものはほとんど見受けられない。焼成は悪く脆弱で器面を保持しないものも見られる。器厚は6～7mmのことが多いが、第17図22に示すような4mm前後の薄いものも得られている。



第21図 土器

宇佐浜式土器

今回の調査では2点の出土で第21図7・8に示した。両品とも無文の資料である。7は典型的なもので口縁部断面が三角形を呈す。器面調整は丁寧で表裏ともよくナデられている。赤褐色を呈し、胎土は細かく混入物として石英の微砂粒の他金雲母片を含む。8も口縁部断面が三角形をなす資料であるが、三角形の稜の部分が7より上位にくるものである。石英・石灰質の粗砂粒を多量混入し、赤褐色を呈す。器面の保持は悪く脆弱な土器である。

カヤウチバンタ式土器

第21図9～16に示す8点で、典型的なカヤウチバンタ式からくずれた感を抱かせるものである。9～13の5点は肥厚部が矮小化した資料で、他の3点は口縁部の形状が室川期の特徴を有している。本型式は時間的に幅を持つことが知られており（註14）、今回得られた資料は全て室川期に位置づけられる資料と思われる。

器形をみると、同図11のように胴部が張らずにほぼストレートに底部へ移行するものと、12のように胴部が張らむものの2種認められる。16に示したものは口縁部が丸味を帯びた肥厚を示し、さらに胴上部に段を有する資料である。室川貝塚（註10）では口縁部が方形状に肥厚し、かつ胴上部に段を有するものが報告されているが、本資料はこれに類するものであろう。

同図12・14・16の3点は口径の推算出来たもので、それぞれ約12.5cm、約15cm、約16cmとなっており、15cmを前後する大きさである。高さは完形品がなく不明である。

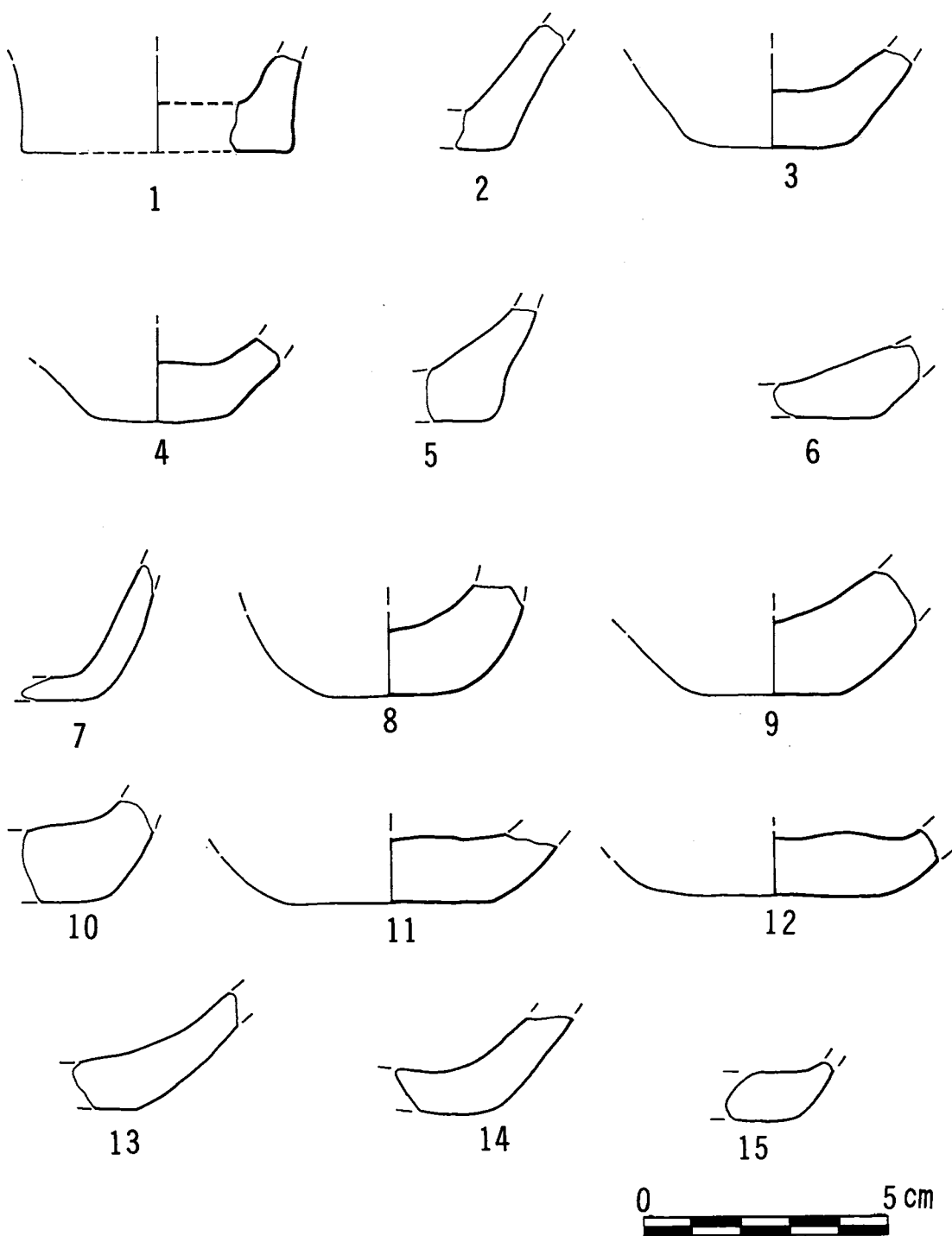
文様を施すものは15・16の2点だけで、15は押捺刻文、16は刻文と沈線文の施文された資料である。15は単べら工具による押捺刻文を口唇部に1条、肥厚部外面に2条施している。いずれも施文は深く明瞭である。肥厚部直下で破損しているため以下は不明。16は口縁上端の丸味を帯びた肥厚の部分は無文のままで、その直下から下方の段との間に横位の刻文を2条施し、その間に横位の沈線文を1条綾らしている。横位の刻文は刺突手法を用いており、爪形文を連想させる文様となっている。

9・16の2点は粘板岩碎片を混入し、15は石灰質砂粒を多量混入するものである。他の5点は石英の微砂粒を多量混入している。9～12・16の5点は赤褐色を呈し、13～15の3点は暗褐色を呈す。16は表裏面ともよくナデられ調整されているが、11のように擦痕を残すものも見受けられる。

17に示したものは破片なので確言は出来ないが、壺形器形が想定される土器である。無文の資料で、石英の微砂粒を多量混入し、暗褐色を呈す。表裏面ともナデ調整を施している。室川期の所産かと考えられるが明確にし得ずここに掲載した。

無文胴部

今回の調査で1,500点余の無文胴部の破片が得られている。これらの破片はどの型式に属するか決定するのは困難であるが、胎土、混入物、焼成等の特徴からある程度推定することは可能かと思われる。無文胴部破片を胎土・混入物により分類したものが第6表であ



第22図 土器

る。これを前述した口縁部資料のそれと比較すると下記のようなことが類推出来る。

- ①粘板岩碎片を含むもの——室川期
- ②石英を主体とするもの——伊波～大山期、室川期
- ③石灰質砂粒を主体とするもの——室川期
- ④胎土が非常に細かな砂質のもので混入物がほとんどみられないもの——不明
- ⑤金雲母片を混じるもの——奄美系

量的にみると②の石英砂粒を主体とするものが最も多く、①の粘板岩碎片を含むものがこれに次ぎ、両者で約90%の出土であった。②の1部を除きほとんど室川式の特徴を有す。これに③を含めると無文胴部の大半は室川式に属することになり、口縁部の資料と同様な出土状況をみせる。④のものは胎土・混入物が非常に細かく、手でさわると粉末がつくような土器で、量的には僅少であった。この種の口縁資料がなくどの型式に含まれるか不明。⑤は金雲母片を混入するもので、奄美系土器によくみられるが量的には僅少であった。

底部

総数22点の出土であるが、30～40cmレベルでは土器自体の出土量が僅少で底部資料は得られていない。全て平底の資料で出土状況は第a表に示す通りである。立ち上がり部の形状に5種みられ、特徴的なものを第22図に示した。

1に示したものは底面から約1cmまでは垂直に立ち上がり、そこからゆるやかに外側へカーブしながら胴部へ移行するものである。嘉徳遺跡（註15）や宇宿貝塚（註16）等で出土しているものに類似する。底径は約5.5cmで、石英砂粒を多量含み、暗褐色を呈す。

2～6の5点は立ち上がり部が若干内湾するものである。3・4は底径の推算出来たもので、2点とも3.5cmと小さい。2・3・6の3点は石英砂粒を多量混入し、4は石英砂粒の他に金雲母片を含み、5は石灰質の微砂粒を多量混入するものである。器色は5点とも暗褐色を呈す。これらの特徴は室川期にみられるものと類似する。

7は立ち上がり部がほぼ垂直になる資料である。石英を主体にチャート片を混入し、表面が暗褐色、裏面が赤褐色を呈す。伊波～大山期の所産と考えられる。

8～12の5点は立ち上がり部のやや外湾するもので、10を除く4点は底径が推算出来た資料である。8・9の2点は3cm、11・12の2点は5cmである。8の胎土は精選され、きめ細かく、石英の微砂粒を密に含む。外面が灰褐色、内面が黄褐色を呈し、内面にはへら状のものによるラフな調整痕が残っている。9は粘板岩碎片、10は石英砂粒、12は石灰質砂粒を多量含むもので、3点とも暗褐色を呈し、今回得られた室川式の特徴を有す。10は底面の厚さが約1.5cmと厚く、内面に擦痕を残している。

11は石英、チャートの砂粒を多量含み、表面は暗褐色、裏面は赤褐色を呈す。伊波～大山期の資料と思われる。

13～15の3点は立ち上がり部が直線的に開くもので、いずれも底径は推算出来ない。13は石英、チャート砂粒を多量混入し、器色は暗褐色を呈す。伊波～大山期の資料であろう。14・15の2点は粘板岩碎片を混入するもので、表面が暗褐色、裏面が橙褐色を呈し、室川

式に属する資料であろう。

小 結

以上、本遺構出土の土器について略述した。今回得られた資料をみると室川式が口縁部全体の約75%という圧倒的な出土量をみせ、本遺構の時期を示していると考えられる。しかし、下部のほうから得られている嘉徳Ⅰ式や伊波～大山期の資料は注意を要する。

本遺構出土の室川式土器は、胎土・混入物により大きく2類に分けられる。即ち、Ⅰ類一粘板岩碎片を含まないもの、Ⅱ類一粘板岩碎片を含むものである。

今回得られたものからするとⅠ類→Ⅱ類への流れが想定出来る。又、Ⅰ類土器の中には、室川貝塚で出土しているような石灰質砂粒を多量混入するもの（今回得られたものは室川式Aとされるグループ）も得られており、室川貝塚のものとはほぼ同一の時期かと思われる。

第6表

種 レベル	①粘板岩碎片含むもの		②粘板岩碎片含まないもの				計
	①粒が大きい	②粒が小さい	③石英のみ	④石灰質砂粒	⑤微細粒	⑥金雲母片	
0 ～ 10	44	118	275	12	16	14	479
10 ～ 20	60	221	358	17	16	13	685
20 ～ 30	17	154	149	15	18	10	363
30 ～ 40		7	7	2			16
計	121	490	789	46	50	37	1,543

遺構内無文胴部テンパー分類表

種 層序		①粘板岩碎片含むもの		②粘板岩碎片含まないもの				計
		①粒が大きい	②粒が小さい	③石英のみ	④石灰質砂粒	⑤微細粒	⑥金雲母片	
I	層	1	16	59				76
	0～10	34	243	514	8	16	5	820
II	10～20	41	404	677	12	21	17	1,172
	20～30	14	80	97		3		194
	30～40	14	11	88		2		115
	40～50		4	183	1	6		194
	50～60	1	28	99	3	1	1	133
	60～70	5	25	128	7	7		172
	70～80		3	8		1		12
	80～90			9				9
	計	114	814	1,862	31	57	23	2,897

遺構外無文胴部テンパー分類表

遺構外の土器

総数 3,300点余り得られている。内訳は、口縁部 319点、胴部 2,935点、底部49点であった（第7表）。奄美系土器と沖縄の土器に大別出来るが、前者に属するものは僅少で、ほとんど後者に属す。以下、奄美系・沖縄の土器と分けて記述する。

奄美系土器

総数11点の出土であった。第8表にみるように、面縄前庭式、嘉徳Ⅰ式等が得られている。特徴的なものを第23図に示した。

1・2に示したものは嘉徳Ⅰ式に属する口縁部資料で、ともに爪形押し引き文と沈線文を組み合わせている。1は口縁部に縦位沈線文をはさんで左側に3条の横位に施された爪形押し引き文、右側に縦位の爪形押し引き文とその上方に横位の爪形押し引き文1条が認められるものの、全体的な構図は不明。施文は浅く雑な感じを受ける。下端では器面が磨耗し、文様が消えかかっている部分もある。口唇部に文様は認められない。

2は籠目をモチーフにした沈線文を施し、その間に2条の爪形押し引き文を配すものである。施文は深く規則的であるが、器面の磨耗が著しく、文様は消えかかっている。

嘉徳Ⅰ式はさらにA・Bに分けられており（註17）、上記の2点はAに属す資料である。

両者とも胎土は精選され、1は石英砂粒の他粘板岩碎片を、2は石英・チャート砂粒を含んでいる。1は2に比べて混入物の量が少なく、1は暗褐色、2は黄褐色を呈す。

3～5の3点は面縄西洞式か喜念Ⅰ式か不明のものである。4は断面が三角状に肥厚した口縁破片で、肥厚部直下に斜度の異なるシャープな斜沈線文が認められる。

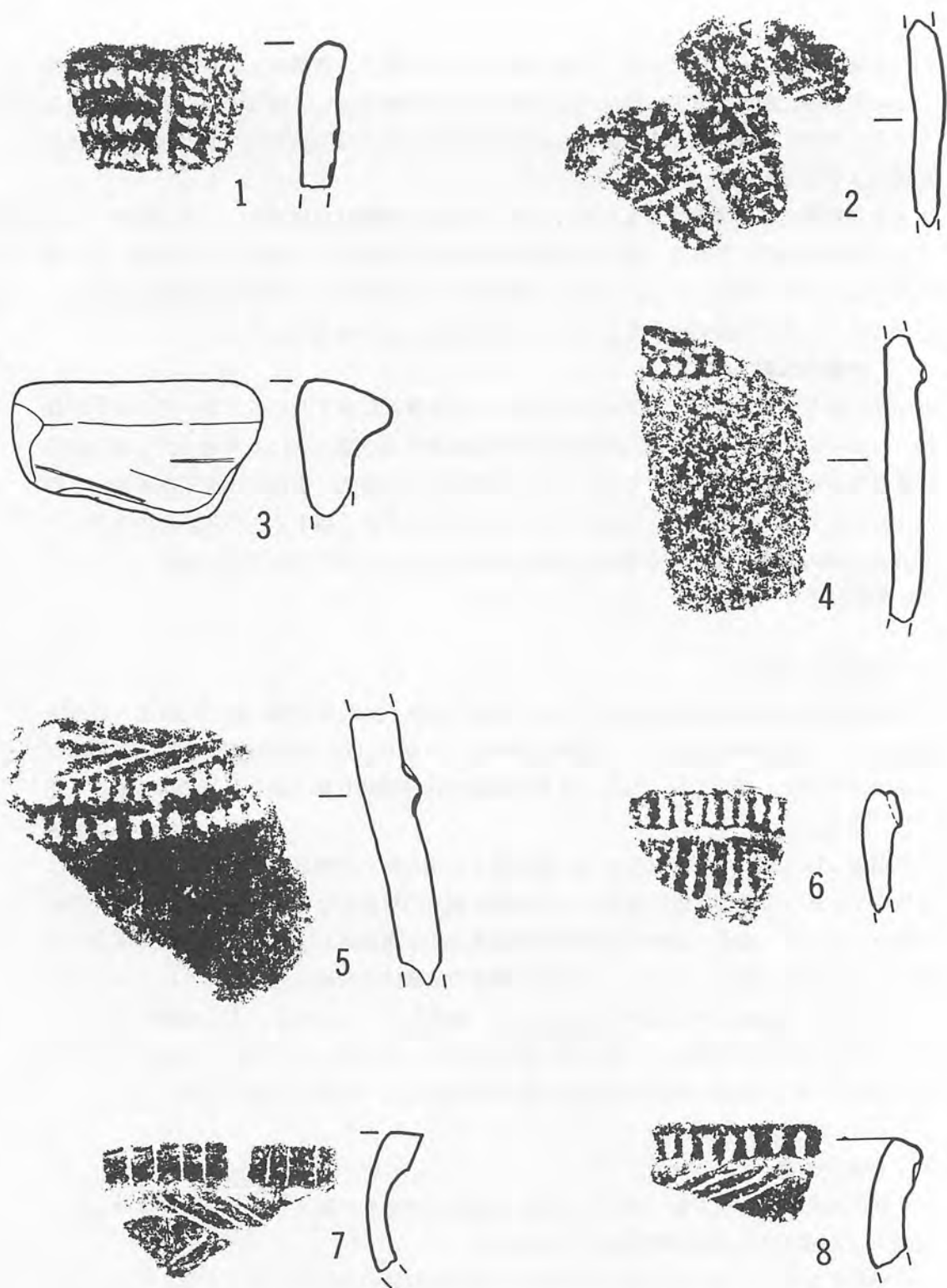
4・5は胴部の資料である。4は刻目を付した凸帯を横位に1条配し、その上方に右傾の斜沈線が1条認められる。凸帯の幅は約4mmで、断面は方形状を呈している。5は断面三角形の凸帯を横位に1条配し、その凸帯の傾斜部に横位の刻文を1条ずつ施している。その上方には方向の異なる斜沈線文が認められ、綾杉状の構成をなしていたかと思われる。

3・4の2点は胎土は精選され、混入物として石英の微砂粒を密に含み、その他金雲母片も多く見受けられる。5も胎土は精選され、石英・チャート砂粒を密に含むが、金雲母片は見受けられない。3点とも暗褐色を呈している。

6は面縄前庭式の口縁部資料である。口唇部は尖がり、口縁上端に断面が扁平な楕円形の凸帯を1条横位に繞らしている。凸帯上端と口唇部はほぼ同じ高さとなっている。凸帯上には刻目文が施され、凸帯直下の頸部には5条の縦位沈線文がみられる。縦位沈線文の施されている間隔は、凸帯上に施されている刻目文のそれとほぼ同じである。縦位沈線文の両側に無文空白部が見受けられることからすれば、5条1組のものであったと推察され、これが幾組か頸部に繞らされていたと思われる。

本型式は、口縁上端と胴上部の2箇所に横位凸帯を配し、その間に数条1組の沈線文を幾組か施すパターンのもが多く、本資料もこれに類するものであろう。石英砂粒を多量含み、赤褐色を呈している。

7・8の2点は口縁部が若干肥厚し、イメージとして面縄西洞式を想起させるが、破片



第23図 土器



のため判然としないものである。7は口縁部が若干肥厚し、頸部がしまり胴部の張る器形のようなものである。肥厚部外面に縦位の短沈線を約5mm間隔で施し、頸部では右傾の斜沈線文が3条と左傾の斜沈線文が1条認められる。破片の左側では空白部も見受けられ、全体的な構図は不明である。

8も口縁部が若干肥厚するものであるが、7に比べ頸部はほぼストレートに胴部へ移行する。肥厚部外面に単べら工具による刺突手法の刻文が横位に1条施され、頸部には左傾の斜沈線文が4条認められる。4条で1組をなすようであるが、全体的な構図は不明。

2点とも石英の微砂粒を多量混入し、7は黒褐色、8は暗褐色を呈す。

沖縄の土器

400点余りの資料が得られているが、ほとんど前Ⅳ期に属するものである。その大半がⅡ層0～30cm間で出土している。型式別の出土状況を見ると第8表に示す通りで、前Ⅳ期末に位置する室川式が圧倒的に多い。しかし、伊波式・荻堂式・大山式の前Ⅳ期前半のものはそれぞれ7点・22点・11点と少ないが、これらのいずれに属するか不明のものを含めた前Ⅳ期前半の所産と思われる資料は200点余りの出土で、全体の約半数を占めている。以下、型式ごとに略述する。

仲泊B式土器

仲泊遺跡出土のものを標識としている（註18）。近年、久里原貝塚（註19）、具志川島遺跡群（註20）等から報告がなされ、資料は増加しているものの、未だ詳細は不明で編年的な位置づけも確定していない。ただ、久里原貝塚や古座間味貝塚（註9）等では下層から出土している。

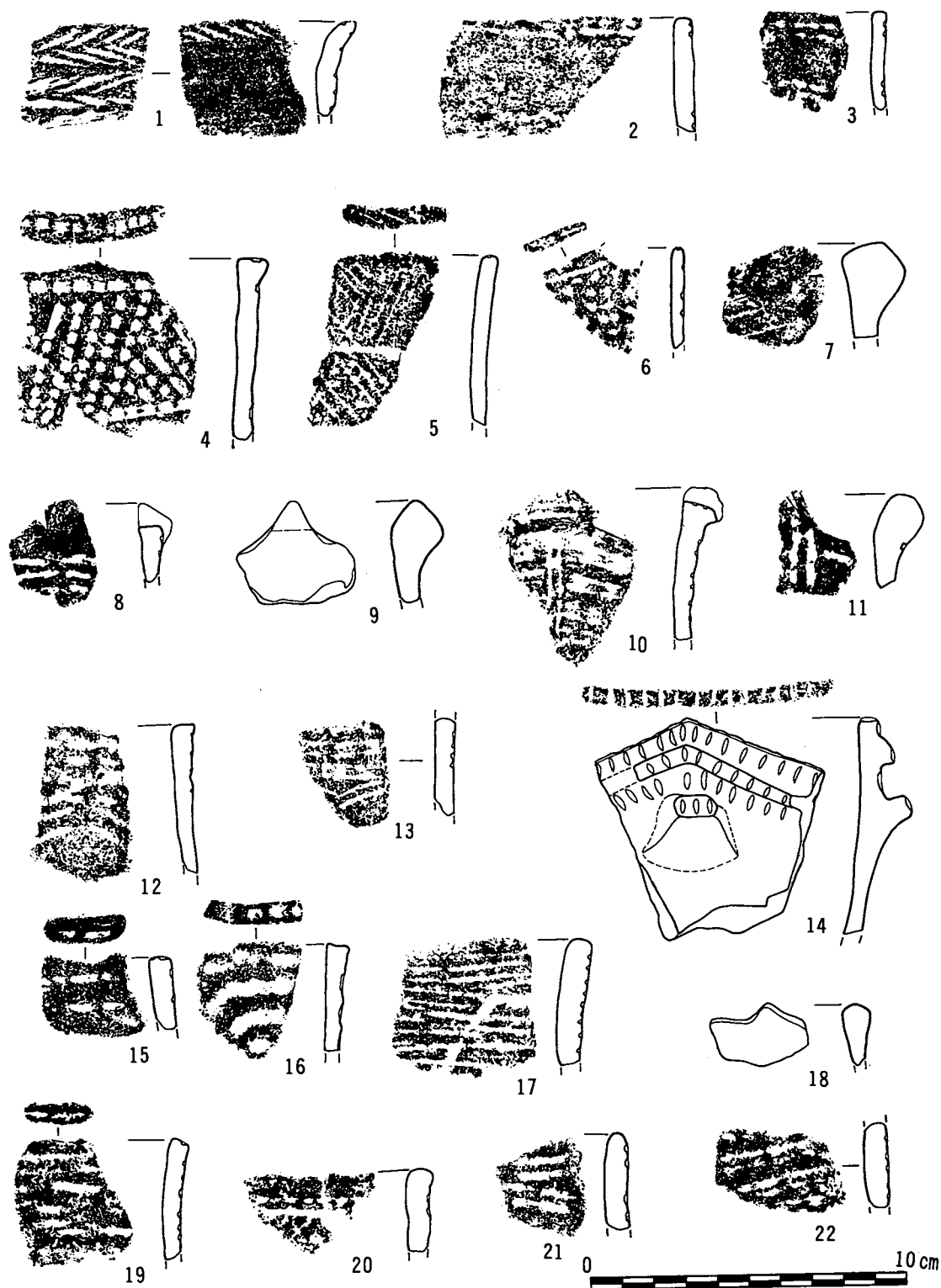
本遺跡では1点だけ得られており、第24図1に示した。口縁部が若干外反し、口唇部は舌状を呈する。口唇部に近い裏面と、口縁部が施文の対象となっており、そこへ斜沈線文が施されている。前者の箇所には右傾の斜沈線文が1条施され、後者には方向の異なる斜沈線が羽状構成に描かれている。この羽状構成の文様は2回繰り返えし施され、向きは同じ。下端部にも沈線文の1部が認められるが、破損しているためどのような構成になるか不明。胎土は精選され細かく、混入物の量は少ない。混入物として認められるものは石英・チャート砂粒である。器色は黄褐色を呈すがあせたような色になっている。

伊波式土器

7点の出土をみたが、全て破片で完形及び復元して全形の窺えるような資料は得られていない。特徴的なものを第23図2～6に示した。

やや大きな破片（2・4・5）でみると、ほぼ直口状の器形をなすようである。4・6の2点は山形を有す資料である。4は左・右の傾斜が異なるもので、大きな山と山の間にくるものか、それとも独立した1つの山なのか不明である。また、口唇部が他の資料に比して若干広がっている。

6は山形頂部を欠損するものの、山形の部分でコーナーを有すところから、室川貝塚



第24图 土器

(註21)で出土しているような、上面観が方形状を呈すグループの資料であろう。

文様については、施文の対象となるのが口唇部、口頸部に限られ、それ以外に及ばないことが知られている。口唇部の文様についてみると、4～6の3点は文様が認められ、2・3の2点は文様が見られない。4・5は単べらによる施文で、4は押し引き文、5は斜位の刻目を施している。6は棒状の工具による押し引き文を施している。4・6の2点は口頸部に施された上段の文様と一致する。

口頸部の文様については、室川貝塚(註22)で細分がなされている。即ち、上・下段に横位の文様を配し中段を無文のまま放置するグループと中段を何らかの文様で埋めるグループである。

2・3は中段を無文のまま放置するもので、2は叉状工具による点刻文を上・下段に1組ずつ左→右方向に施し、3は棒状工具による押し引き文を上・下段に2条ずつ施している。2のように叉状工具を使用した場合、破片右側のように点と点がペアになるのが普通であるが、左側では下方の点刻しか見られずペアになっていない。又、器面の保持が悪く、下段の横位文は消えかかっている。3は施文が浅い。

中段の無文空白部の幅をみると2は約2.5cm、3は約1.2cmとなっている。

4～6は中段を埋めるグループである。4は上・下段に単べらによる押し引き文を配し、中段を同種工具により方向の異なる斜位の押し引き文で充填し、組帯文のような構図となっている。5は上段の横位文が見られず、直接斜位の沈線文を施すもので、単べら工具が使用されている。斜位の沈線は3～4条で1組と思われるが、全体的な構図は不明。奄美の嘉徳Ⅱ式土器を想起させる資料でもある。

6は棒状工具による刻文を口唇部に沿って1条配し、中段を同種刻文で充填するものである。下段の文様は破損のため不明である。

5点とも石英・チャート砂粒を多量含む。6の1点は他の4点に比べ、胎土が細かい。器色は2・3・6の3点が黒褐色、4が暗褐色、5が黄褐色を呈す。器厚をみると、3・6の2点は3mm前後と薄く、2・4・5の3点は6mm前後を測る。

荻堂式土器

総数22点の出土をみたが、全て破片で完形及び復元して全形の窺えるような資料は得られていない。本型式には、嘉手納貝塚(註23)や久里原貝塚などから報告されているような壺形もあるが、本遺跡出土のものはほとんど深鉢形に属し、明確な壺形は見受けられない。特徴的なもの8点を第24図7～14に示した。13の1点は胴部の資料で、他の7点は口縁部の資料である。

深鉢形の器形は、本型式を出土する遺跡で胴上部から口縁へかけてすばまるものがよく知られているが、今回得られた資料のうち、やや大きな破片である10・12・14の3点をみると、胴部がほとんど張らず、口縁からほとんどストレートに胴部へ移行するもののようである。この種の器形は室川貝塚(註24)でも知られている。

7～11に示した5点は、本型式の特徴の一つである山形頂部の外面が瘤状に肥厚するも

のである。7は肥厚外面が丸くなるもので、肥厚直下に左傾の斜沈線文が2条認められる。8～10の3点は肥厚部外面が平坦面を形成するもので、8・9の2点は器面に対して斜位の方へ、10は器面に対して平行になるような方向で平坦面をつくっている。

8は肥厚部直下に単べらによる押し引き文が2条横位に認められるが、肥厚部直下ではたがいちがいになり切れている。9は現存の資料で口唇部、口頸部ともに文様がみられず、無文のものである。この種資料は室川貝塚・久里原貝塚などで報告されているが、量的には多くない。10は口唇部、口頸部に施文するものである。口唇部文様をみると、叉状工具による長沈線文を山の両側に1組づつ施している。山の両側だけに施されたものか、それとも口唇全体に施文したか不明。口頸部の文様は、同種工具による連点文を横位に4組施し、それを中断するように肥厚部直下から縦位の連点文を1組施す。横位の連点文は左→右へ、縦位の連点文は上→下方向の施文となっている。

11は山形頂部で破損しており、どういう肥厚形態をなしていたか不明のものである。残っている口唇部に文様はみられない。口頸部の文様は、口縁部上端に単べら工具による押し引き文を横位に1条施し、肥厚部直下では同種工具による縦位の押し引き文が2条認められる。横位文は左→右方向へ施文している。縦位文は上→下の方向へ施文されているが、何条施されていたのか不明である。破片の右下端部では若干の無文空白部が認められる。

5点とも石英・チャート砂粒を多量混入するもので、7は黒褐色、8は赤褐色、9～11は暗褐色を呈している。

12・13に示したものは、横位文と鋸歯状文を施すものである。室川貝塚（註25）では鋸歯文の施される位置により細分されているが、12・13とも小破片でどの部位に鋸歯文が施されたものか不明である。

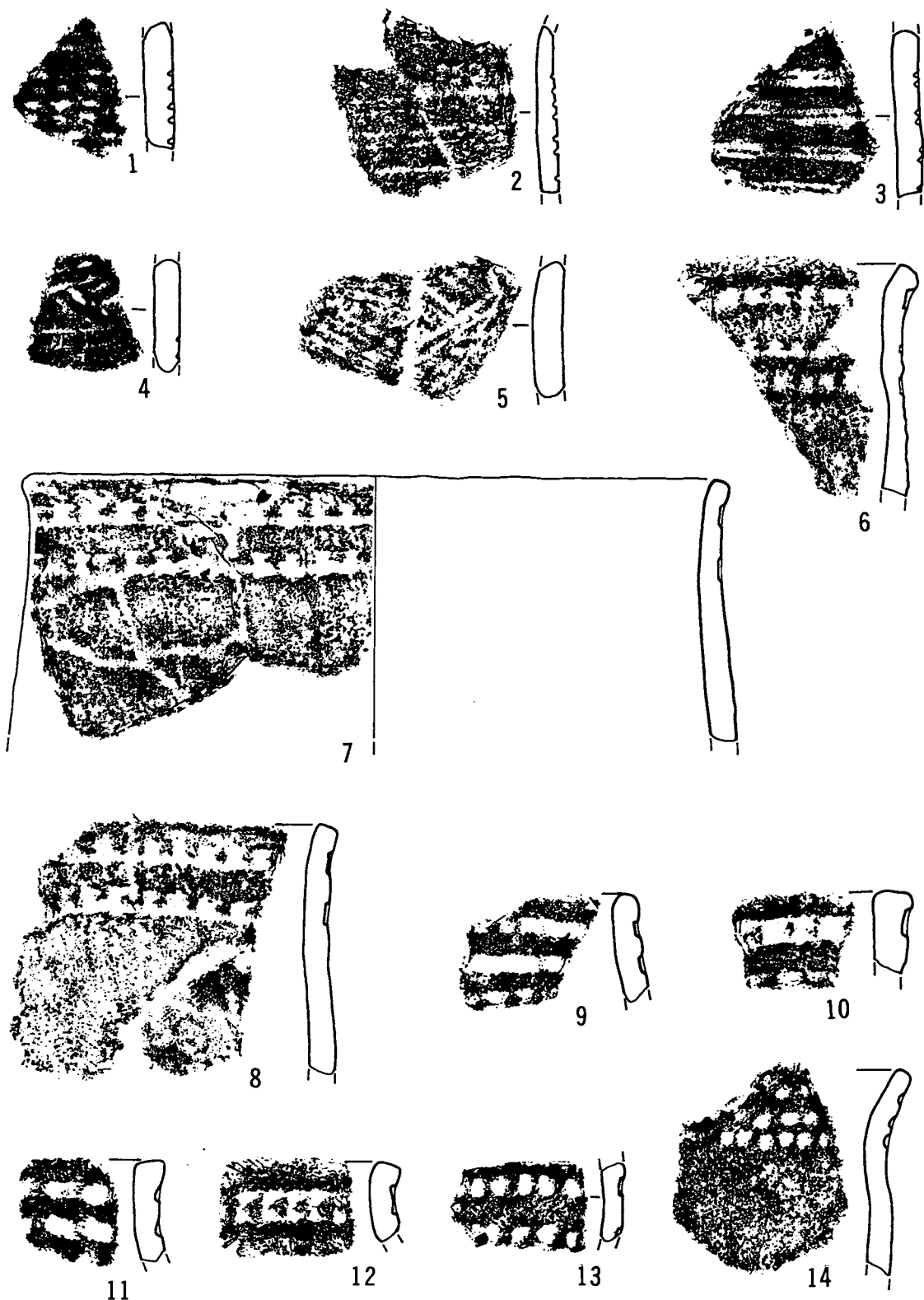
12は叉状工具による点刻文を口縁上端横位に施し、その下方に左傾・右傾の斜沈線を1組づつ配し、鋸歯文を描出している。そのため連続したものではなく、鋸歯の頂部が切れたものとなっている。13は半截竹管状工具による横位連点文が2組と、その直下に連続する鋸歯文を1組施しているのが認められる。

両者とも石英・チャート砂粒を混入する。12は黄褐色、13は赤褐色を示す。

14に示すものはいわゆるシェヴロン状の山形をなす口縁部資料である。口唇部・頸部が施文の対象となっており、口唇部の文様は単べらによる刻目文で、現資料からすると口唇部全面に施されたものと考えられる。口頸部の文様は単べら工具による刻文と凸帯及び瘤状突起が組合わされている。口唇部から約5mm（施文具の幅）下方に、断面方形状の凸帯（幅約5mm）を口唇に沿って1条配している。そのためこの凸帯も口縁部と同様の山形をなしている。この凸帯の直上・直下及び凸帯上に、単べら工具による横捺刻文を1条、凸帯に沿うように施している。又、山形頂部の下方約3cmの箇所には、巾5mm、厚さ5mm、長さ1.5cmの小突起を上方に押し上げるように横位に付している。

石英・チャートの粗砂粒を多量混入し、外面が赤褐色、内面が暗褐色を呈す。

この他に伊波式か萩堂式か不明のものが60点得られ、その中で特徴的なものを第24図15～22及び第25図1～5に示した。



第25図 土器

第24図15～21に示したものは口縁部の資料で、15・16・18・21の4点は山形口縁、あるいはそれに移行する部分の資料であるが、いずれも小砂片のため形状を明確にし得ない。

文様についてみると、口唇部・口頸部に施文されている。口唇部に施文するものは、15・16・19・21の4点で、前3者は単べら工具、21の1点は叉状工具を使用している。15は短沈線文、16は押し引き文、19は長沈線文、21は連点文とそれぞれ異った文様要素を採用している。21は叉状工具を使用しているものの磨耗が著しく、片方の文様だけが残っている。

施文部位は破片のため不明であるが、16は1段上がった部分に施文され、低い部分には施文されていないようである。

口頸部文様も単べら工具・叉状工具が使用されている。15・16・19・20の4点は、単べら工具を使用したもので、15は横位の短沈線文が2条認められる。16は横位の押し引き文を施しているが、3条目の押し引き文は左側で斜位の方角になっている。19は横位の沈線をラフに数条施している。20は横位の押し引き文が2条認められる。叉状工具を使用したものは17・21の2点で、17は横位の長沈線をラフに施し、21は連点文を斜位に施している。

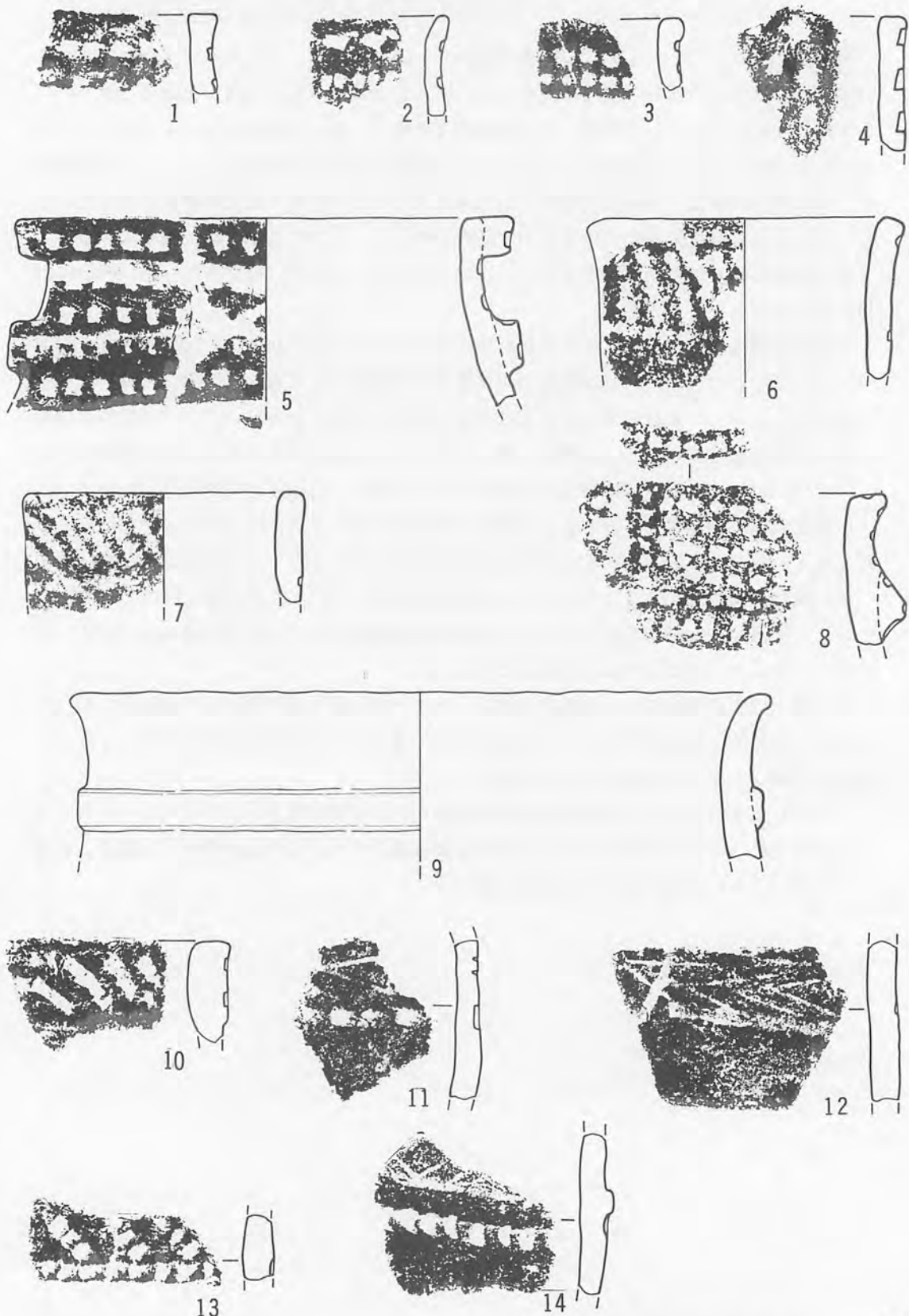
口唇部文様と関連させてみると、口唇部に施文するもの4点はいずれも口頸部に施された文様と一致している。18に示した資料は現存の部分でみる限り、文様は認められない。

第24図22、第25図1～5に示したものは胴部の資料で、いずれも叉状工具により施文している。第24図22、第25図1～3の4点は横位に数組施すもので、前2標品は点刻文・第25図2は連点文、3は長沈線文を施している。

第29図4は下段に横位の短沈線文を施し、その上方に斜位の短沈線文を綾杉状に配しているが、全体的な構図は不明。5は右側の斜位の連点文と左傾の斜位の長沈線文を施し、綾杉状の構成をなすが規則性がなく雑然としている。

いずれも施文は深いが、焼成が悪く器面が剥がれ、文様が消えかかっているものもある。

以上の資料はすべて石英・チャート砂粒を多量混入する。器色は暗褐色、赤褐色、黄褐色のものが見られ、暗褐色のものが相対的に多い。



第26图 土器

第7表 遺構外部位別出土状況

層 部 位 序		口 緣 部		胴 部		底 部		計
		有文	無文	有文	無文	平底	丸底	
I 層		10	4	4	76	6		100
II 層	0～10	30	46	17	820	9		922
	10～20	43	85	30	1,122	13		1,293
	20～30	14	28	20	194	6		262
	30～40	6	6	4	105	3		124
	40～50	16	3	11	194	7	1	232
	50～60	6	7		132	1		146
	60～70	7	5	7	173	3		195
	70～80			4	1212			16
	80～90	3			1010			13
計		135	184	97	2,838	48	1	3,303

第8表 遺構外型式別土器出土状況

型式 層序		仲泊 B	伊波 式	伊・荻 不明	荻堂 式	荻・大 不明	大山 式	伊・大 不明	室川 式	宇佐 浜式	嘉徳 Ⅰ式	面縄 前庭式	西洞・喜 念Ⅰ不明	喜念 Ⅰ式	宇宿上 層式	不 明	計
Ⅰ層				2	2	1		6	7								18
Ⅱ層	0～10	1	2	9	6	3	11	12	43	3				1		2	93
	10～20		1	22	4	14	4	29	81	1			1		1		158
	20～30			4	3	4	2	9	38	1				1			62
	30～40		1	5				3	7								16
	40～50		2	14	2	1	2	5	1	1	1	1					30
	50～60		1	1	1	1			6		1			1			13
	60～70			2	3			6	8								19
	70～80				1			2			1						4
	80～90			1				2									3
計		1	7	60	22	24	19	75	191	6	3	1	1	3	1	2	416

大山式土器

総数19点得られているが全て破片で、完形及び復元して全形の窺えるような資料は得られていない。そのため器形、大きさ等については、口縁部破片から推定せざるを得ない。特徴的なものを第25図6～14、第26図1～7に示した。

ほとんど深鉢形に属するもので、明確に壺形を示すものは見受けられない。胴上部まである割りと大きな破片が数点あり、それらをみると器形は概ね3種認められる。即ち、第25図6・14のように口縁部上端が外反するもの、第25図7・8のようにほとんど直口状を呈すもの、及び第26図5のように口縁部がすばまり、胴部が張るものである。ただ、点数が少ないため、どの器形のものがより主体的であったかは不明。

又、口縁部は全て平口縁で、室川貝塚（註26）で報告されているような山形へ移行するようなものは得られていない。口縁部は肥厚しないものが普通であるが、第26図5は口縁上端に断面方形状の凸帯を貼り付け肥厚させている資料である。この種の類例は、伊是名貝塚（註27）、久里原貝塚等で報告されている。

大きさについてみると、口径の推算出来たものが4点で、第25図7は約19cm、第26図5は約14cm、同図6は約9cm 7は約8cmとなっており、それぞれ大きさが異なるようである。高さについては、復元可能なものが得られてなく不明である。

文様をみると概ね3種認められる。第25図6・7のように横位文に終始するもの、第26図5のように横位文に凸帯を加えたもの、そして横位文に斜行文を組み合わせたものの3種である。今回得られたものは横位文に終始するものが多く、これは押し引き文を施すものと刻文を施すものが認められる。

施文部位は胴上部までに限られ、口唇部、内面、及び胴下半部に施文するものはない。ほとんど単べら工具を使用しているが、第25図6・12は半截竹管状工具を使用している。

横位文に終始すると思われるものを第25図6～14に示した。普通、横位文は2～4条施すが、今回得られたもので条数の判明するものは4点だけである。7・8は2条施すもので、5mm巾の単べら工具による押し引き文を採用している。左→右方向へ施され、施文は深く明瞭である。

6・14は3条施すもので、6は半截竹管状工具による押し引き文を左→右方向に施文している。1条目と2条目の間隔は約1cmと広く、2条目と3条目は接して施され、施文は深い。14は先の丸味を帯びたへらを使用している。横捺刻文を左→右方向に施し、施文は深い。1条目と2条目の間隔が、2条目と3条目のそれより若干広がっている。

他の資料もこれに類するものと思われるが、破片のため条数は不明である。

全て石英・チャート砂粒を多量含み、7・11・12の3点は赤褐色・他は暗褐色である。

第26図5は口縁上端と胴上部に断面方形状の凸帯を1条づつ繞らすもので、凸帯の巾は約1cmである。凸帯上に1条づつ、凸帯間に2条、4mm巾の単べら工具による横捺刻文が左→右の方向に認められる。胴上部に貼り付けられた凸帯の上縁にも、同種の文様が1条みられる。凸帯下方に文様に及ばない。施文は深く、力強さを感じさせる。

石英・チャート砂粒を多量含み、器色は暗褐色を呈す。胎土が精選され、器表面の調整も丁寧である。

同図6・7に示したものは横位文と斜行文を施したもので、類例は室川貝塚で報告されている。両標品とも3mm巾の単べら工具が使用されている。6は口縁上端と胴上部に1条づつ左→右方向の押し引き文を配し、その間を右傾の斜位の押し引き文で充填している。斜行文は上→下の方向である。7も6と同様な構図をみせるが、口縁上端の横位文が欠失している。施文手法、施文方向は6と同様である。

両者とも石英・チャート砂粒を多量に含み、器色は暗褐色を呈す。

1～3に示した3点は横位の刻文・押し引き文が2条認められる口縁破片で、荻堂式か大山式か不明のものである。石英・チャート砂粒を多量含み、器色は5が赤褐色、6が黒

褐色、7が暗褐色を呈す。

11～14の4点は伊波～大山期の所産と思われるが、いずれに属するか不明のものである。4点とも胴部の破片で、11・12は横位の刻文・凹線文を1条配し、その上方に羽状構成の斜沈線文を施している。13は横位押し引き文と斜行の押し引き文を組み合わせ、14は横位凸帯を1条施し、その直下に先端の丸いへうによる横捺刻文を1条横位に配し、凸帯上方に方向の異なる斜沈線文を施している。

石英・チャート砂粒を多量含み、器色は12が赤褐色・他の3点は暗褐色を呈す。

9に示したものは横位凸帯を1条綾らしただけで、他の文様は見られない。口縁部上端をわずかに肥厚させ、口唇下約2.5cmの箇所に幅約1cmの断面が偏平な凸帯を1条横位に配している。推算口径は約19cm。久里原貝塚や伊是名貝塚などで報告されているものに類する資料かと思われる。石英・チャートの粗砂粒を多量含み、赤褐色を呈す。

カヤウチバンタ式

第26図8・10の2点が本型式に含め得るものと思われる。2点とも口縁部の資料で、前者は花鉢状に肥厚するもので、後者は凸帯を横位に圍繞させることにより段を設けている。けている。

8は断面台形状の凸帯を口唇下約3cmの箇所に、横位に1条配し段を設けるものである。口唇部とその凸帯間に1条の縦位凸帯を施すが、完形において何箇所に配したかは不明。口唇部及び口唇部と横位凸帯間、そして縦位、横位の凸帯上に単べらによる刻文を施す。口唇部と横位凸帯間には4条みられるが、その3条目は押し引き文となっている。この横位文は前述の縦位凸帯で切られ器面を圍繞しない。横位凸帯下にも縦位文の1部が認められるが、そこで破損しているためどういう文様か不明。

石英・チャート砂粒を多量含み、赤褐色を呈す。

10は口縁部上端がわずかに肥厚し、口唇部を若干広くみせる。文様は肥厚部外面に、3mm巾の単べらエ具により押し引き文を施している。面縄東洞式にみられるような文様構図で、左側は水平方向から右斜め方向へ、右側は右斜め方向から水平方向へかえす手法である。そのため1つの連続した文様とはなっていない。この種のものは大山貝塚（註28）でも報告されている。石灰質砂粒を多量混入する他、石英砂粒を含む。器色は暗褐色を呈す。

b表 室川式口縁形態別出土状況

層	口縁形態										不明	計
I 層		3	1	1	2				2			7
II 層	0~10	6	1	3	3	3	5	3	8	7	5	43
	10~20	23	4	4	1	7	7	4	12	9	8	81
	20~30	4	1	1		2	6	3	7	5	8	38
	30~40	1		1					3	2		7
	40~50							1				1
	50~60	3				1			1	1		6
	60~70	1					3			1	3	8
	70~80											
	80~90											
計		41	7	10	6	13	21	11	33	25	24	191

室形式口縁形態の類別出土状況

層	口縁形態										不明	計
I 類		13	1	4	2	7	6	6	12	10	10	7070
II 類		28	6	6	4	7	15	5	21	15	14	121
計		41	7	10	6	13	21	11	33	25	24	191

室川式土器

総数 191点と最も多く得られているが、全て破片で完形及び復元して全形の窺えるような資料は得られていない。出土状況を見るとII層60~70レベルまでの出土で、それ以下のレベルでは検出されていない。II層0~30レベル間に集中的にみられ、本型式に属する口縁部破片全体の約84%が出土している。以下、本型式の特徴について略述する。

器種

壺形と深鉢形が得られているが、前者に属すものは第28図1の1点だけで、他は全て後者に属す資料と思われる。

壺形

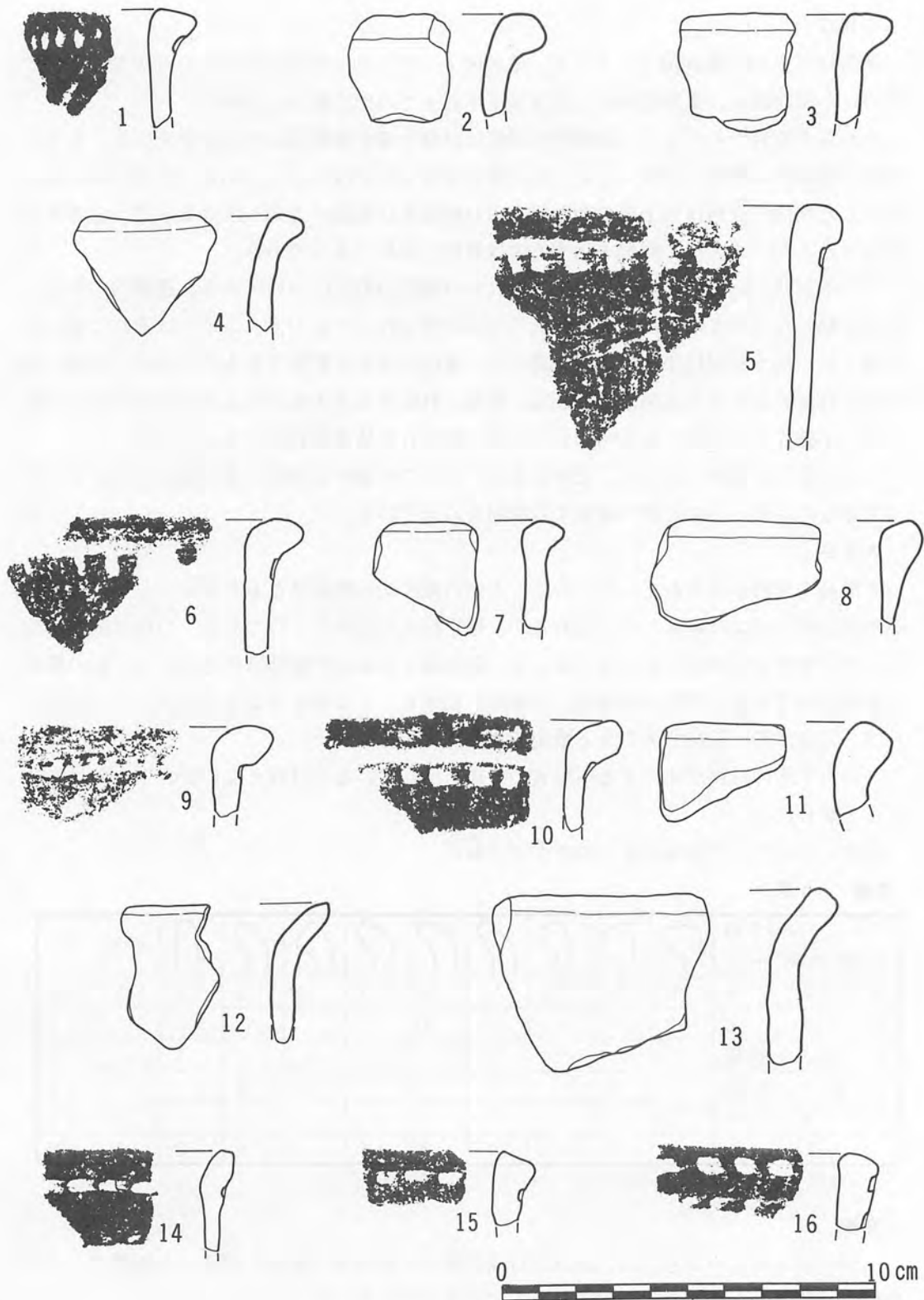
第28図1に示す1点で、口縁部に近い部分の破片で上端（口唇部）を欠損しているため、口縁部形状は不明である。現標品から推定すると頸部でわずかにしまり、口縁へ若干外反する短頸の部類に属す資料と思われる。肩部はあまり張らずいわゆるナデ肩を呈している。頸部の最もしまった部分の径が推定10cm、最も径の大きい胴上部で約21cmを測る。

現資料でみる限り、文様は認められない。

胎土は細かく、石英の粗砂粒や粘板岩碎片を多量混入し、それからすれば深鉢形の項で述べるII類に属する資料である。器色は橙褐色を呈している。

深鉢形

今回得られた資料のほとんどが本器種に含まれるが、前述した通り完形及び復元して全形の窺える資料が得られていないので、器形、大きさ等については口縁部破片から推定せざるを得ない。



第27図 土器

るを得ない。

第27図5・13、第28図3・4・8、第29図1・3・10に示した8点がやや大型の破片で、そのうち第28図8、第29図10の2点は胴下半部までの図上復元を試みた。

これらの資料からすると、深鉢形の器形は口縁上端が肥厚又は外反を示すなど、色々に変化し頸部から胴部へほぼストレートに移行するものがほとんどである。ただ、第31図1に示した胴部の資料は胴上部で若干脹らみ口縁部及び底部の方向へすばまるような器形が想定されるが、この種の器形を示すものは量的に少ないようである。

次に本型式の特徴の1つとして上げられる口縁部の形状についてみる。遺構内の土器の項で分類したものとほとんど同じ形状のものが得られているので、ここではそれに従って分類した。出土状況は第b表に示す通りで、量的にみると肥厚するものが58点で全体の約30%、外反を示すものは84点で約43%、肥厚、外反を示さず直口のもは25点の出土で約13%、小破片のため形状が不明のものが24点得られ全体の約12%となっている。

これをさらに細かくみると、肥厚するものはイの形態が圧倒的に多く出土しており、外反するものはチ・への形態へ集中する傾向をみせている。

大きさ

完形品の資料が得られていないので、大型の破片から推定せざるを得ない。第28図8、第29図10の2点は口縁部だけではあるが、推定復元を試みたものである。口径は前者が約21.5cm、後者が約20cmとなっている。又、第31図1に示した胴部破片をみると、胴の最大径が約20cmであり、本型式の場合、口縁部が肥厚もしくは外反するものが多いことからすれば、口径は20cm前後であろうと推定できる

これら3点の口径がそのまま本型式の口径を示しているとは言えないが、1つの目安になると思われる。

高さについては完形品がないので不明である。

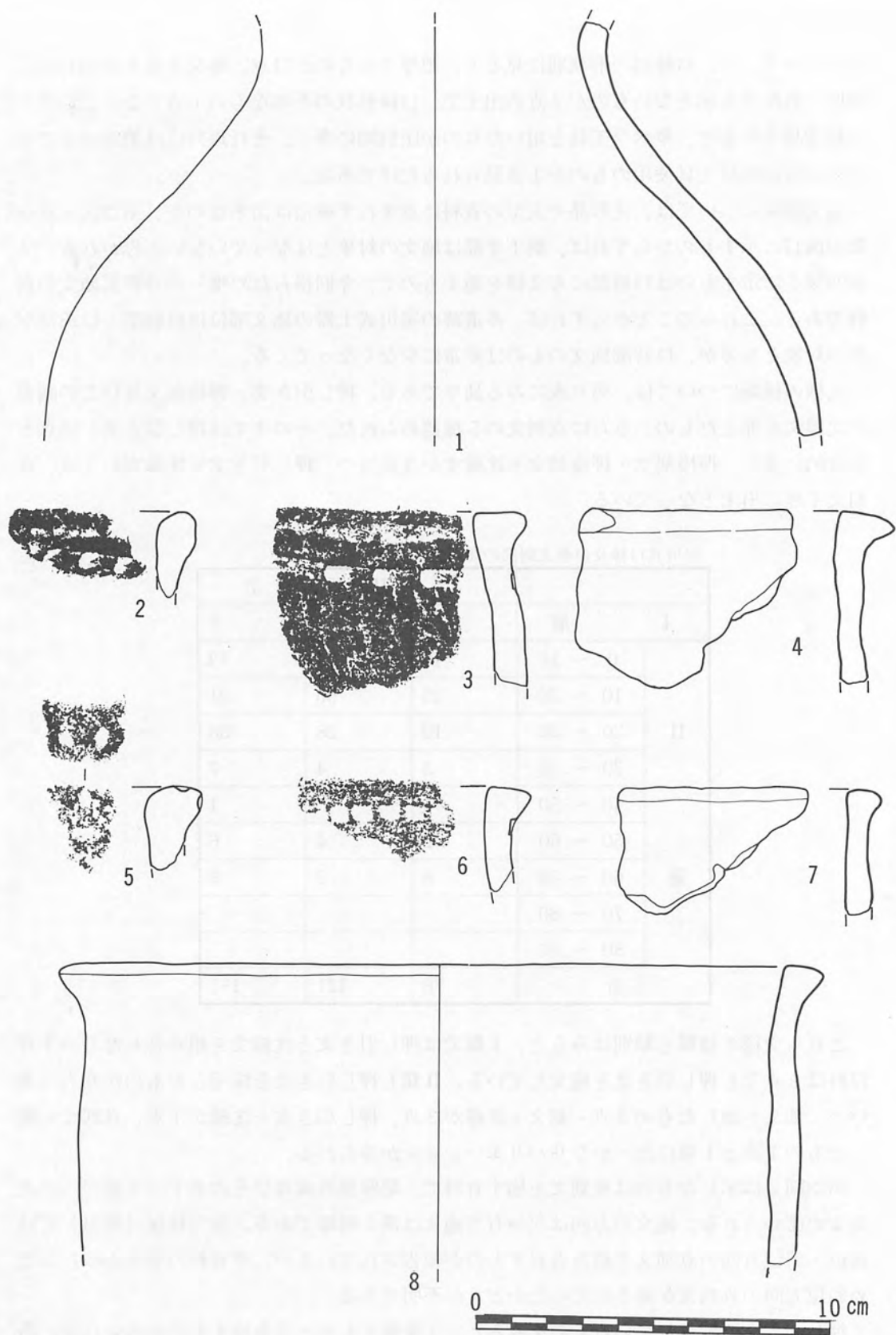
文様 c表

口縁形態 文様の種類										不明	計
押し引き文	5	1	1		2	3		1	1	1	15
刻文	2				1						3
押し引き+沈線						1			1		2
刻文+沈線		1						2			3
点刻文	1										1
計	8	2	1		3	4		3	2	1	24

文様

文様の施されているものは、24点で口縁部破片の約12%である。伊波～大山期のものに比較すれば、かなり無文化の傾向を示しているといえる。

これを胎土・混入物の項で分類する類別、及び口縁形状に関連させてみると、I類は10点で約14.2%、II類は14点で約11.5%となり、その比率からすればI類のほうが若干多く



第28図

なっている。又、口縁部の形状別に見ると、肥厚するものが11点、外反するものが10点、肥厚・外反等を示さないものが2点の出土で、口縁形状の不明なもの1点となっている。

施文具をみると、単べら工具を用いたものが圧倒的に多く、それ以外には第28図2に示すところの叉状工具使用のものが1点見られるだけである。

施文部位については、完形品や大型の資料に恵まれず確信は出来ないが、第28図3及び第30図17に示すものからすれば、胴下半部は施文の対象とはなっていないと思われる。又、第28図5に示すものは口唇部にも文様を施すもので、今回得られた唯一の口唇部施文の資料である。これらのことからすれば、本遺跡の室川式土器の施文部位は口唇部・口頸部がその対象となるが、口唇部施文のものは非常に少なくなってくる。

文様の種類については、第○表にみる通りである。押し引き文、押捺刻文及びこの両者に沈線文を加えたもの、さらに点刻文の5種認められた。その中では押し引き文が15点と圧倒的に多く、押捺刻文・押捺刻文+沈線文が3点ずつ、押し引き文+沈線文が2点、点刻文1点の出土となっている。

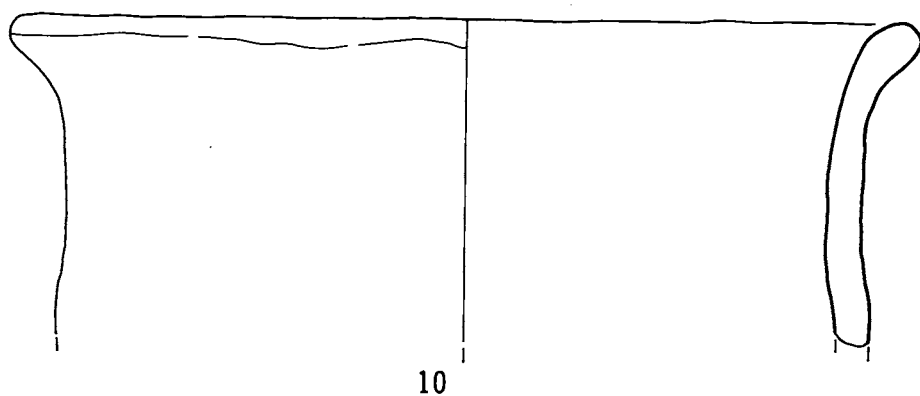
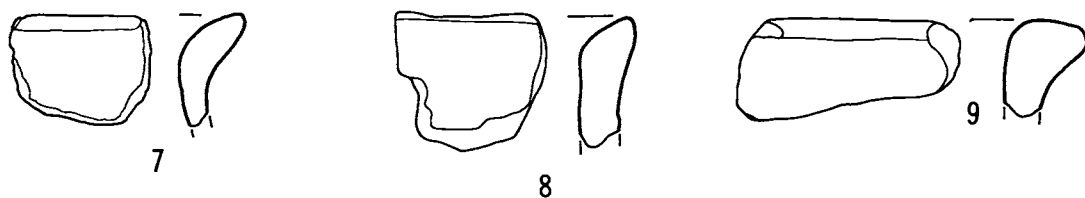
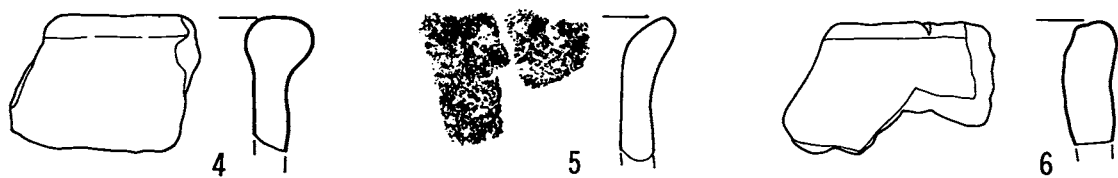
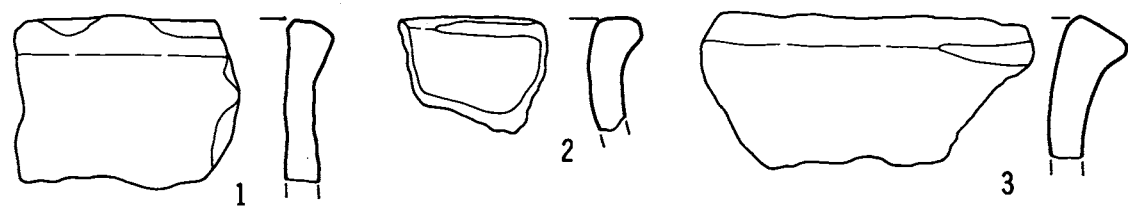
室川式口縁及び有文胴部の類別出土状況

		I 類	II 類	計
I 層		4	3	7
II 層	0 ~ 10	19	24	43
	10 ~ 20	25	56	81
	20 ~ 30	10	28	38
	30 ~ 40	3	4	7
	40 ~ 50	1		1
	50 ~ 60	2	4	6
	60 ~ 70	6	2	8
	70 ~ 80			
	80 ~ 90			
計		70	121	191

これら文様の種類を類別にみると、I類では押し引き文と沈線文を組み合わせたもの1点以外は9点とも押し引き文を施文している。II類も押し引き文を採用したものが6点と多いが、刻文を施したものの3点・刻文+沈線が3点、押し引き文+沈線が1点、点刻文を施したものの1点とI類に比べかなりバリエーションがみられる。

第28図2に示したものは点刻文を施す資料で、肥厚部外面及びその直下に1組ずつの点刻文が認められる。施文の方向は左→右で施文は深く明瞭である。室川貝塚（註21）では横位・斜位方向の点刻文を組み合わすものが報告されているが、本資料の場合小破片のため斜位方向の点刻文が施されていたかどうか不明である。

押し引き文の施されているものをみると、1条施すものと2条施すものがみられる。第27図5、第28図3などが1条施すものの確実な資料である。第27図5は肥厚部直下に左→



第29図



右方向の押し引き文を1条施すものである。引きの間隔は約1cmで施文は深く明瞭である。第28図3は肥厚部の下方、頸部に左→右方向の押し引き文を1条配すものである。引きの間隔は約1.5cmで施文は深く明瞭である。

2条配すものの確実なものは第27図16に示すもので、口縁上端に3mm巾の単ベラ工具により左→右方向の押し引き文を2条施している。

刻文を配しているものは第27図16のように2条認められるものもあり、複数施すものがあることは確実であるが、明確にその条数をつかめるような資料がなく条数については不明である。しかし、その施文手法にはいくつかあるようで、第28図6のように器面に押圧した部分が若干広くなるものと、第29図12のように縦の線状になっているものがある。このような刺突的な刻文は大山式の時期によくみられ、このようなことなどからも大山式に後続することが窺える。

第28図5は口縁形態で言うとイタイプに属し、口唇部・肥厚部外面に1条ずつ認められるが、以下は破損のため不明。第27図16はチタイプに含まれるもので、口縁上端に2条認められるものの文様下端で破損しており、以下の文様については不明である。

第30図8・9に示した2点は刻文と沈線文を組み合わせたもので、8は口縁上端に単ベラ工具による刺突的な刻文を横位に1条配し、その下方に横位沈線文を2条施している。横位沈線文は器面を囲繞するものと思われる。施文は深く明瞭で、刻文は左→右方向へ施文している。沈線文の下端で破損しているため、以下の文様については不明。9も8と同様な文様構図を有すものであるが、横位沈線文は1条だけである。本標品も小破片のため8と同様以下の文様については不明である。

胎土・混入物

本型式の特徴の一つとして混入物がある。型式設定のなされた室川貝塚では、石英・チャート砂粒を多量混入する伊波～大山期のもものと異なり、石灰質砂粒を多量混入することが報告されている。

本遺跡の遺構外出土のものをみると、石灰質砂粒を混入するものも見受けられるが、量的には非常に僅少である。目につく混入物として粘板岩碎片があり、遺構内の土器同様、粘板岩碎片を混入するものとししないものの2種に分類した。つまり、Ⅰ類は粘板岩碎片を混入しないもの、Ⅱ類は粘板岩碎片を混入するものである。

その類別の出土状況を第b表に示した。それをみるとⅡ類が圧倒的に多く、遺構内の出土状況とは異っている。

口縁部形状と関連させてみると、Ⅰ類は肥厚するものが約25%、外反するものが45%、肥厚・外反を示さないものが約14%となっている。Ⅱ類は肥厚するものが約33%、外反するものが約42%、肥厚・外反を示さないものが約12%である。比率からすればⅠ類に比べⅡ類は肥厚するものが増えている。

これをもう少し細かくみると、Ⅰ・Ⅱ類とも肥厚するものはイのタイプに集中するようである。外反するものをみると、Ⅰ・Ⅱ類ともチのタイプが多く、Ⅱ類ではへのタイプも多い。Ⅰ・Ⅱ類とも少ないのは二のタイプである。

第27図に示したものがⅠ類に属す資料で、Ⅱ類に属す資料は第28図～第31図1に示した。

器色

今回得られた資料をみると、赤褐色・黒褐色・暗褐色・黄褐色・橙褐色の5種認められる。暗褐色を呈すものが最も多く、次いで橙褐色・赤褐色のものと続き、黒褐色・黄褐色のものは僅少であった。

これを前項で分類したⅠ・Ⅱ類別にみると、Ⅰ類では暗褐色のものが半数以上を占め、次に赤褐色・黒褐色となり、橙褐色を呈すものは1点だけの出土で、黄褐色のものは得られていない。Ⅱ類もⅠ類と同じように暗褐色のものが最も多く得られているが、橙褐色のものが50点とⅠ類に比べると大幅に増加しているのが目につく。赤褐色を呈すものは5点の出土で、これはⅠ類に比較すると少なくなっている。この傾向は遺構内の場合と同様である。黒褐色を呈すものも同様である。又、Ⅰ類で出土をみななかった黄褐色を呈すものが、3点得られている。

器色（Ⅰ類）

口縁形態 色 調	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ	不明	計
赤 褐 色	4	1	1				3	2	1	2	14
黒 褐 色	3				1				1	1	6
暗 褐 色	6		3	2	5	6	3	10	8	6	49
黄 褐 色											
橙 褐 色										1	1
計	13	1	4	2	6	6	6	12	10	10	70

器色（Ⅱ類）

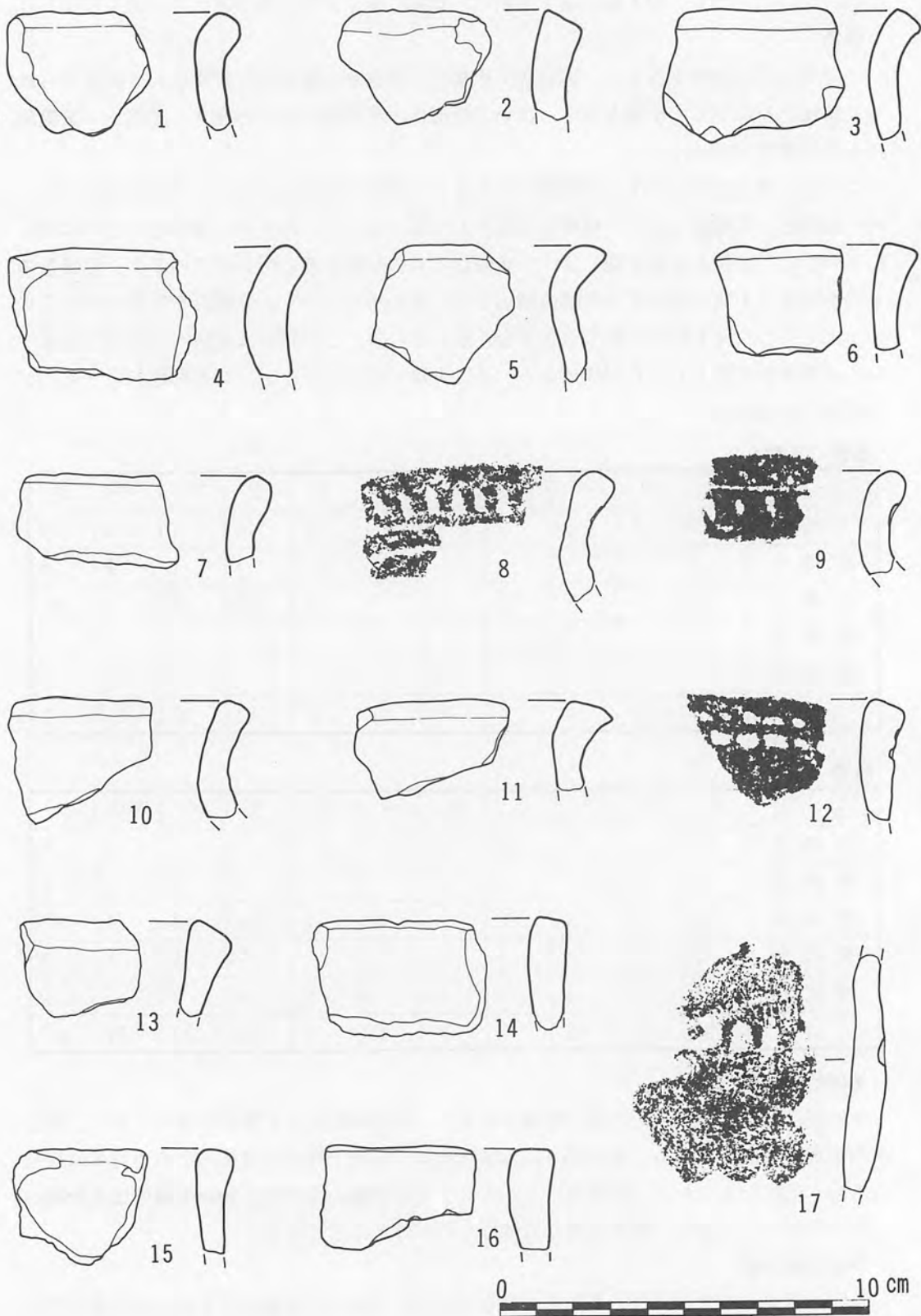
口縁形態 色 調	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ	不明	計
赤 褐 色				2	1					2	5
黒 褐 色	1							1	1		3
暗 褐 色	18	3	3	1		10	3	14	4	4	60
黄 褐 色	1								1	1	3
橙 褐 色	8	3	3	1	6	5	2	6	9	7	50
計	28	6	6	4	7	15	5	21	15	14	121

その他の特徴

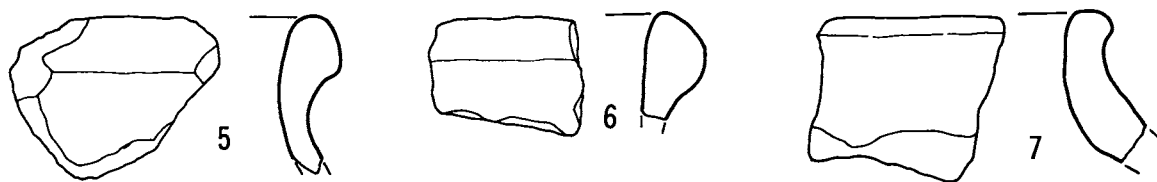
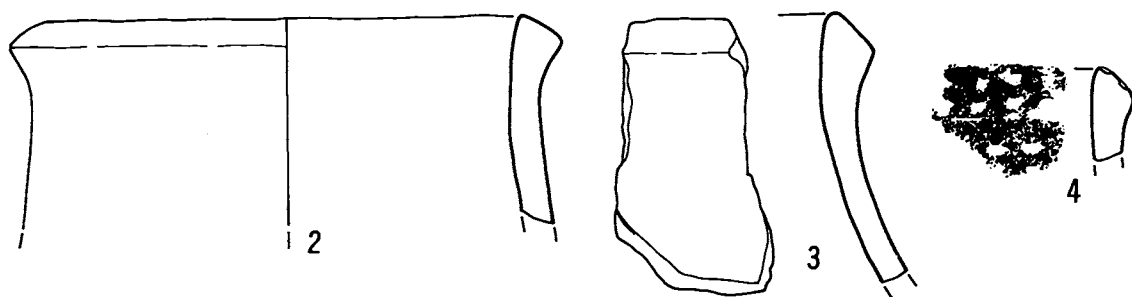
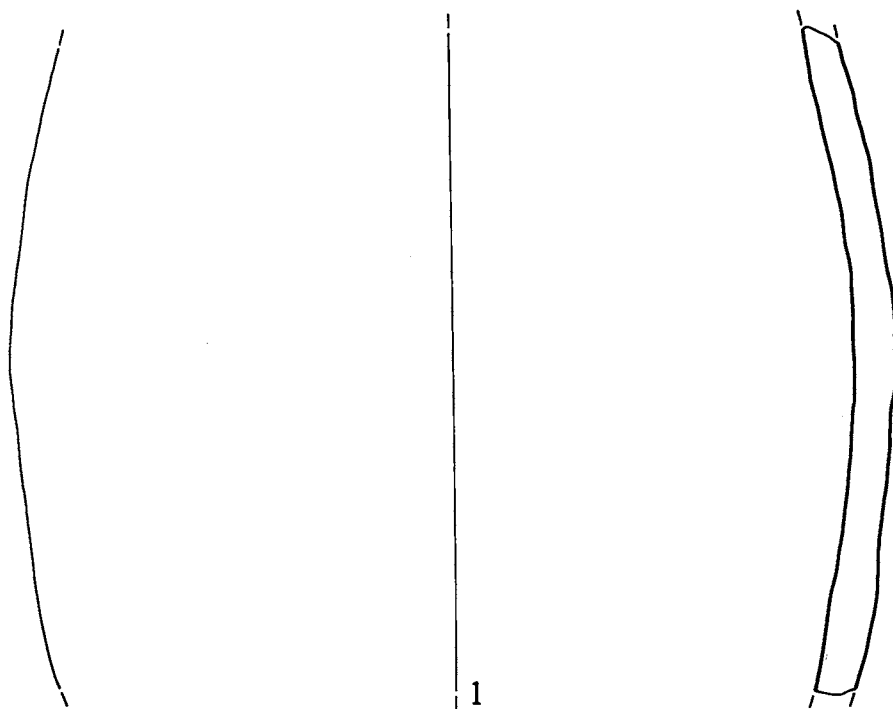
今回得られた資料の上記以外の特徴をみると、器面調整はナデ調整がほとんどで、擦痕を残す資料は僅少である。第27図5に示す資料は、口縁上端では横位のその下方では縦位の方向へ擦痕が見られる。器厚はほとんど6～8mm前後のもので、10mmを越すような厚いものは見受けられない。焼成は悪く危弱なものがほとんどである。

宇佐浜式土器

今回の調査で本型式に含め得るものは6点出土しており、特徴的なもの5点を第31図2～6に示した。全て破片で全形の窺えるような資料は得られていない。器形については口



第30図



第31図 土器

縁部破片から推定せざるを得ない。しかし、器形の推定出来るものは2・3に示した2点だけで他は不明である。2・3とも深鉢形の資料で、2は胴部があまり張らずほぼストレートになり、3は胴下半部が張るものである。

口縁部の断面に2種みられ、2～4に示すような三角形状を示すものと、5・6のようなカマボコ状の肥厚を示すものである。

口径の推算可能なものは2の1点だけで約12cmを測る。

文様を施すものは4に示す1点で、他は無文の資料である。4は先の平坦な叉状工具による点刻文を、肥厚部外面及びその直下に1組つつ横位に施している。しかし、肥厚部下の文様はそこで破損しているため、以下の状況は不明である。文様は左→右方向で、施文は深く明瞭である。

胎土・混入物をみると、4の1点のみが粘板岩碎片を混入し、前述の室川式の特徴に類似する。2・3とも胎土は細かいが、混入する石英・金雲母片の粒が2は粗く、3は細かい。そのため2は器面に混入物が露出しザラついている。5・6は胎土・混入物とも非常に細かく、混入物の肉眼観察は困難であるが、見受けられる混入物は金雲母片である。

器面の調整をみると、2は外面は丁寧なナデ調整を施しなめらかであるが、内面は混入物が露出しザラザラしている。3は表裏面ともナデ調整が施されなめらかである。4もナデ調整を施すが雑である。5・6の2点は器面の保持が悪く不明。

2・4は暗褐色、3は赤褐色、5・6は黄褐色を呈す。

無文胴部

前述した口縁部及び有文胴部片の他、2,800点余りの無文胴部片が得られている。これらの無文胴部片の資料も幾つの特徴を調べることにより、ある程度その所属時期を推定することが可能かと思われる。そこで、本項では胎土・混入物で分類を試みた。

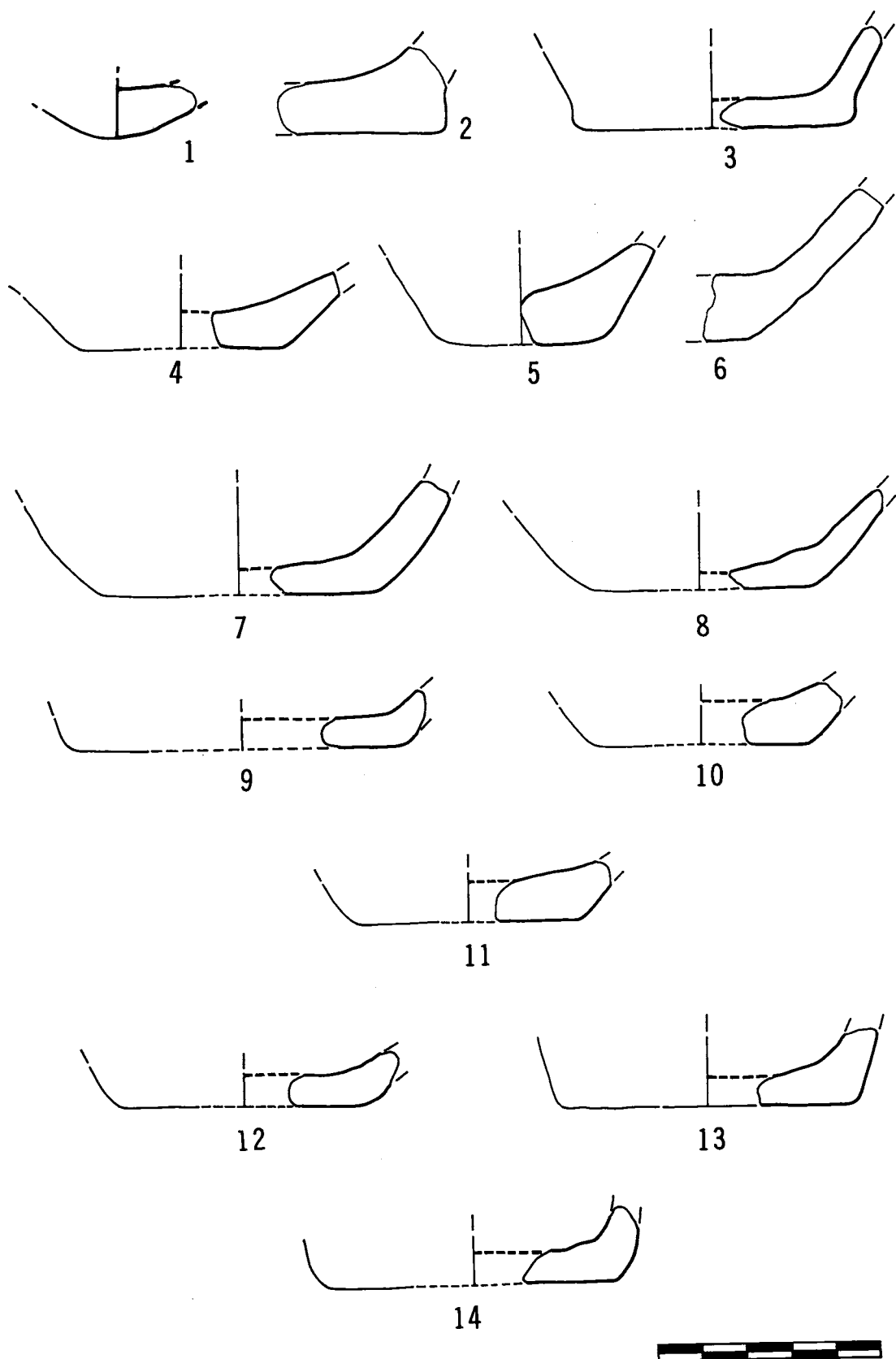
まず、大きく粘板岩碎片を混入するものとししないものに分け、粘板岩碎片を混入しないものをさらに4種に細分した。その出土状況は第6表に示す通りである。これを口縁部の胎土・混入物と比較すれば、下記のようなことが想定出来る。

- | | | |
|---------------------------------|------------|----|
| ①粘板岩碎片を含むもの | 室川期 | |
| ②石英を主体とするもの | 伊波～大山期、室川期 | |
| ③石灰質砂粒を主体とするもの | 室川期 | |
| ④胎土が非常に細かな砂質のもので混入物がほとんど見られないもの | | 不明 |
| ⑤金雲母片を混じるもの | 奄美系 | |

量的にみると、②の石英を主体とするものが最も多く全体の約64%を占め、次いで①の粘板岩碎片を混入するものが約31%とこの両方で95%を占めている。他の3種は、⑤の金雲母片を混入するものが約2%、③の石灰質砂粒を主体とするものと④の混入物がほとんど見られないものはそれぞれ約1%の出土であった。

口縁部の出土状況とほとんど一致する結果となり、これから見ても本遺跡は、室川期を主体とした遺跡であることが窺える。

底部



第32図 土器

遺構外からは総数46点の出土をみた。丸底・平底の2種が得られており、出土状況は第表に示した。II層60～70レベルまでの出土で、それ以下のレベルからは得られていない。II層0～30cmレベルで多く得られている。

丸底

第36図1に示す1点だけである。継ぎ目の部分から破損しており、輪積み手法を用いたことが伴る。石英砂粒を多量含み、暗褐色を呈す。II層40～50レベルの出土ということで、注意される資料と思われる。

平底

今回得られた資料のほとんどが本種に属するもので、立ち上がり部の形状により下記の4種に分類した。

- ①立ち上がり部がくびれ状を呈すもの
- ②立ち上がり部が内湾するもの
- ③立ち上がり部が外側へ脹らむもの
- ④立ち上がり部がほぼ直線的なもの

量的には④の直線的なものが圧倒的に多く24点の出土で、③が8点、②が6点、①が1点の出土となっている。これらのうち特徴的なものを第32図2～14に示した。

第36図2・3は立ち上がり部が、くびれ状を呈すもので、2は底面の厚さが約1.4cmと厚くなっている。3は底径が推算出来たもので約6.4cmである。2は石英・チャートの粗砂粒を、3は石英・チャートの微砂粒を多量混入し、赤褐色を呈す。この内面は黒褐色となっている。2の所属時期は不明だが、3は伊波～大山期の所産であろう。

4～6の3点は立ち上がり部が内湾するもので、4・5の2点は底径の推算出来た資料である。4は約5cm、5は約3.5cmを測る。3点とも粘板岩碎片を多量混入するもので、4・5は黄褐色、6は橙褐色を呈す。いずれも室川期の特徴を有している。

7・8の2点は立ち上がり部が脹らむもので、2点とも底径が推算出来た。7は約6.5cm、8は約5.5cmである。両者とも石英・チャート砂粒を多量混入し、7は赤褐色・8は黒褐色を呈す。両者とも伊波～大山期のものであろう。

R レ ベ ル		形 状	丸 底	平 底				不 明	計
				くびれ	立ち上がり 直 線	外 湾	内 湾		
I 層				3	1		2	6	
II 層	0～10		1	4	1	2	1	9	
	10～20			7	3		3	13	
	20～30			4	1	1		6	
	30～40			1		1		2	
	40～50	1		4	1	1		7	
	50～60			1				1	
	60～70				1	1		2	
	70～80								
	80～90								
計		1	1	24	8	6	6	46	

9～14の6点は立ち上がり部が直線的なもので、13・14の2点はより垂直に立ち上がるものである。全て底径が推算出来、9が7.5cm、10・11が5cm、12が5.5cm、13が6.5cm、14が7cmとなっている。いずれも石英・チャートの微砂粒を多量混入するもので、9・13は外面が暗褐色、内面が黒褐色を呈し、10～12の3点は暗褐色、14は赤褐色を呈す。伊波～大山期に属す資料であろう。

小 結

以上、遺構外出土の土器について略述した。今回得られた資料は奄美系土器と沖縄の土器に大別されるが、前者は僅少でほとんど後者の資料である。

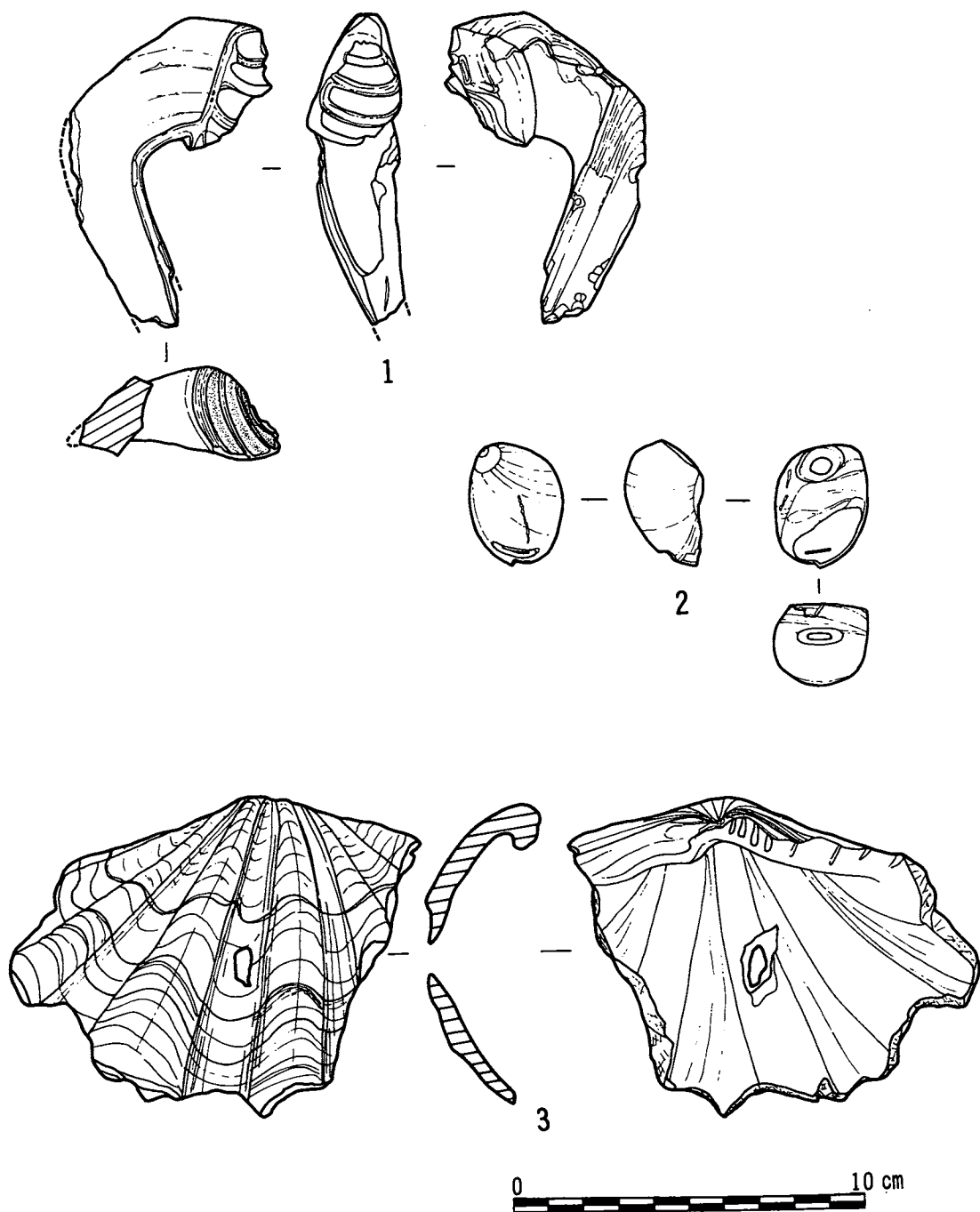
奄美系土器は、面縄前庭式、嘉徳Ⅰ式が伴別可能なものである。

沖縄の土器は、型式別にみると室川式土器が圧倒的であるが、量的には前Ⅳ期前半の伊波～大山期の資料が多く、遺構内の状況とは異っている。第28図1に示す仲泊B式土器の出土も注意される。

室川式をみると、遺構内とは異なりⅡ類が優性であった。型式設定のなされた室川貝塚とそれほどの時間差は感じられず、器色や混入物からⅠ類→室川式A、Ⅱ類→室川式Bの対比が可能かと思われる。しかし、口唇部へ施文するものが極端に少ないということは注意する必要があるだろう。

貝製品

遺構外から出土した貝製品は、わずか3点である。その種は、ゴホウラ製貝輪(1)、リスガイ有孔製品(1)、二枚貝有孔製品(1)、等があり、他に夜光貝の殻口部の加工痕を残す資料が得られている。以下順をおって説明する。



第33図 貝製品

ゴホウラ製貝輪（第33図1）

ゴホウラの外唇部側を残し他を欠落した貝輪である。器面の風化が著るしく進むでいて、器面の保持が悪い。打割のみによる整形で、研磨の痕はみられない。重量50 g、I - 15グリット、第I層

二枚貝有孔製品（第33図3）

シャユガイを素材とするもので、殻頂部の右よりに粗孔が穿たれている。穿孔方法は内側からのものである。孔径 $1.0 \times 0.5\text{cm}$ ・ 殻上面及び腹縁は水磨を受け磨耗している 殻長11.0cm、殻高 8.4cm、重量150 g、K-18グリット 第II層 0 ~ 10cm

リスガイ有孔製品（第33図2）

リスガイの体層部に孔を穿った製品である。二孔みられ、ひとつは殻口近くの外体層に、横位方向の溝状の孔と、いまひとつは殻口側の内側体層部に砥磨による孔を穿っている。前者の孔径 $0.7 \times 0.2\text{cm}$ 、後者 $0.6 \times 0.5\text{cm}$ 、殻高4.0cm、重量15.8 g 第II層

製品の残欠加工資料

夜光貝の臍孔部とら軸部のみの資料で体層部は存在しない。体層部の打割した面は、いずれも、細かい敲打がなされ粗い割面が認められない。手触りもなめらかである。本品をもって一個の完成品とはみなしがたく、体層を素材した製品のコアー的性格をもつものと考えられる。

遺構外の石器

石器は総数62点出土した。器種の判別可能なものは石斧(5)、砥石(1)、石皿(3)、磨石(6)、凹石(3)、敲打器(15)、磨石片(28)の7種、34点で、他の28点は不明である。出土状況及び石質の集計は第Ⅰ表と第Ⅱ表にあらわし、個々の記述や法量等は一覧表に示した。

第Ⅰ表 石器出土集計表

遺物 層序	石斧	カミソリ 石 状器	砥石	石皿	磨 石	凹 石	敲打器	磨石片	計
表採・Ⅰ層	4			2	2	1	6	8	23
Ⅱ 層	0-10		1				2	3	6
	10-20	1			3	1	3	7	15
	20-30	1		1		1		5	8
	30-40						1		1
	40-50							3	3
	50-60				1		2	2	5
	60-70						1		1
	70-80								
	80-90								
小 計	5	1	1	3	6	3	15	28	62

第Ⅱ表 石器の石質集計表

(遺構内出土も含む)

	石 斧	カミソリ 石 状器	砥石	石皿	磨石	凹 石	敲打器	計
輝 緑 岩	1							1
斑 レ イ 岩	4							4
チャート								0
礫 岩				1			1	2
砂 岩	3			1			2	6
アルコール砂岩			2	1	7	3	6	19
片 状 砂 岩				1				1
片 岩		2						2
輝石安山岩				1				1
小 計	8	2	2	5	7	3	9	36

石器記述一覧表

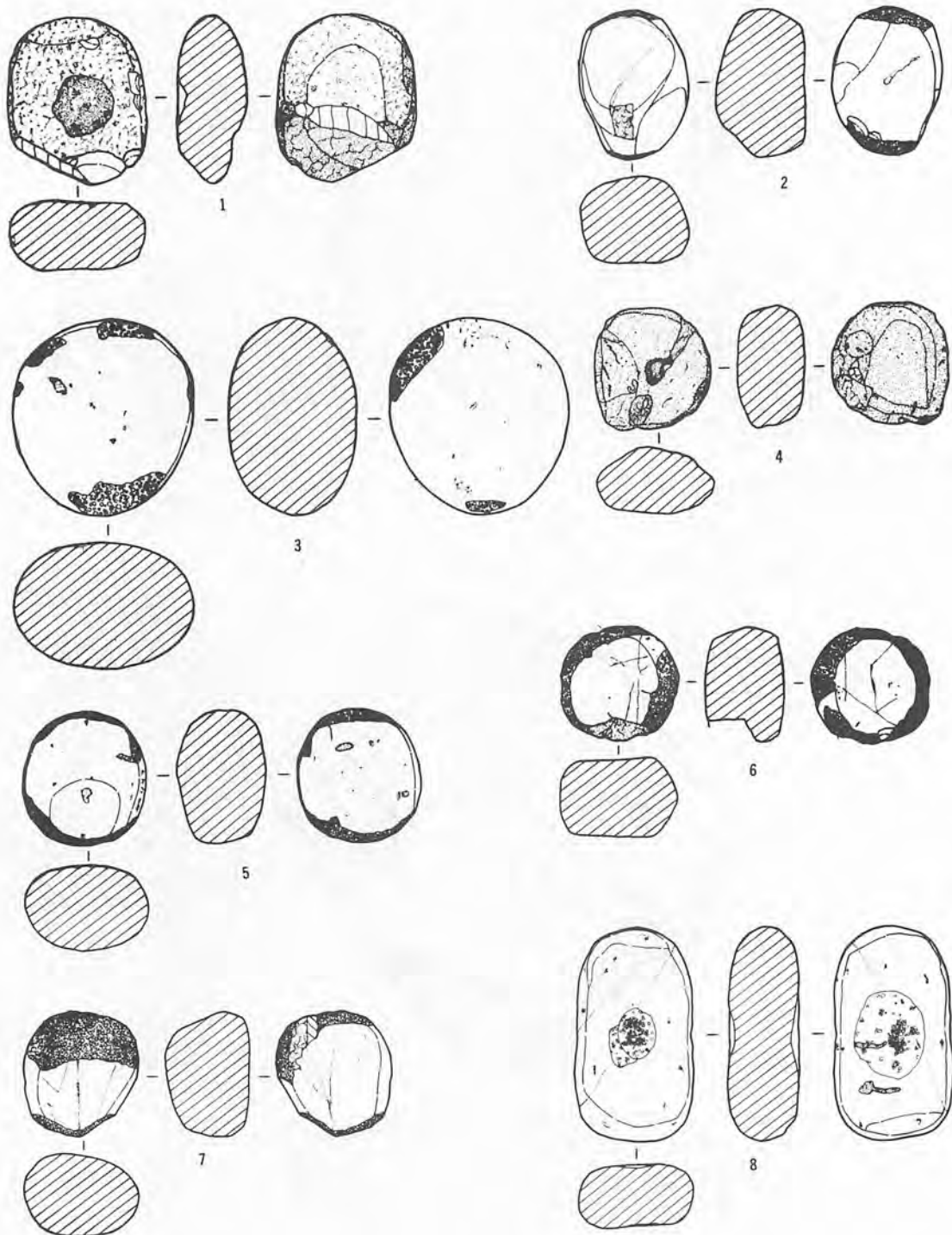
第34図 1	石 斧	A K-13 I 層	14.25 7.05 3.6	570	輝 緑 岩	完形品。全面磨製の石斧であるが、器面には当初の自然面が多く認められ、素材が礫であったことがうかがわれる。横断面は楕円形を抽く。基端部は敲打され平坦になるが、風化し磨面を呈している。刃部は両刃をつくり平面形は孤状をなす。縦断からみると一方面にやや湾曲する。刃こぼれはいずれの縁も右半部に多い。
" 2	石 斧	I 層	10.7 6.35 2.85	325	斑 レ イ 岩	完形品。側面にいずれも陵をもち、断面が平扁をなす両刃石斧。研磨は良好で、わずかに基端面に成形時の打痕が残されるのみ。なお基端部は研磨がなされ平坦になる。刃縁は平面形は孤状で、刃こぼが刃縁中央と両側にみられる。
" 3	石 斧	A K-15 II層30	10.9 4.8 3.25	280	斑 レ イ 岩	刃部を大きく欠失した石斧。研磨は光沢を有するほど入念なものであるが一方の側面は中央部を境に両側に磨面を消す細かな敲打がなされている。基端面に打裂痕が覆っているが基端部については、先述の側面同様の敲打面になっている。刃部を欠損した縁部においても、鋭度さがなく、細かい打痕がめぐっている。転用石器の状況を呈している。
" 4	石 斧	I 層	6.85 4.15 1.5	70	斑 レ イ 岩	ほぼ完形に近い小形の平面石斧である。研磨は特に刃部両面と一方の平面に丁寧になされ光沢を有している。一方の側面は器厚が薄くなり、やや挟りをなしている。刃縁中央には大きな剝離が1つ認められる。縦断面からみるとやや湾曲がみられる。
" 5	石 斧	A K-17 I 層	5.35 4.5 1.55	55	砂 岩	基部を欠損した小形平扁の石斧。器面には成形時の打痕が残り、完全に磨消していない。刃縁は平面形が孤状をなし、正面観が一方面に片よる湾曲した形状をとる。片刃。
" 6	礫 器	A L-16 II層50-60	8.8 8.75 3.2	365	砂 岩	全体観がやや平扁状のクサビ形をなすもので、縁端部は敲打による剝離がなされている。この両平面の中央は刃縁部に向い、ゆるやかな凹面をなしている。他は自然面をなしている。
" 7	砥 石	A J・K-17・18 II層0-10	14.15 9.45 4.1	655	アルコース 砂 岩	敲打痕が囲繞した平扁円礫のもので、長軸方向に、ややずれるが両平面に湾曲した溝が残されている。一方の溝幅約 5.5cm、他方のものが約5.5cmをはかる。
" 8	磨 石	A L-14、15 II層0-20	14.8 9.2 4.3	835	アルコース 砂 岩	自然の平扁円礫を素材とするもので、一平面は研磨が認められ、また中央部に軽微な打痕がみられる。一方対応する平面は自然面のままにされているが、中央部には 1.0cm台の浅い凹をなしている。

第34図 9	凹石	A 15-16 畦 10-20	13.6 8.75 4.5 4.5	850	アルコース 砂岩	平扁楕円形をなす石器。両平面は光沢を有するほどに研磨がなされ、一平面中央には径2cmの浅い凹をつくっている。両側面は敲打がなされ、一方は平面をなしている。長軸の両端とも大きく剥離面を残すが、一方のものはやや風化が進行し、打面は度減している。
" 10	磨石	A L-18 II層50-60	9.95 7.1 4.1	425	アルコース 砂岩	楕円形を呈する石器で両平面は磨面を有する。一側縁に1.0×1.0cm台の軽微な敲打痕が観察される。
" 11	磨石	A L-14 II層0-20	13.1 8.8 4.5	820	アルコース 砂岩	楕円形をした磨り石。両平面は光沢を呈するほどにあり、一平面中央に軽微な敲打痕が認められる。長軸の一端及び短軸の両端にも敲打面がみられるが、いずれも整形痕に似てきめ細かい。
" 12	敲打器	A I-11・12 表土層	9.05 6.55 3.0	280	アルコース 砂岩	平扁楕円形の自然礫を素材としたもので、長軸及び短軸のそれぞれの端部に比較的目的の細かい敲打痕が認められる。なお短軸の敲打部はやや凹がみをつくり、全体観からすると挟り状を呈する。
第35図 1	凹石	A I-16・17 II層20-30	9.55 7.9 4.0	440	アルコース 砂岩	側面を有する平扁楕円の石器。長軸両端部に大きな剥離痕を認めるが器面風化が著るしくやや磨面に近くなっている。両面に敲打痕がみられるが、一方は径3cm台の凹をなしている。深さ6mm。
" 2	敲打器	A I-14 表土層	8.55 6.05 5.5	490	アルコース 砂岩	やや楕円方形を呈する。長軸の両端及び側縁の一部に細かい打痕が覆っている。他の面は研磨なされ、光沢を有するほどにある。
" 3	磨石	A J-17 II層10-20	11.3 10.3 7.25	1245	アルコース 砂岩	球状に近い磨り石で、両平面に磨面が認められる。側面には、径3cmのものと(3)、径5cm台(楕円形)(2)の敲打痕がそれぞれ対応するように存在する。
" 4	敲打器	A K-16 II層60-70	7.2 6.6 3.8	280	礫岩	平扁の自然円礫を素材に一平面中央に径1.5cm台の浅い凹を有する。また側縁の一方所に打裂痕を残している。ただ風化のためか、打面は凹凸面が少ない。
" 5	磨石 (敲打器)	A I-14 表土層	7.7 7.0 5.1	410	アルコース 砂岩	楕円球状をおびた石器で両面の一部に研磨痕が認められる長軸の両端部はやや粗目の敲打による面をつくっている。
" 6	磨石 (敲打器)	A J・I間畦 表土層	6.7 6.5 4.65	325	アルコース 砂岩	外觀が平扁球状を呈した石器で、対応する両平面は磨面を有し、側面は細かい調整打痕が圍繞している。なお、側縁の一部は欠損し凹をつくっている。破損部の縁端は敲打がなされ、つぶされている。

” 7	磨石 (敲打器)	A J-17 II層10-20	7.25 6.5 5.1	340	アルコース 砂岩	巨視的にみて上記の資料同様の平扁球状をした石器である。図示した長軸の基端を中心に細い打痕が広がっている。両平面及び側面は磨面が残されている。
第36 図 2	石皿	A 表土	29.4 29.0 12.5	1200	砂岩	盤状の礫を素材としたもので、一方面に斜面状の砥磨面が存在する。対応する平面は自然面を有し、一応に敲打痕が認められる。この面は台石的機能をうかがわしめる。
” 1	石皿	A 表土	29.8 19.7 25.6	1200	輝石安山岩	盤状の礫を使用したものであるが、一側面の破損面が他の自然面に比し、新鮮であることから半欠品の資料とみられるものである。残された両面は大きな凹をつくっているが、砥磨面にはいたらず、部分的に深い敲打痕がみられる。
第37 図	石皿	A J-16 II層20-30	52 27.5 15.5	2800	礫岩	大形の盤状礫をもちいたもので、一平面は、クラ状の湾曲した砥磨面を有し、一方対応する面は大きな打割面が占めているが一部に砥磨による凹面が存在する。また側縁の一部にも砥磨の認められる凹面がみられる。この様に当石器の作様面は三面に存在する。
第35 図 8	凹石	A 第1テストPit	12.3 6.7 4.2	620	アルコース 砂岩	長楕体を呈する。両側面に風化の認められる折りがある。表裏面中央に凹が存在する。

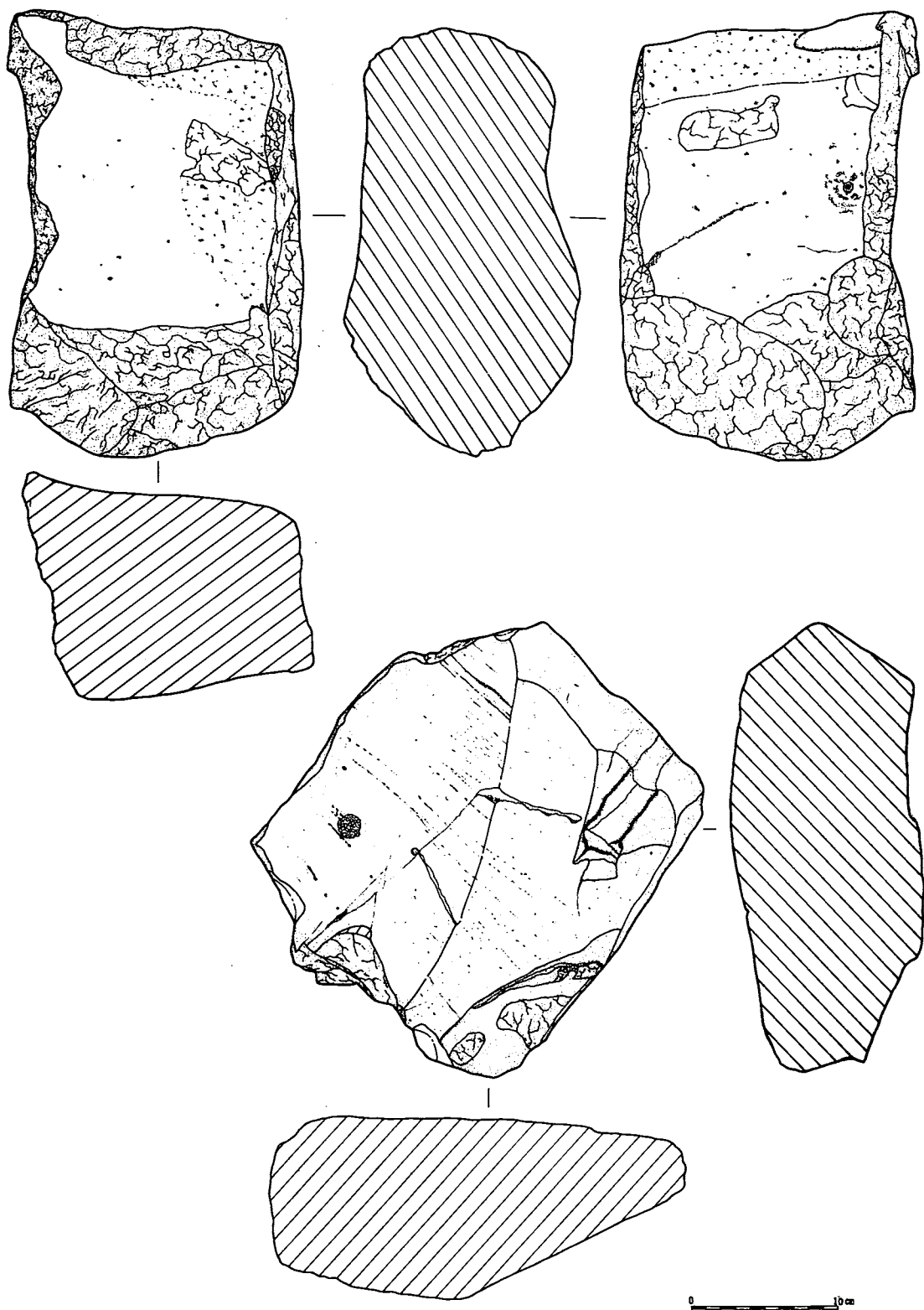


第34图 石器

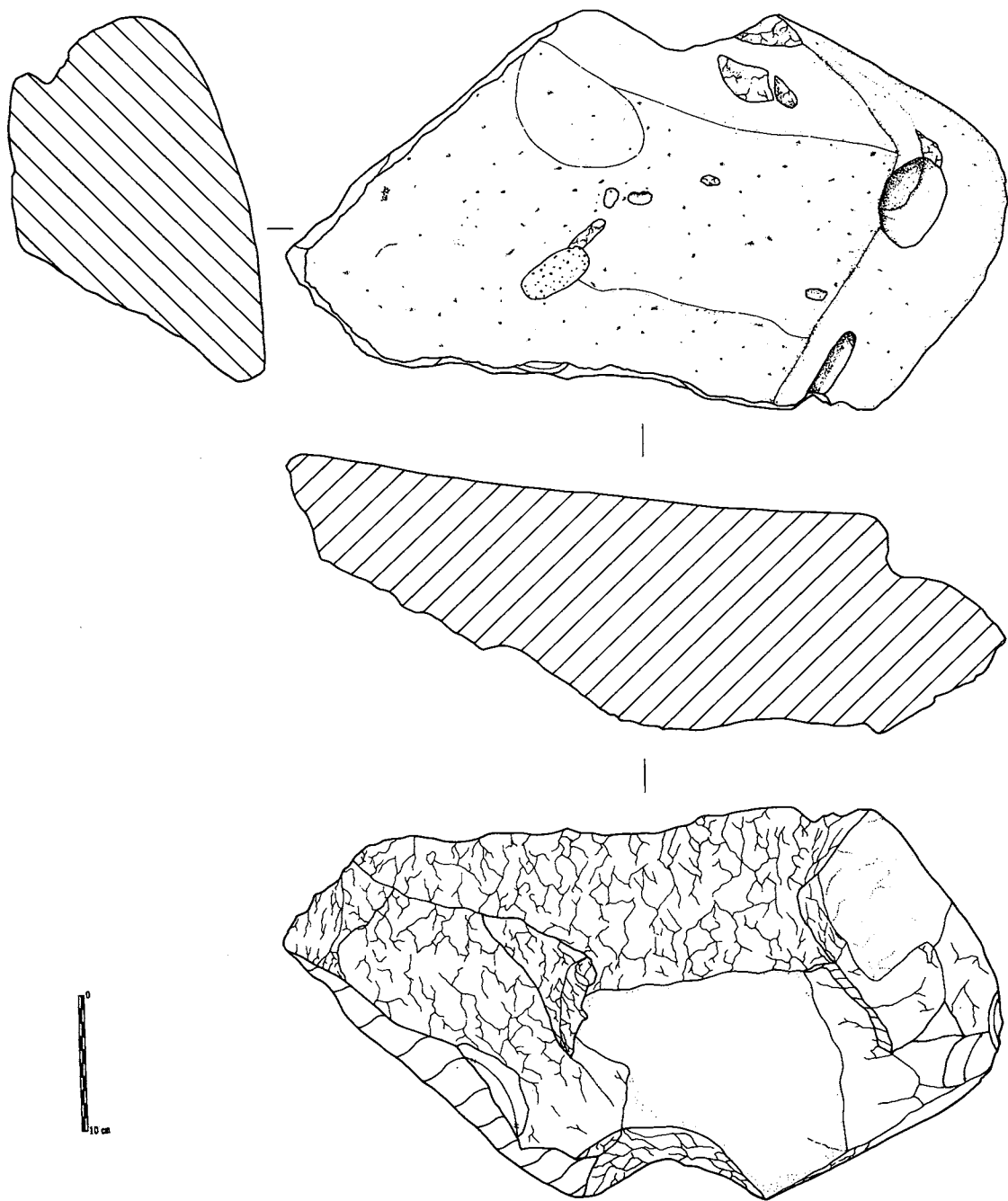


0 10 cm

第35図 石器



第36図 石器



第37図 石器

ま と め

古宇利原遺跡群は、はじめでも記すとおり遺跡の範囲確認調査の目的で実施したわけであるが三遺跡に分布するほど広範囲にあるため、当面開発度が高く、調整の必要がせまっている地域のA遺跡を主として実施した。よってここでは当該遺跡について概要をまとめてみたい。

本遺跡地は古宇利集落の長年の居住の攪乱や近年の農道整備及び港湾工事等により大方が破壊を受け、確認された二枚の層の内、下層のわずかの部分にオリジナルな包含層が残る状況にあった。上層部分からは現代遺物に混りながら近世期の資料が主として得られた。その種類は陶器・磁器等の日常生活雑器類と装飾品（ジィファー）、貨銭、漁労具（タカラガイ製錘）、鉄釘等があり、遺構では基盤に築造した溜井戸、柱穴が検出され、水源の乏しい岩盤地域の生活形態の一端を知る手がかりが得られた。これらは文献の「琉球国由来記」や「検地帳」に記されている集落と無関係のものではなかろう。

先史文化層は薄く、岩盤の凹部分に堆積した状態にあり、出土遺物の状況からみても本来の包含層は現在以上にあったもので、諸工事等の削平の結果として今日の状態にあるものと考えられる。

出土遺物中、自然遺物では貝殻、獣骨、魚骨が検出されている。貝は陸産7種、淡水産9種、海水産194種の計210種からなる。陸産種ではオキナワヤマタニシが多く、とくに環状集石遺構内から検出されている。一方各層からくまなく海産種のマガキイ・チョウセンサザエ・ソメワケブリ・リュウキュウマスオ・アッシラオカ等が多く出土していて現在の古宇利島海の環境に住むものと変りがない。獣骨ではイノシシが主体を占め、その他にジュゴン、グジラ等があるが、注目すべきは現在同島にはイノシシはみられず、後述の石材同様に交渉等の問題点を含み、魚骨では遺構内についてみるならば半数以上がベラ科、ブダイ科が占め貝類同様に遺跡の眼前に広がる礁内に生息するものが選択されている。

人工遺物では骨製品、貝製品、石器、土器等があり、特に前者の三種は、室川式土器を主体とする環状集石遺構内から検出され今後ひとつのメルクマールになるものである。

骨製品の内訳は骨錐、骨針、骨製棒状製品（骨剣？）管状製品、イノシシの有孔牙製品の五種、貝製品は、貝輪、符状貝製品、二枚貝有孔製品、小形巻貝有孔製品、ヤコウガイ製貝匙、ホラガイ製容器等の六種がある。石器は豊福で石斧、カミソリ状石器、砥石、石皿、磨石、凹石、敲打器の七種でこれら内石器の石材が同島には産しないものがあり明らかに持ち込みのものでその入手方法、経済等、今後つめていかなければならない課題がある。

土器は、沖縄諸島の五型式（伊波式、荻堂式、大山式、室川式、仲泊式）と奄美諸島の4型式（嘉徳Ⅰ式、面縄前庭式、喜念Ⅰ式、宇宿上層式）が確認されているが、岩盤基底部に構築された環状遺構内のものは土器が限定され、伊波～大山式及び宇宿上層式土器が合わせて20%で他80%が室川式土器が占めている。このことより先史文化層は沖縄先史の前期と中期の二期のものがあり、それがオーバーラップしたかたちであるが、遺物の出土状況及び土器そのものから該遺構は後者の時期に前者の文化層を破壊し構築したものと、考

察される。ところで遺構主体の室川式土器は混入物に石灰岩、石英、粘板岩破片があるので、室川貝塚を標識とする石灰岩混入物入の土器以外にバリエーションがあることが確認された。

環状集石遺構の性格については、一定の面積を有し、炉は遺構内に認められないが遺構外に焼土面及大形石皿が検出されており、二回の立替築になる竪穴状石組住居址遺構の可能性が高いものであるが、小範囲の調査であった点等からその決定は今後の類例資料の追加をまっておこないたい。

参考文献

- 註1 河口貞徳 「奄美における土器編集について」 鹿児島考古第9号
〃 2 河口貞徳他 「嘉徳遺跡」 鹿児島考古第10号
〃 3 鹿児島県笠利町教育委員会「宇宿貝塚」 昭和54年3月
〃 4 伊平屋村教育委員会「久里原貝塚」 1981年3月
〃 5 伊是名村教育委員会「伊是名貝塚」 1979年3月
〃 6 5と同じ
〃 7 高宮廣衛 沖縄諸島における新石器時代の編年試案 沖縄考古学会 1988. 12
〃 8 4と同じ
〃 9 沖縄県教育委員会 「古座間味貝塚」 1982年3月
〃 10 高宮廣衛他、「沖縄大考古 第3号」 沖縄国際大学文学部考古学研究室 1979
〃 11 沖縄県教育委員会「知花遺跡群」 1978年3月
〃 12 4と同じ
〃 13 沖縄県教育委員会「大原」 1980年3月
〃 14 11に同じ
〃 15 2に同じ
〃 16 3に同じ

遺構外

- 註17 2と同じ
〃 18 当真嗣一・上原静「伊武部貝塚発掘調査について」『南島考古だより』第25号
沖縄考古学会 1982年
〃 19 4と同じ
〃 20 伊是名村教育委員会「具志川島遺跡群」4次
〃 21 高宮廣衛他 「沖縄大考古」2号 沖縄国際大学考古学研究室 年
〃 22 21と同じ
〃 23 新田重清・嵩元正秀「嘉手納貝塚発掘報告書」沖縄文化財調査報告書 1960年
〃 24 沖縄市教育委員会「室川貝塚」 1979年3月
〃 25 24に同じ

＃ 26 21と同じ

＃ 27 5と同じ

＃ 28 賀川光夫・多和田真淳 「大山貝塚発掘調査概報」

＃ 29 高宮廣衛他「沖国大考古」3号

－付記－

本稿脱稿後、金子浩昌氏（早稲田大学考古学研究室）に、不明骨の同定をしていただく機会を得た。同定結果は次のとおりである。図版7－1、カラス大髓骨、右、遠位端 2、同右、近位端、3、同尺骨 左、遠位端 4、ミズナギドリ（ハイイロ？）類上腕骨、骨幹 5、不明尺骨 左、遠位端 その他3個、胫骨など 以上。付記ながら同氏にたいし記して深謝いたします。



図版 1 . 上：古宇利島 下：遺跡近景（古宇利栈橋）



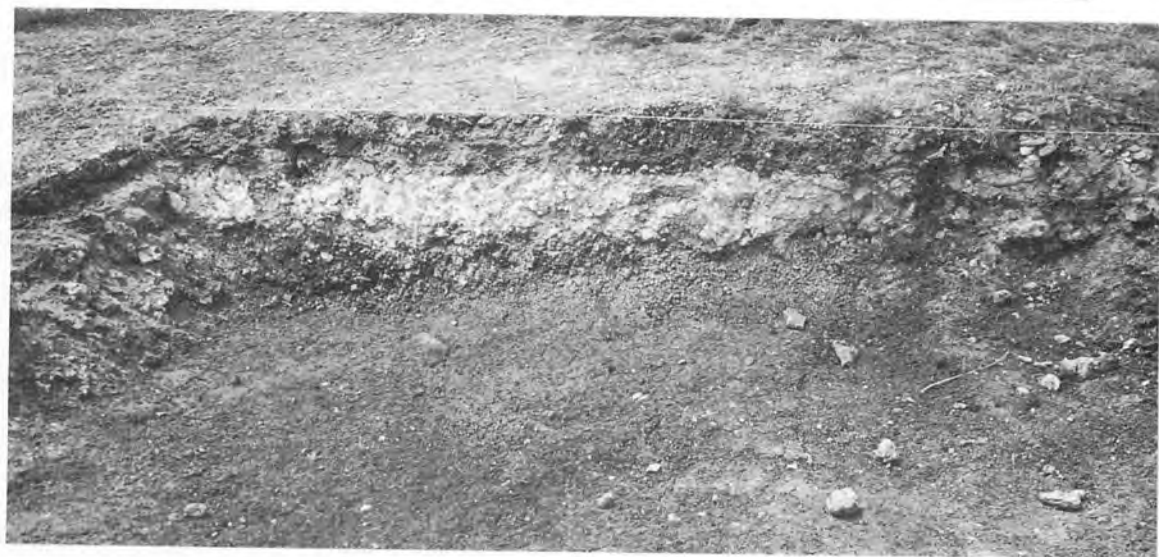
図版 2 . 上 : 古宇利原 A 遺跡 (旧公民館跡地) 下 : 古宇利原 A 遺跡



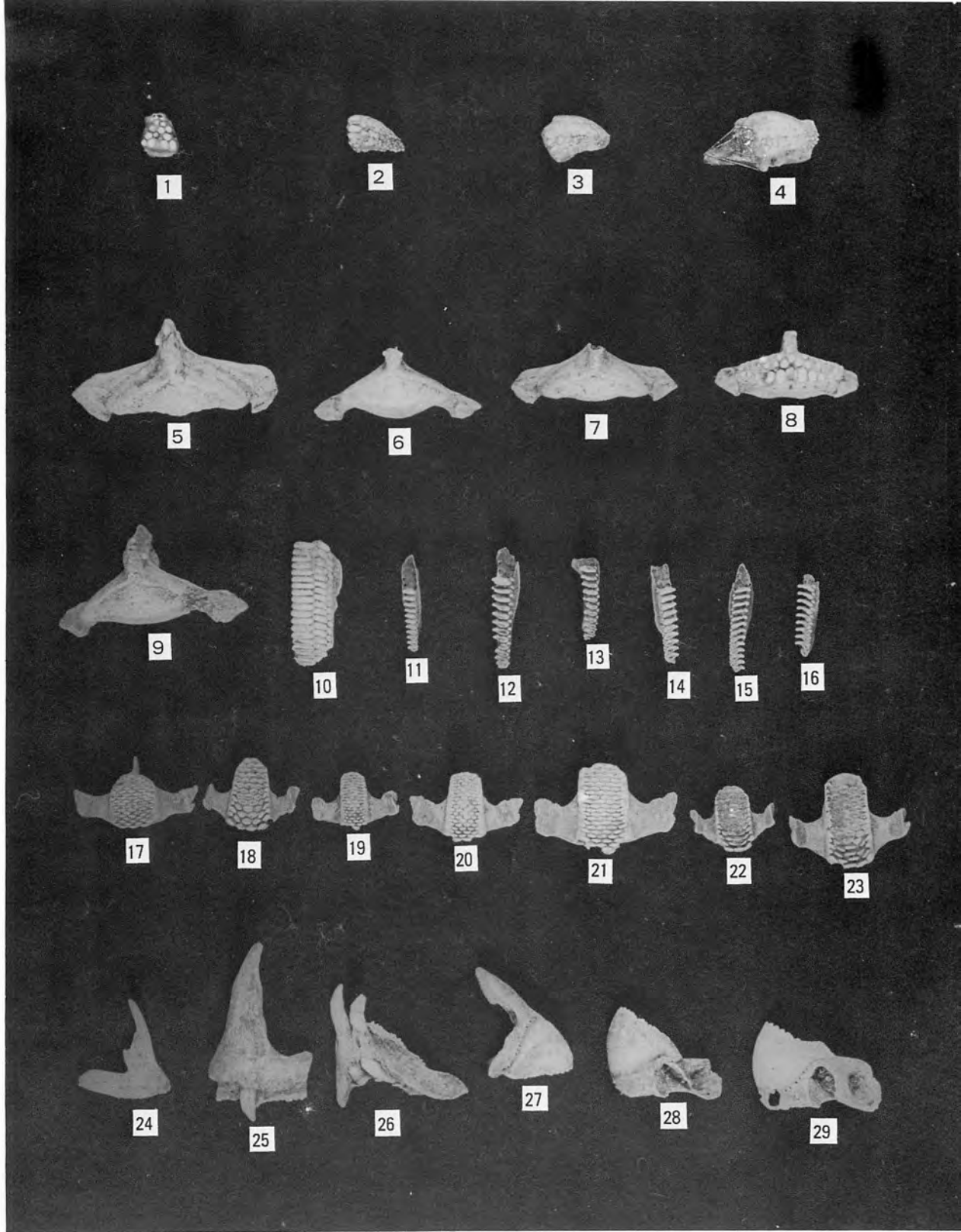
図版 3 . 上：環状集石遺構内部 下：留井戸



圖版 4 . 上：環狀集石遺構上面部 下：環狀集石遺構下面部

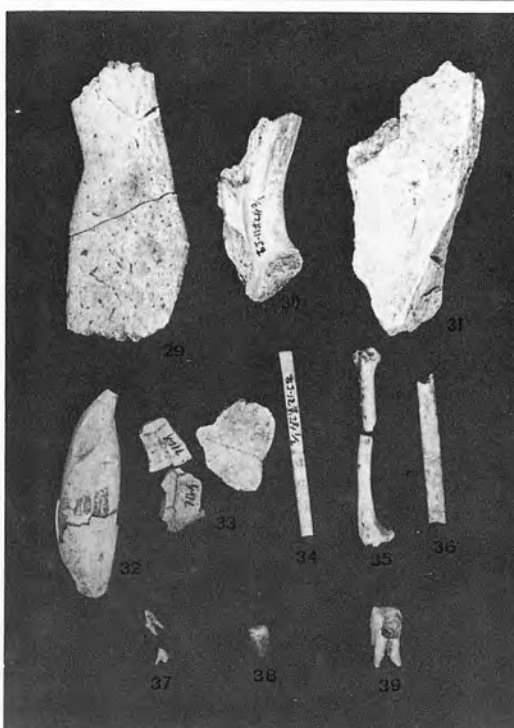
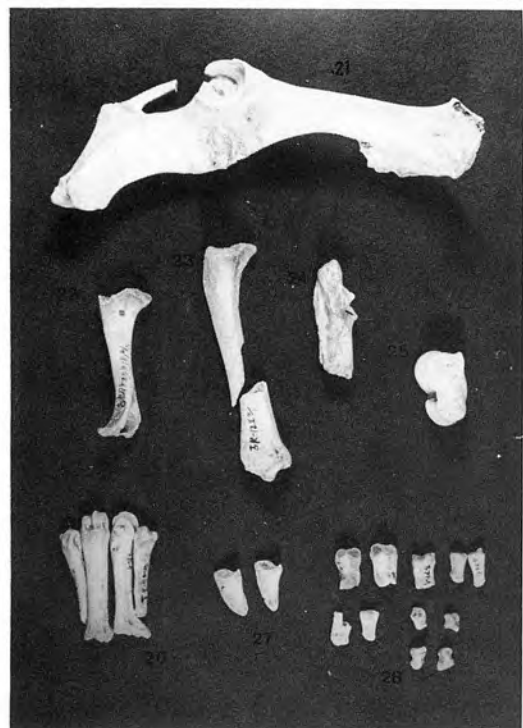
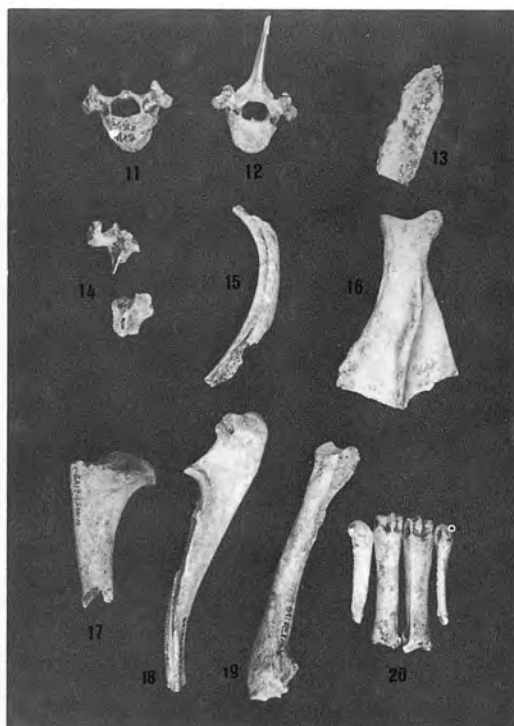
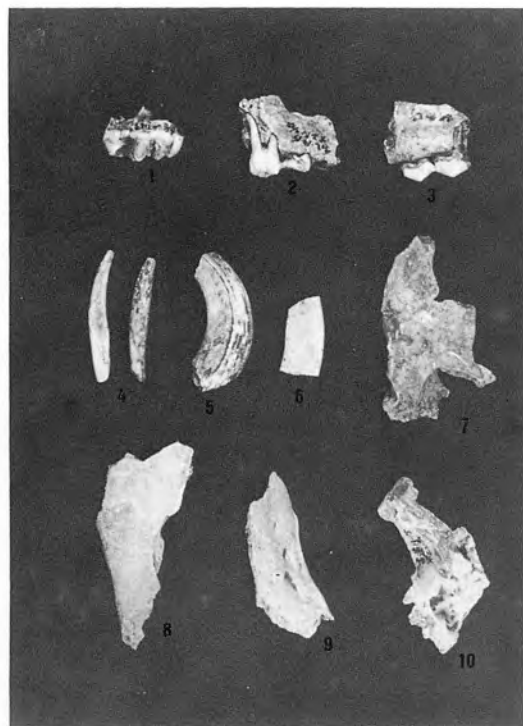


図版 5 . 上：環状集石遺構南側から 中：環状集石遺構内部西側面 下：発掘トレンチ壁面

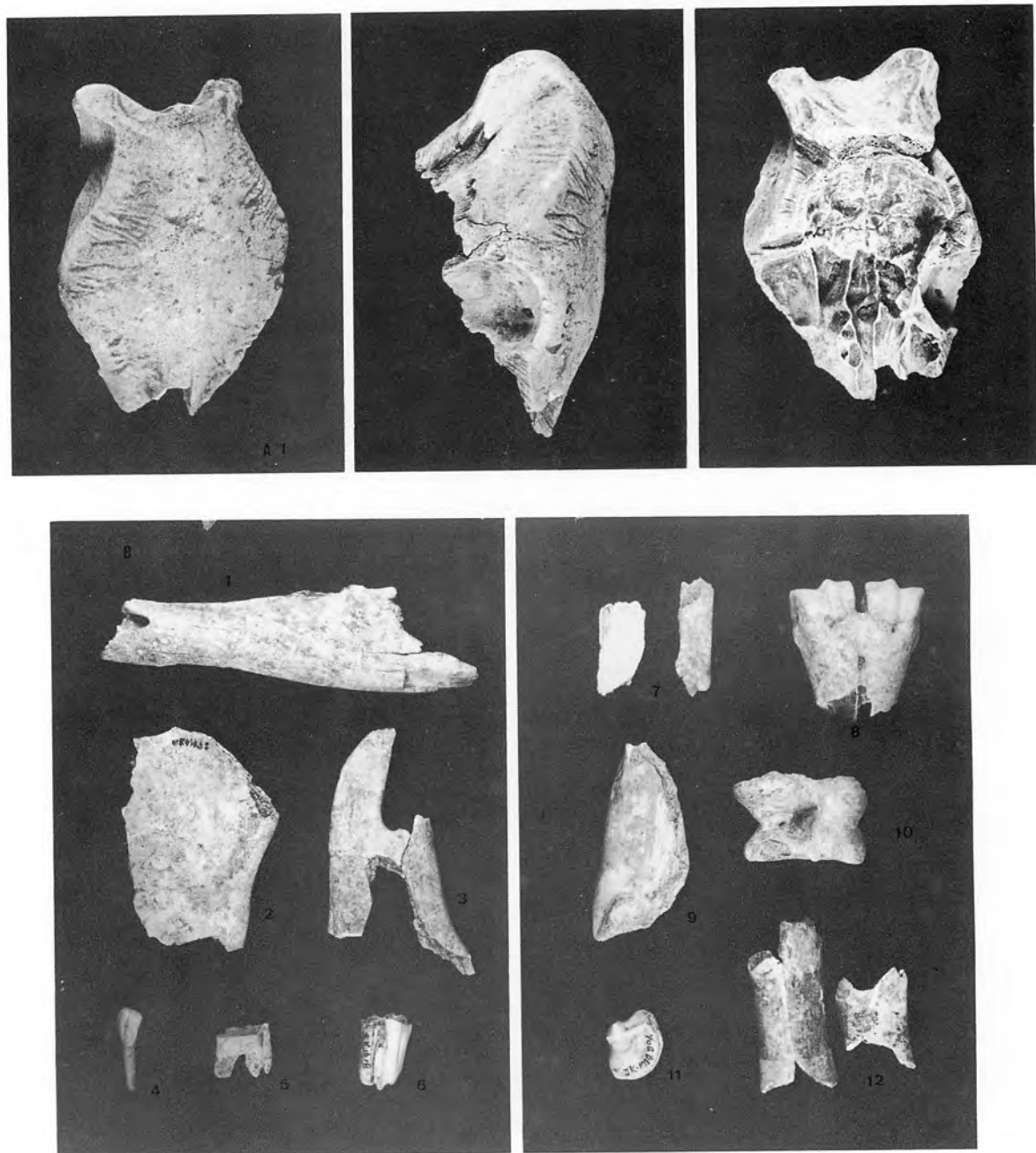


図版 6 . 魚骨

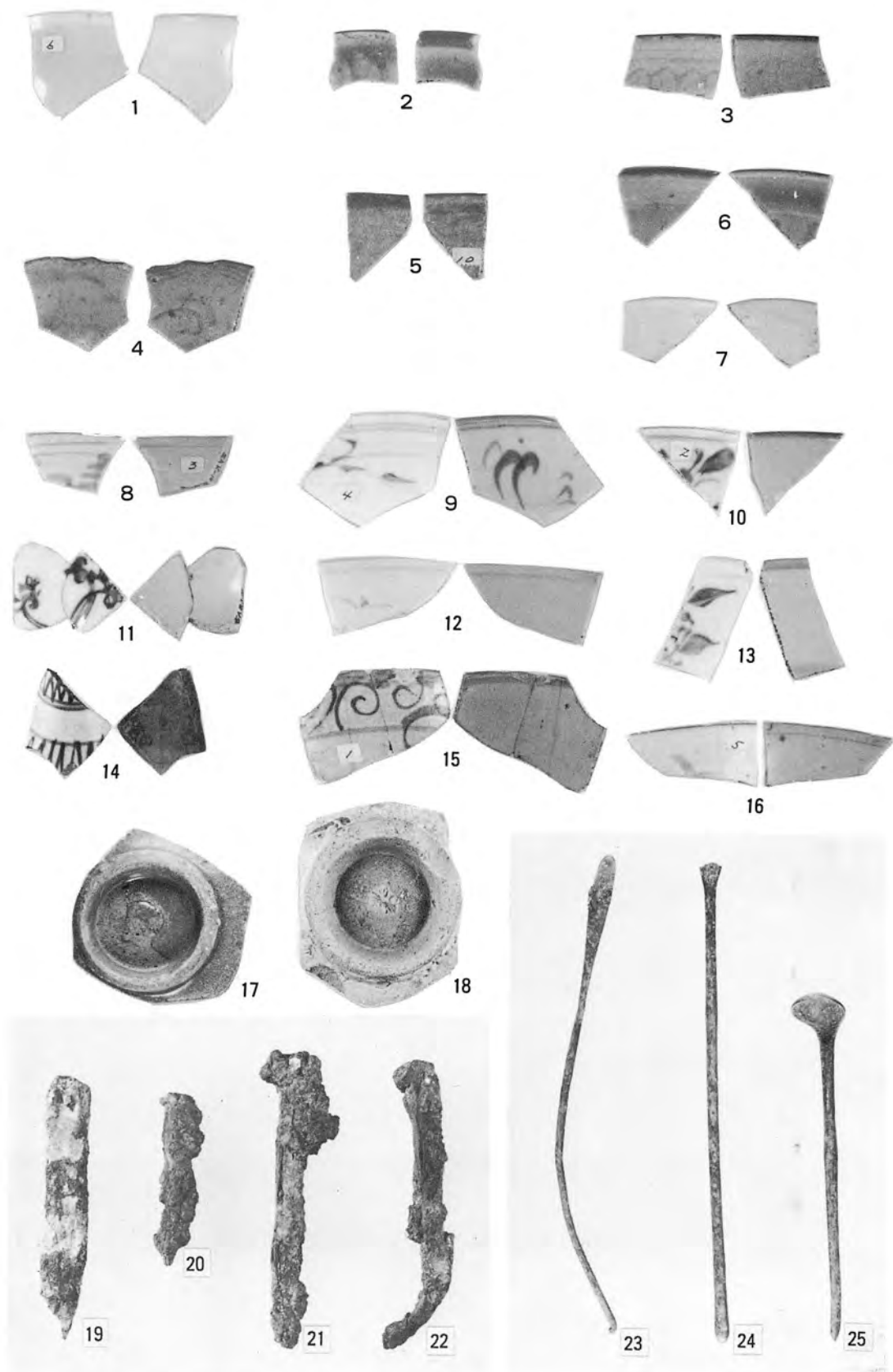
- 1 ~ 4 . ペラ科上咽頭骨 5 ~ 9 . ペラ科下咽頭骨 10. *Bolbometopon bicolor* (イロブダイ) 左上咽頭骨
 11. *Scarus Lunula* (ツキノワブダイ) 左上咽頭骨 12. *Scarus ghobban* (ヒブダイ) 左上咽頭骨
 13. *Scarus sordidus* (ハゲブダイ) 左上咽頭骨 14. *Scarus gibbus* (ナンヨウブダイ) 右上咽頭骨
 15. *Scarus dinidiatus* (タスキブダイ) 右上咽頭骨 17. *Bolbometopon bicolor* (イロブダイ) 下咽頭骨
 18. *Scarus ghobban* (ヒロダイ) 下咽頭骨 19. *Scarus sordidus* (ハゲブダイ) 下咽頭骨
 20. *Searus borrsersi* (オオモンハゲブダイ) 下咽頭骨 21. *Scarus gibbus* (ナンヨウブダイ) 下咽頭骨
 22. *Scaris taeniurus* (カザリブダイ) 下咽頭骨 23. *Scarus aeruginosus* (オジロブダイ) 下咽頭骨 24. フェフキダイ科
 24. フェフキダイ科前上顎骨 25. ペラ科前上顎骨 26. ペラ下歯骨 27. ブダイ科前上顎骨 28. 29. ブダイ科歯骨



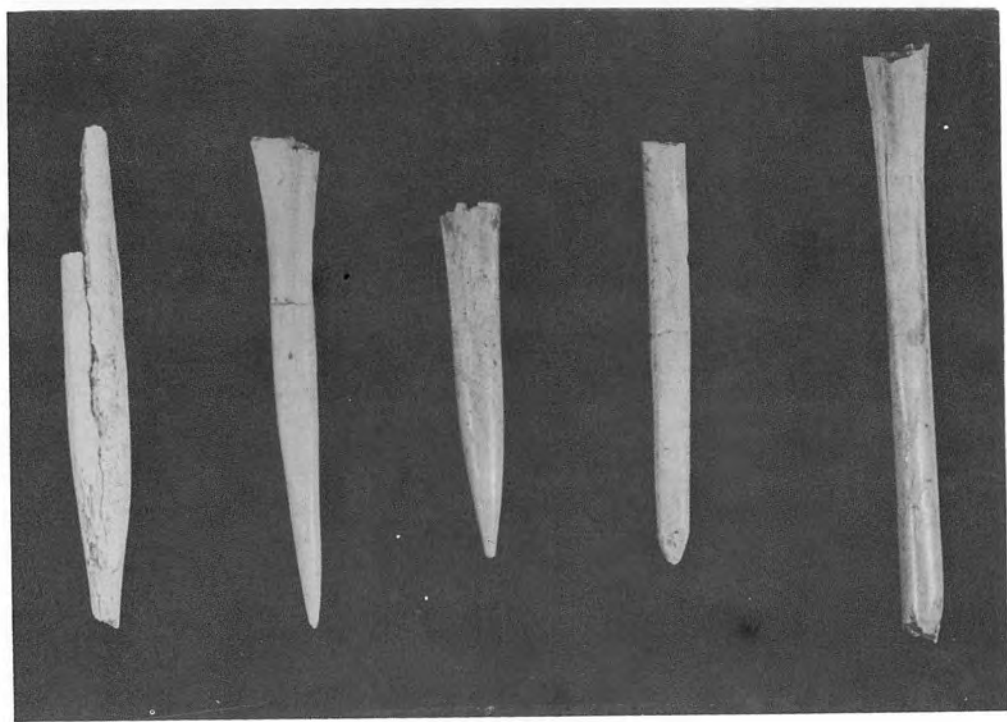
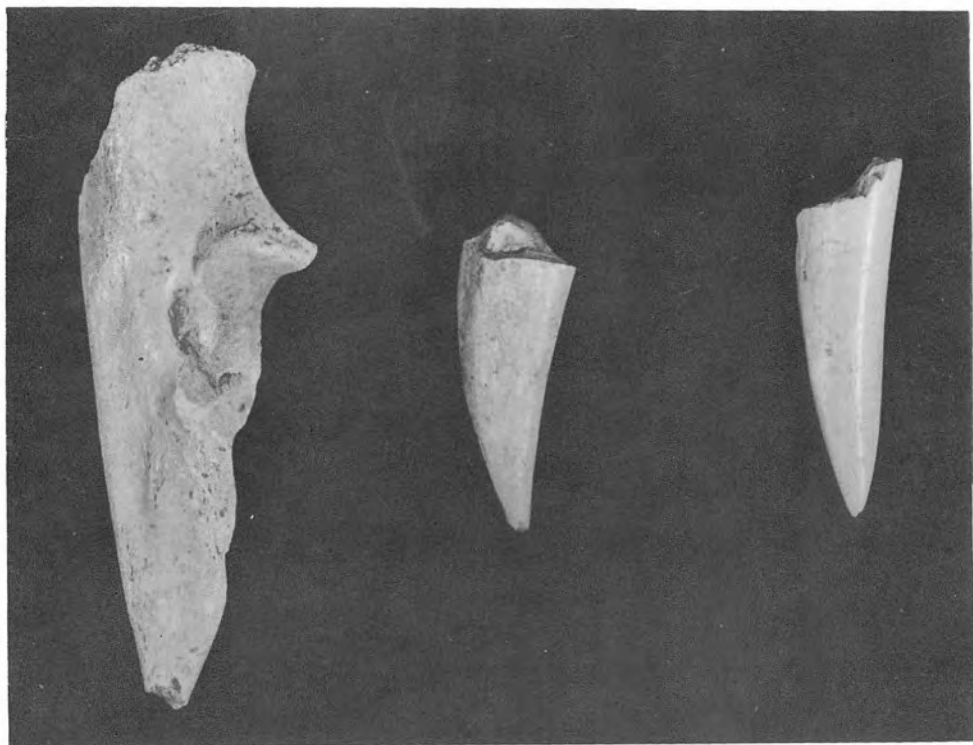
図版 7. 左上：イノシシ頭骨 右上：イノシシ肋骨、上肢骨 左下：イノシシ下肢骨
右下：海獣、鳥骨、人歯？類



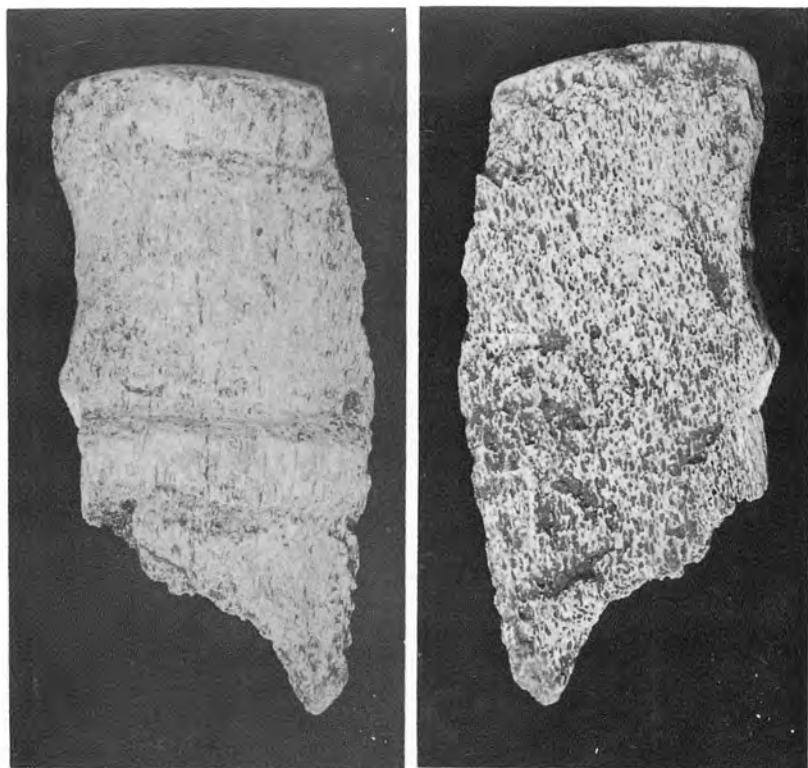
図版 8 . 上 : イノシシ頭骨 下 : 牛、馬骨



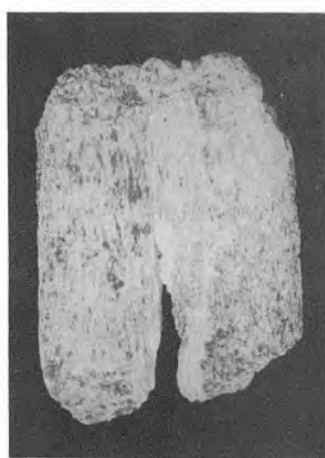
図版 9 . 磁器、鉄、銅製品



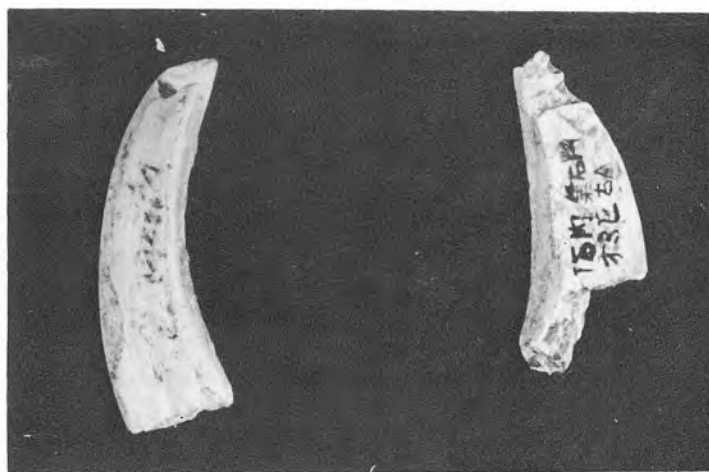
図版10. 上：骨錐 下：骨針



1



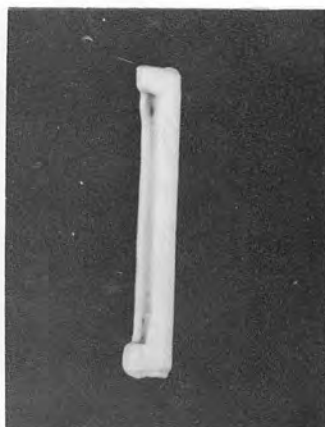
2



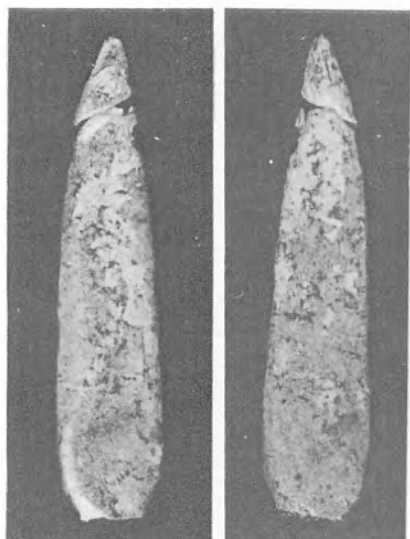
3



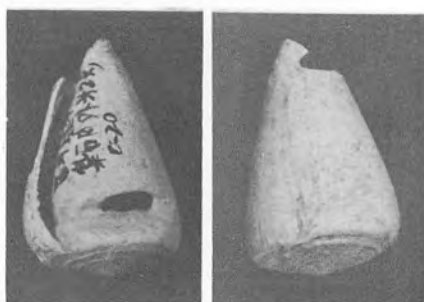
1



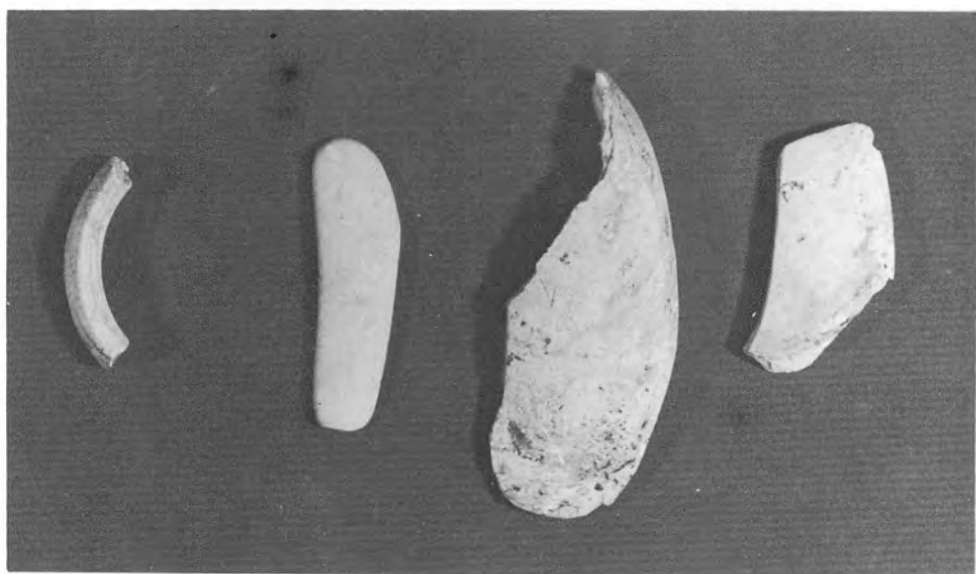
2



3

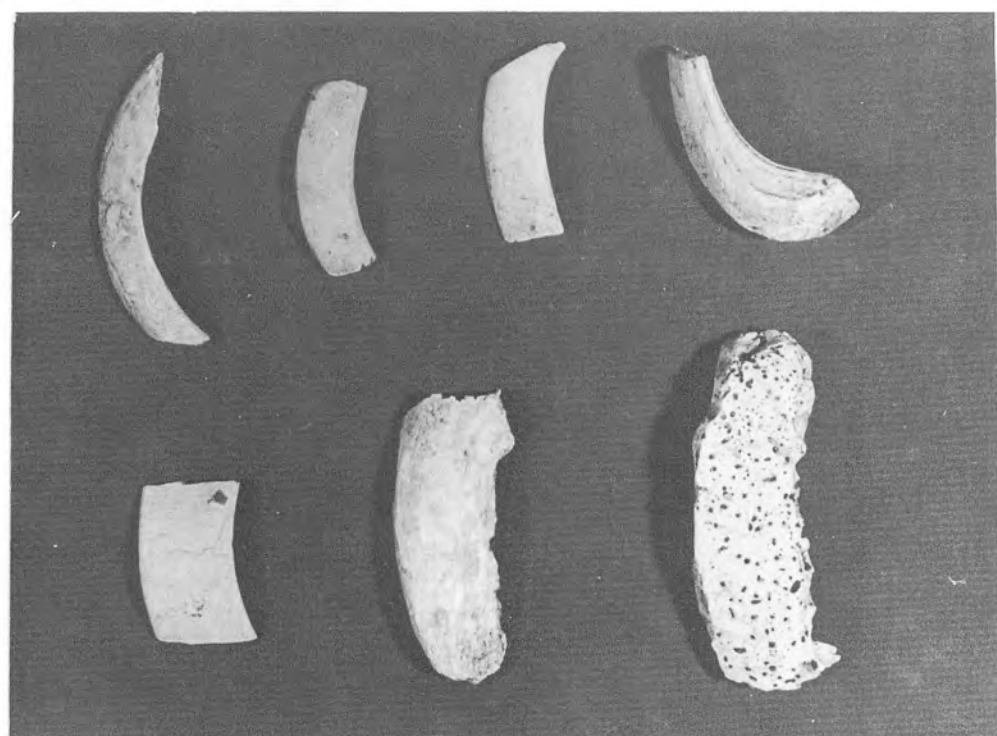
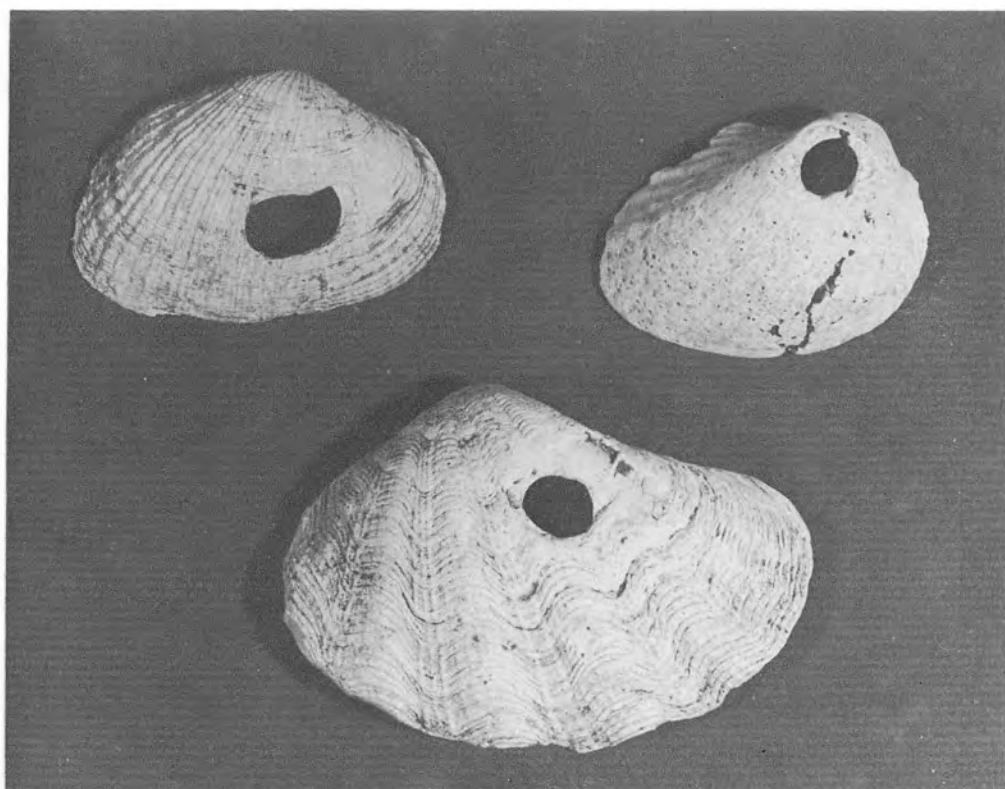


4

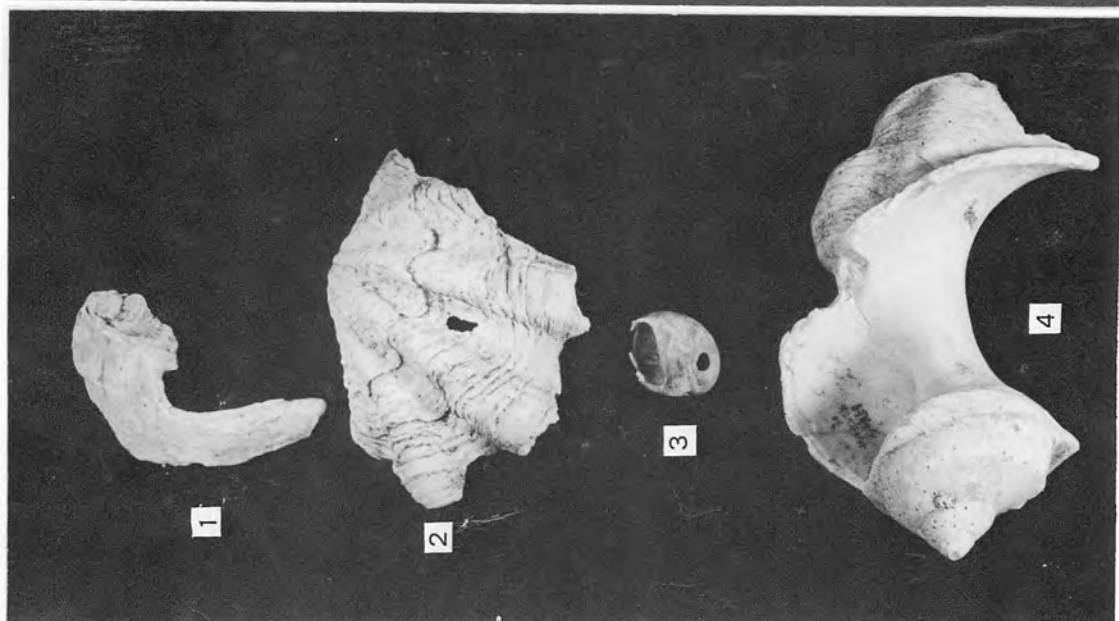
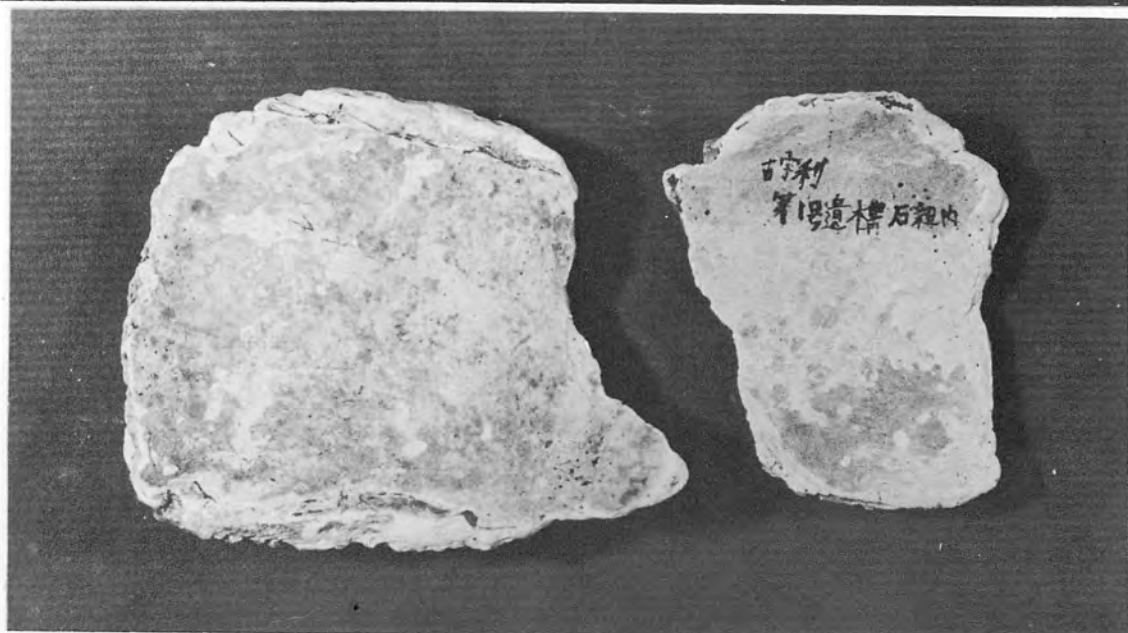
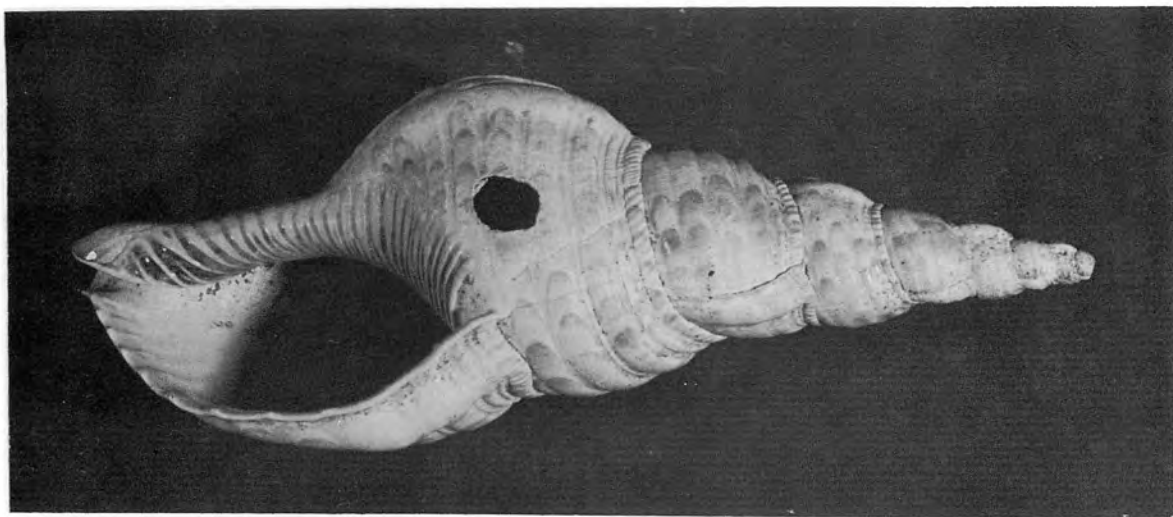


5

図版12. 1. 2. 骨製品 3～5. 貝製品



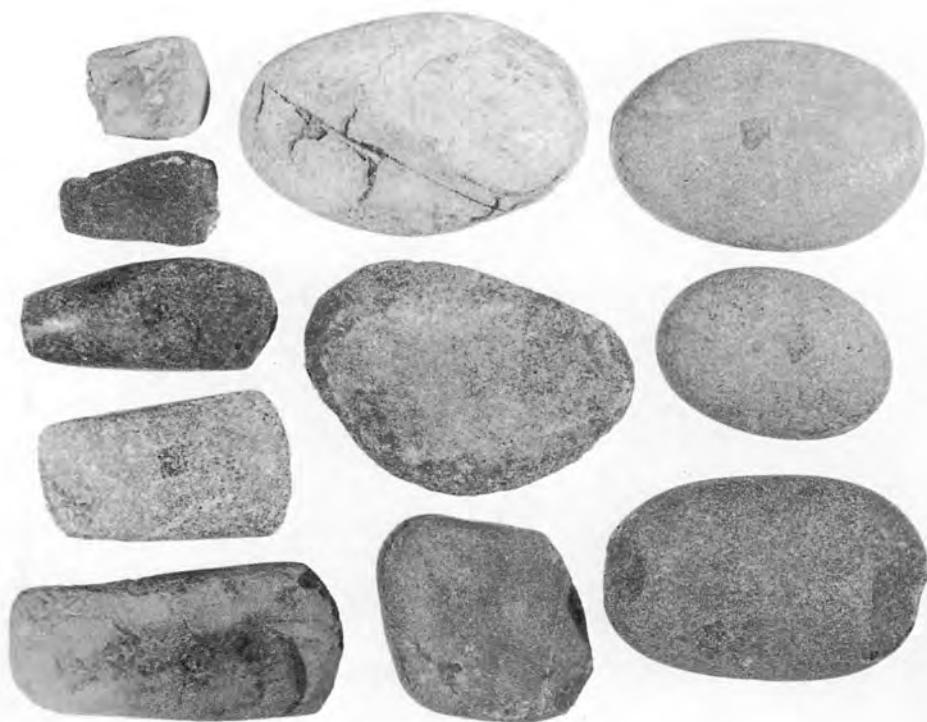
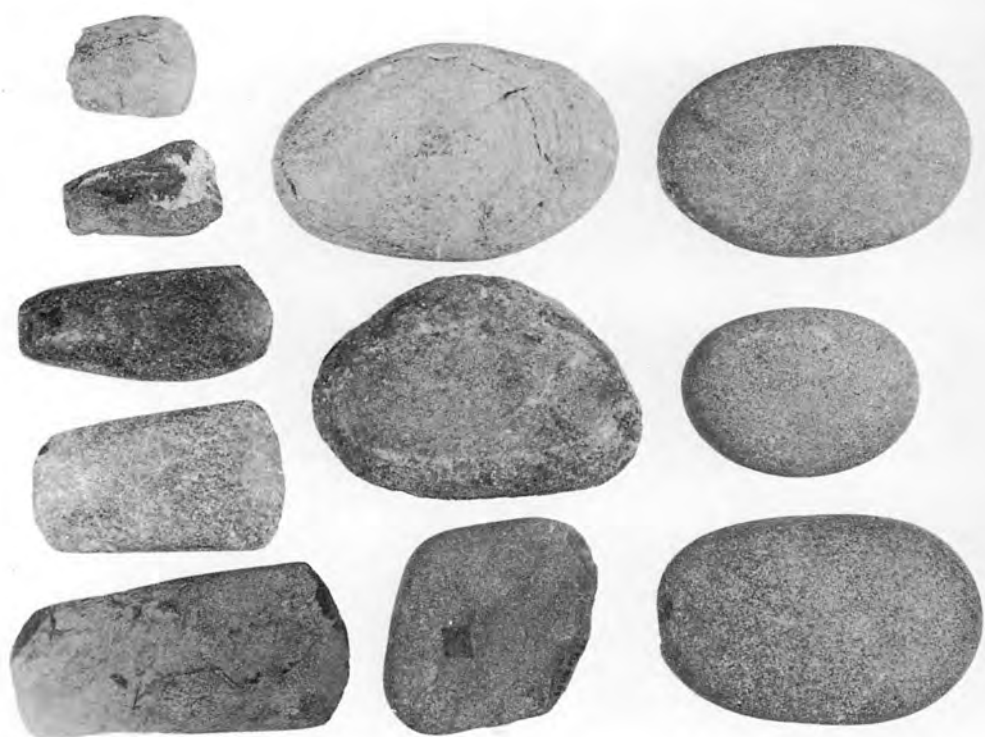
図版13. 上：貝錐 下：貝輪



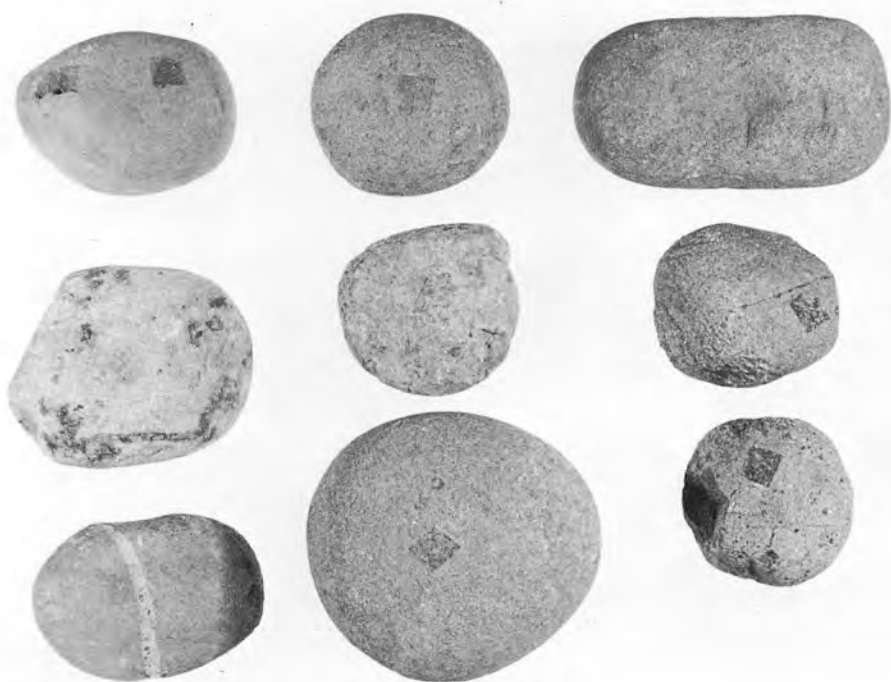
図版14. 上：ホラガイ製有孔品 中：貝匙 下：貝製品



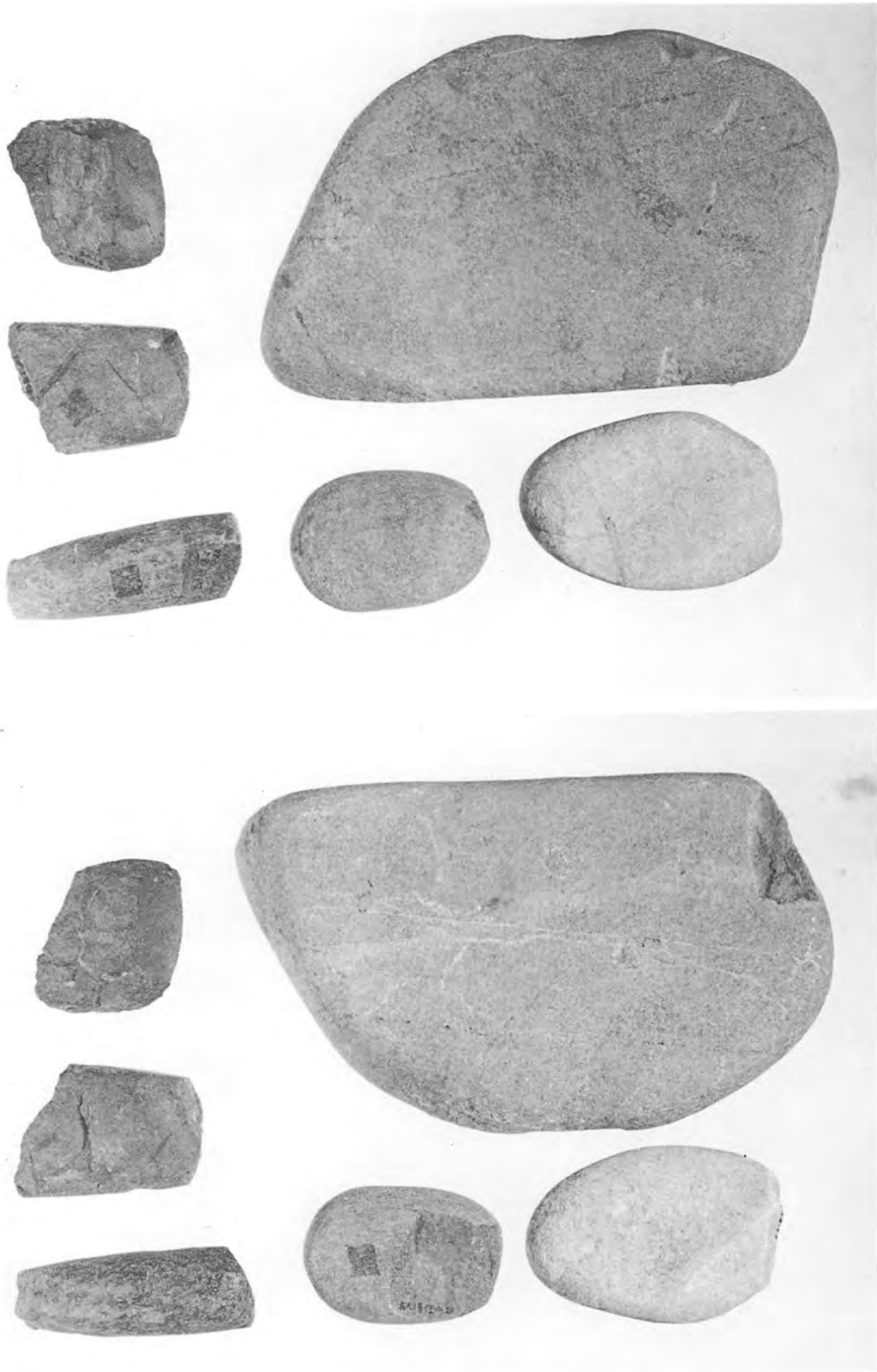
图版15. 石器（上：中） 石材（下）



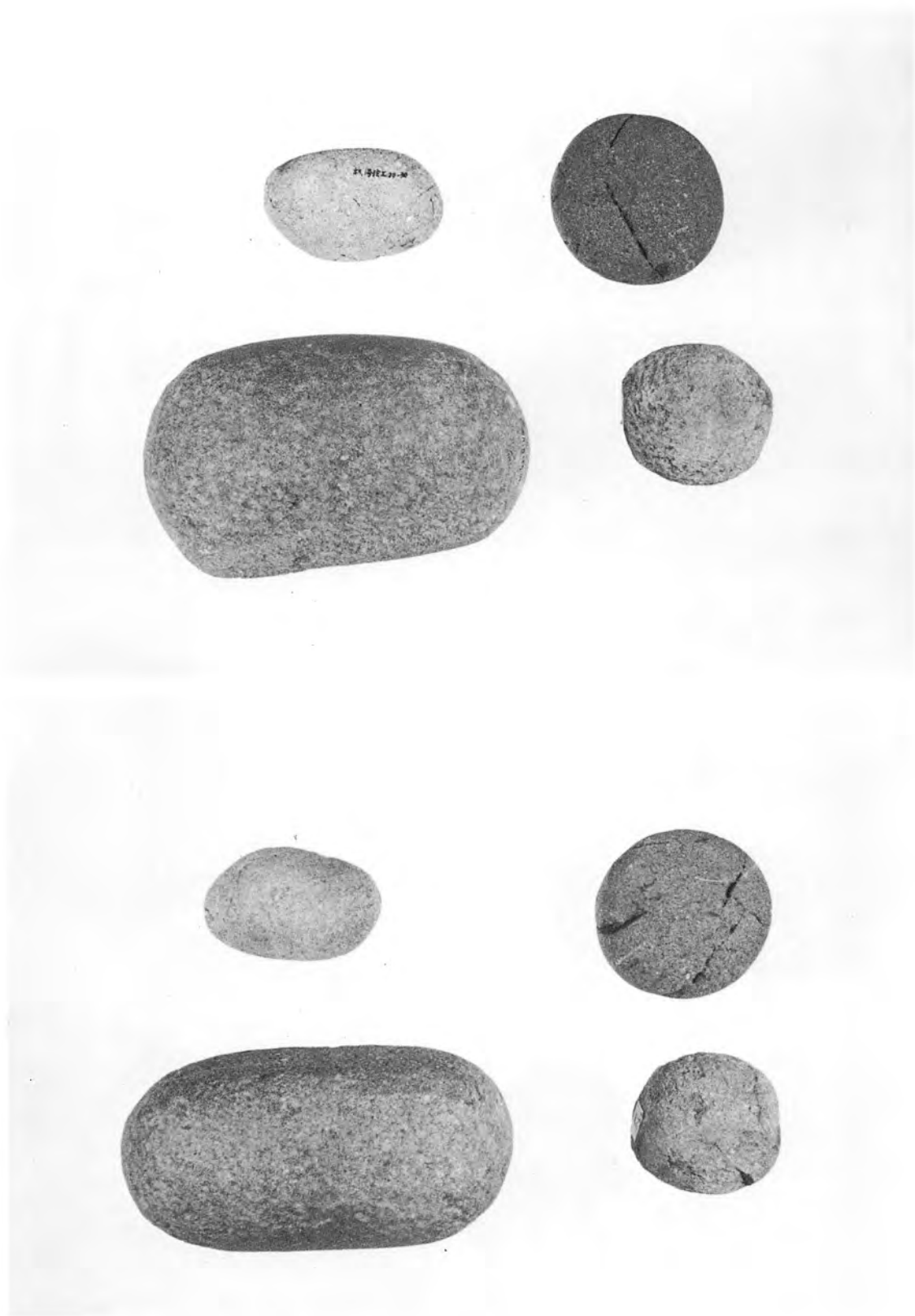
图版16. 石器、左：(上面) 右：(下面)



図版17. 石器 左：(上面) 右：(下面)



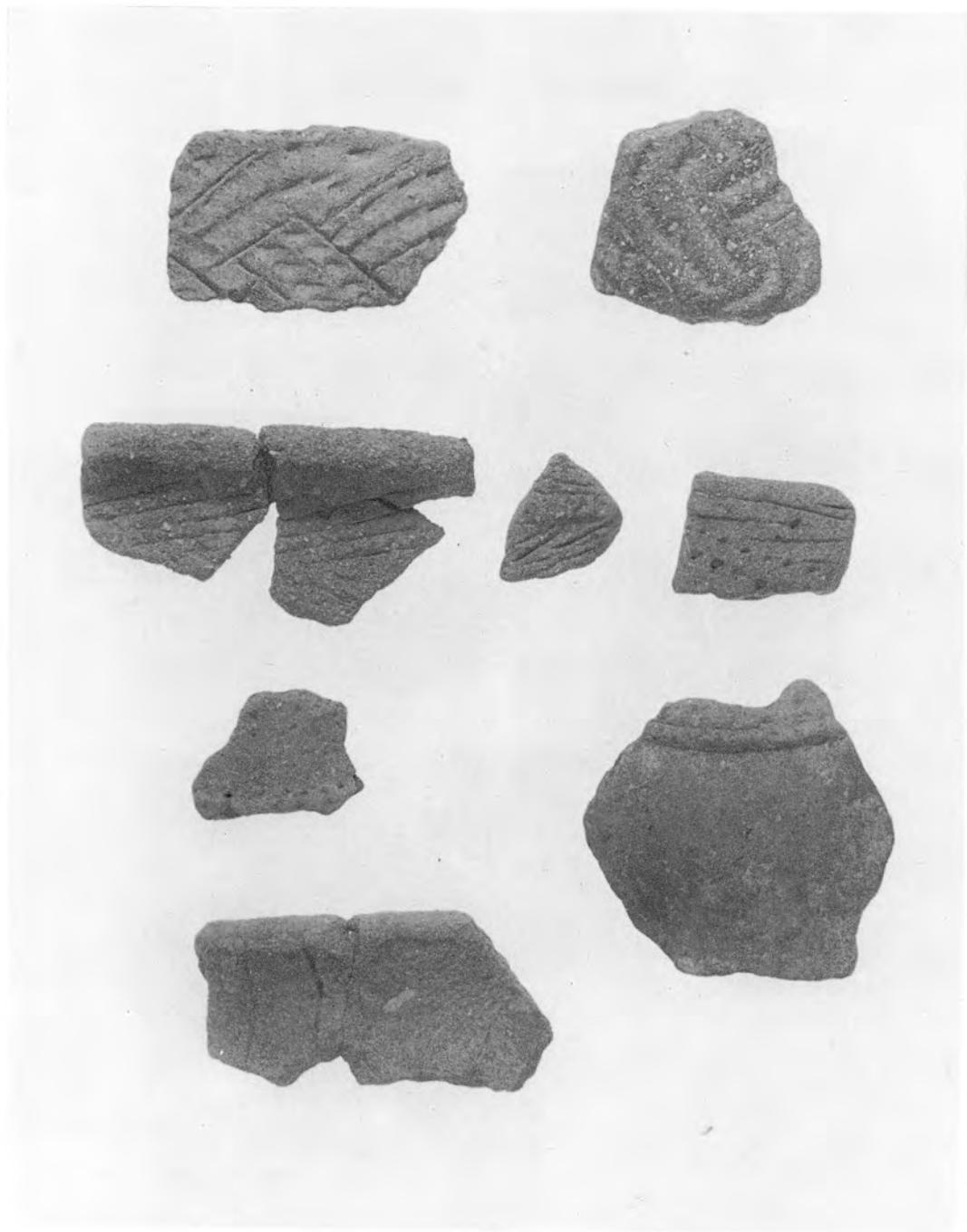
图版18. 石器、左：(上面) 右：(下面)



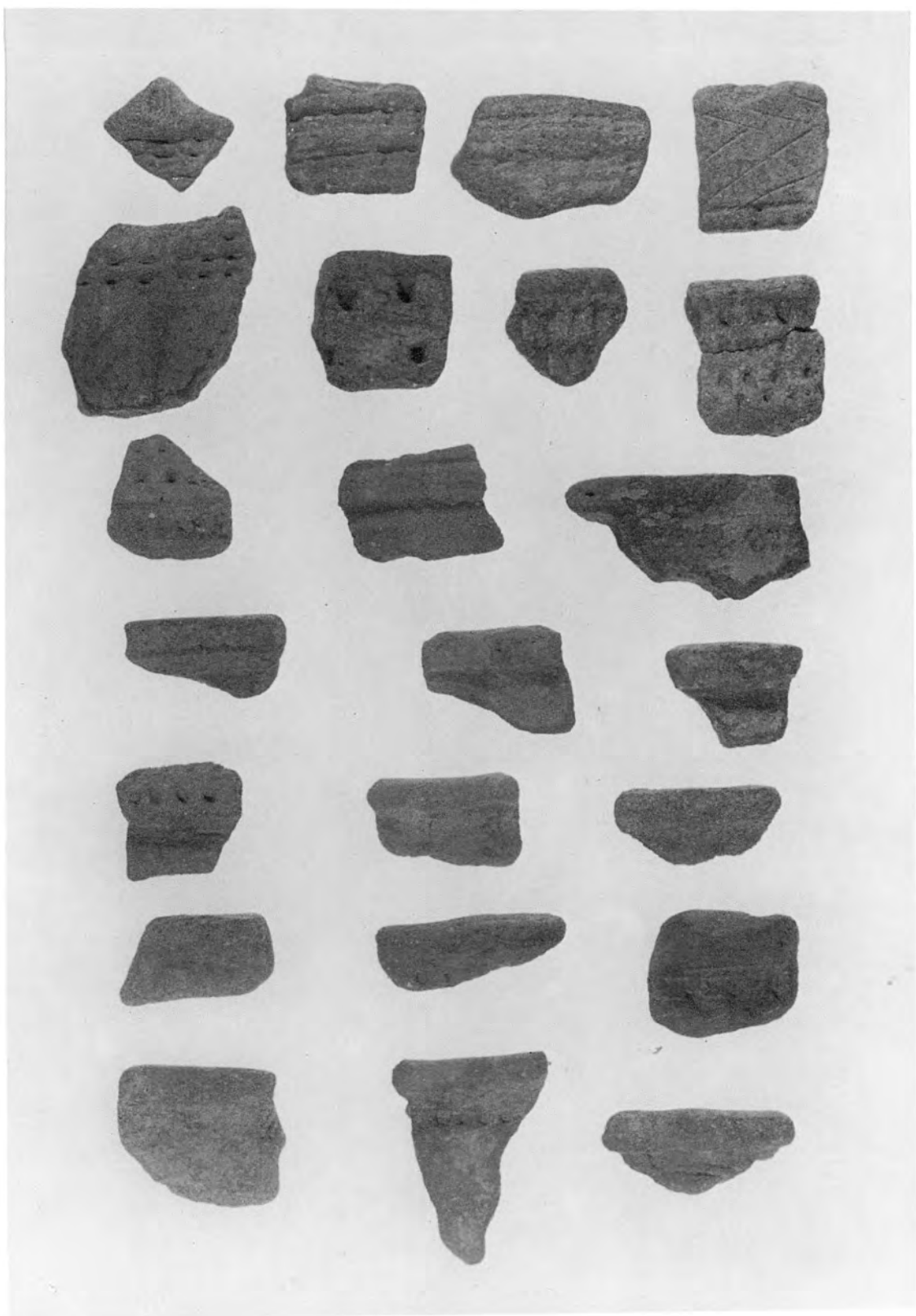
图版19. 石器、左：(上面) 左：(下面)



图版20. 石皿



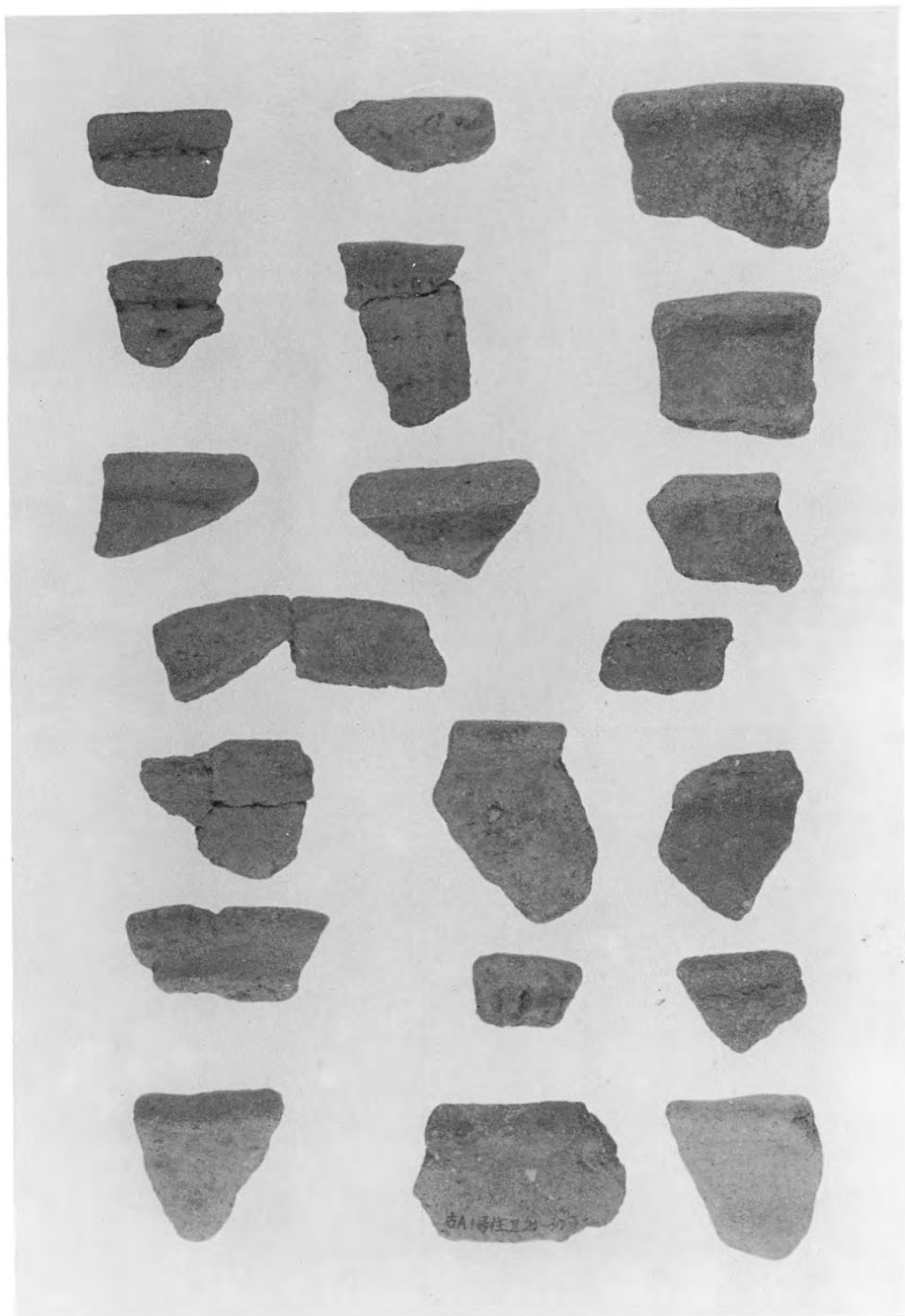
图版21. 土器



图版22. 土器



图版23. 土器



图版24. 土器



图版25. 土器



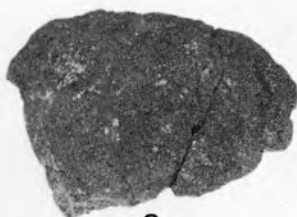
图版26. 土器



1



2



3



4



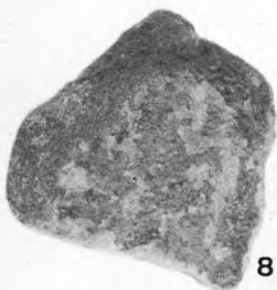
5



6



7



8



9



10



11



12



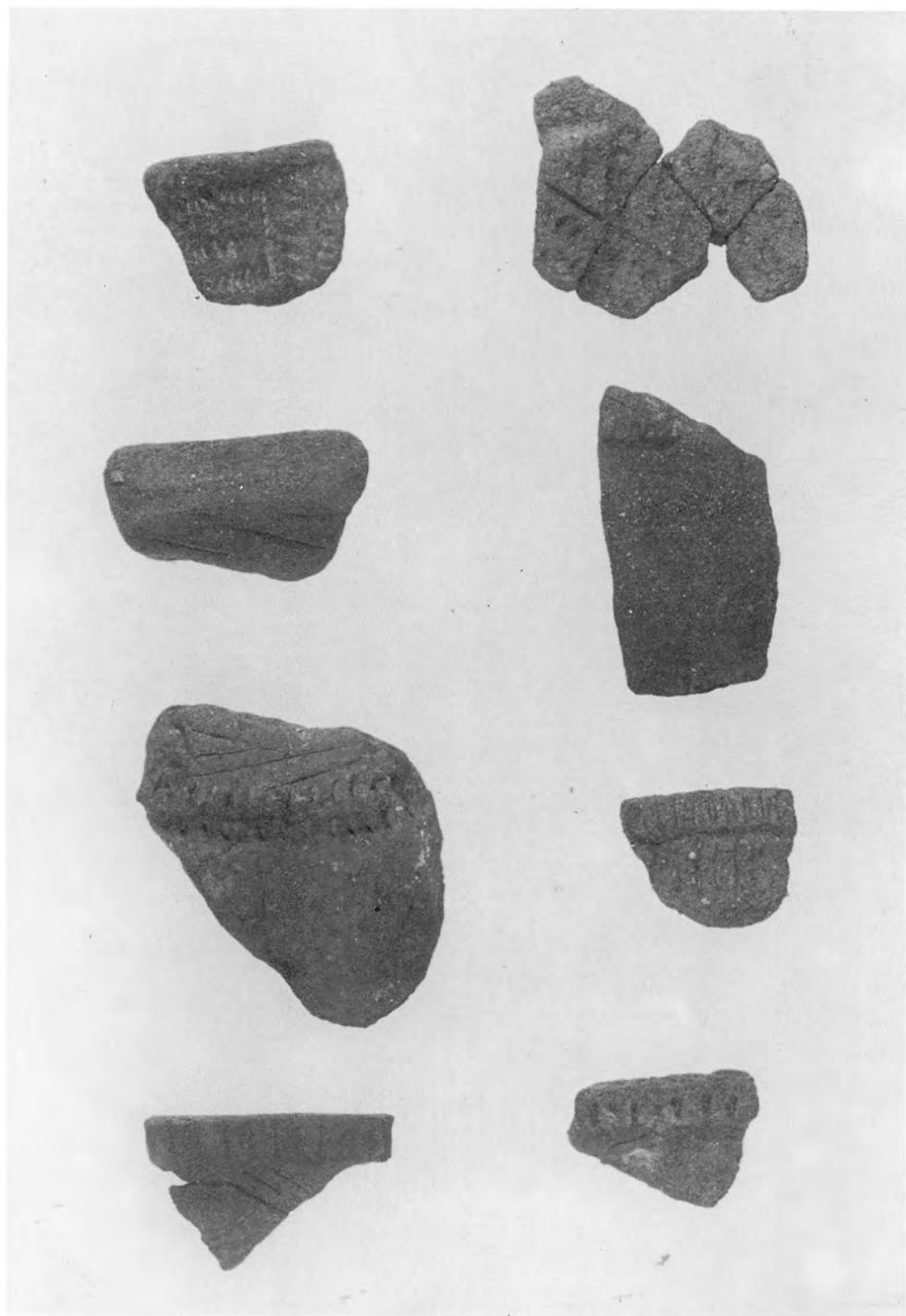
13



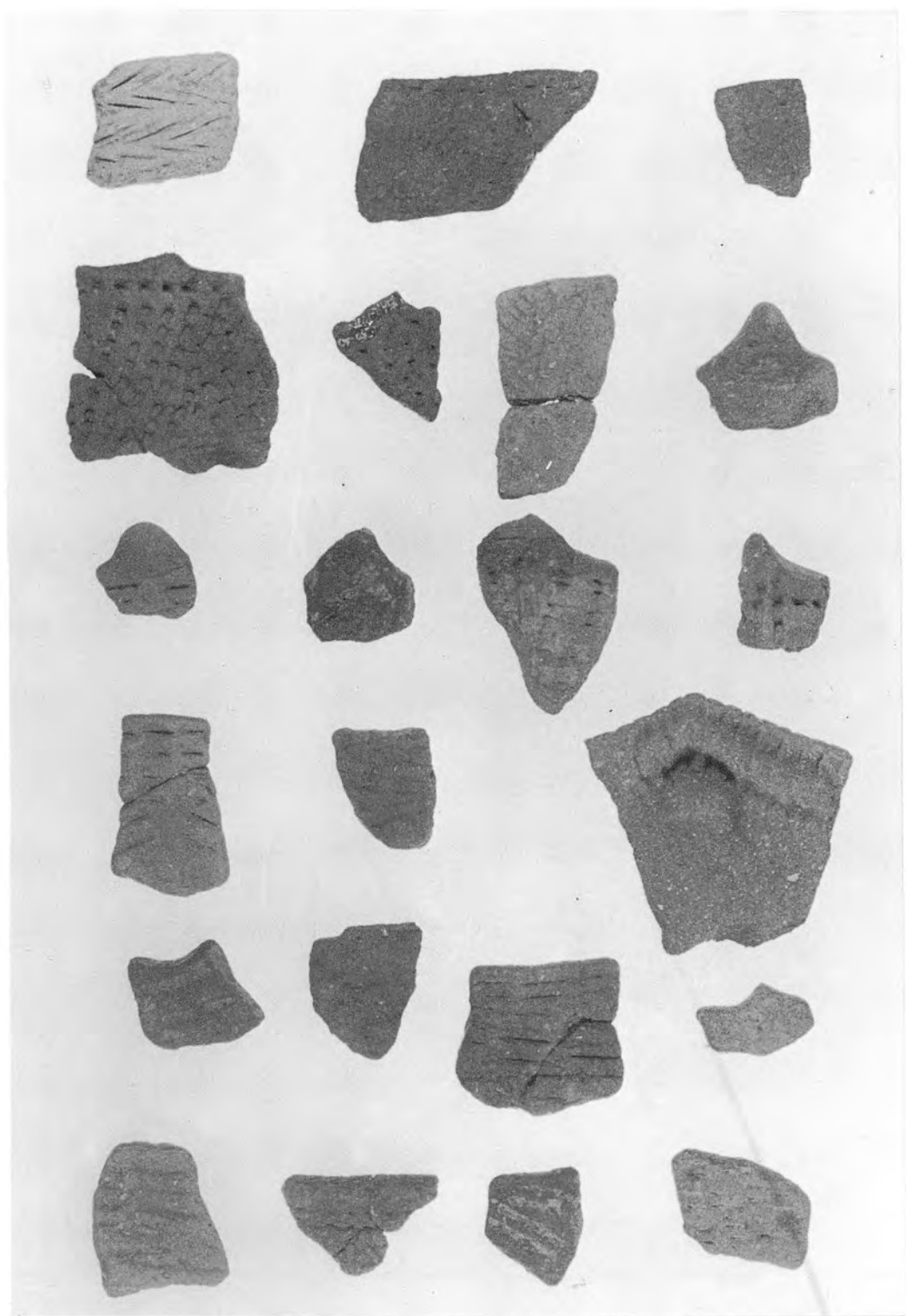
14



15



图版28. 土器



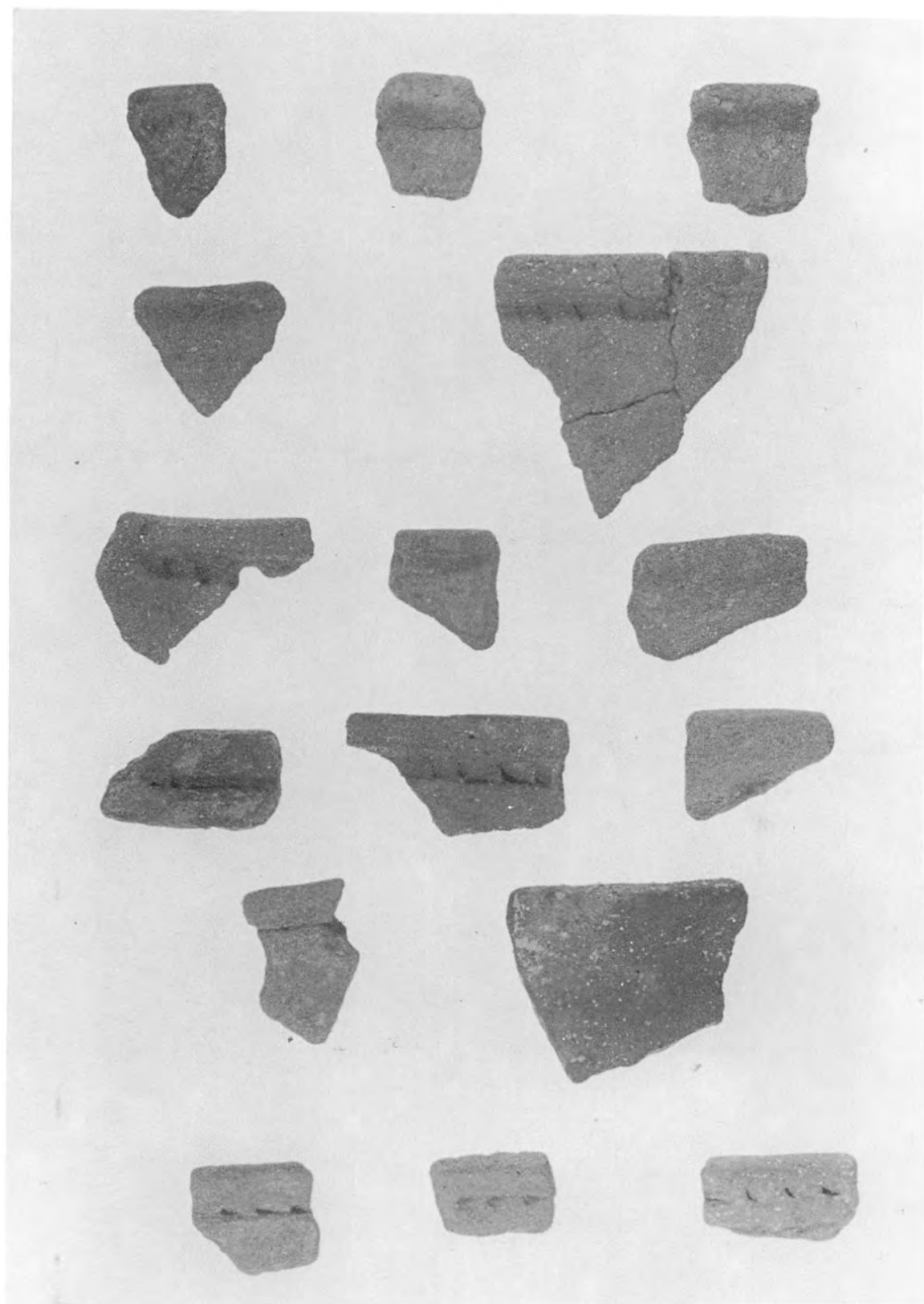
图版29. 土器



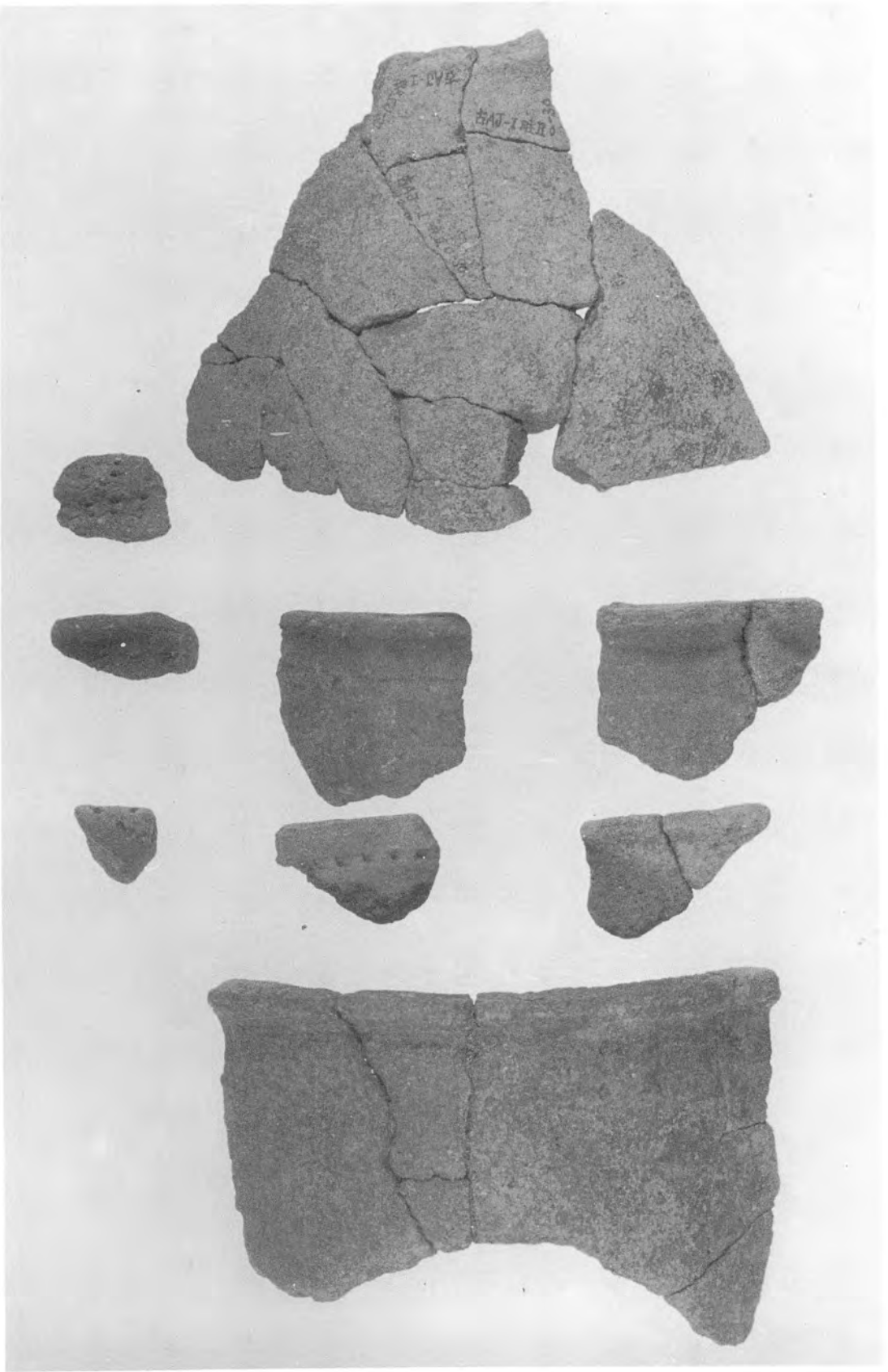
图版30. 土器



图版31. 土器



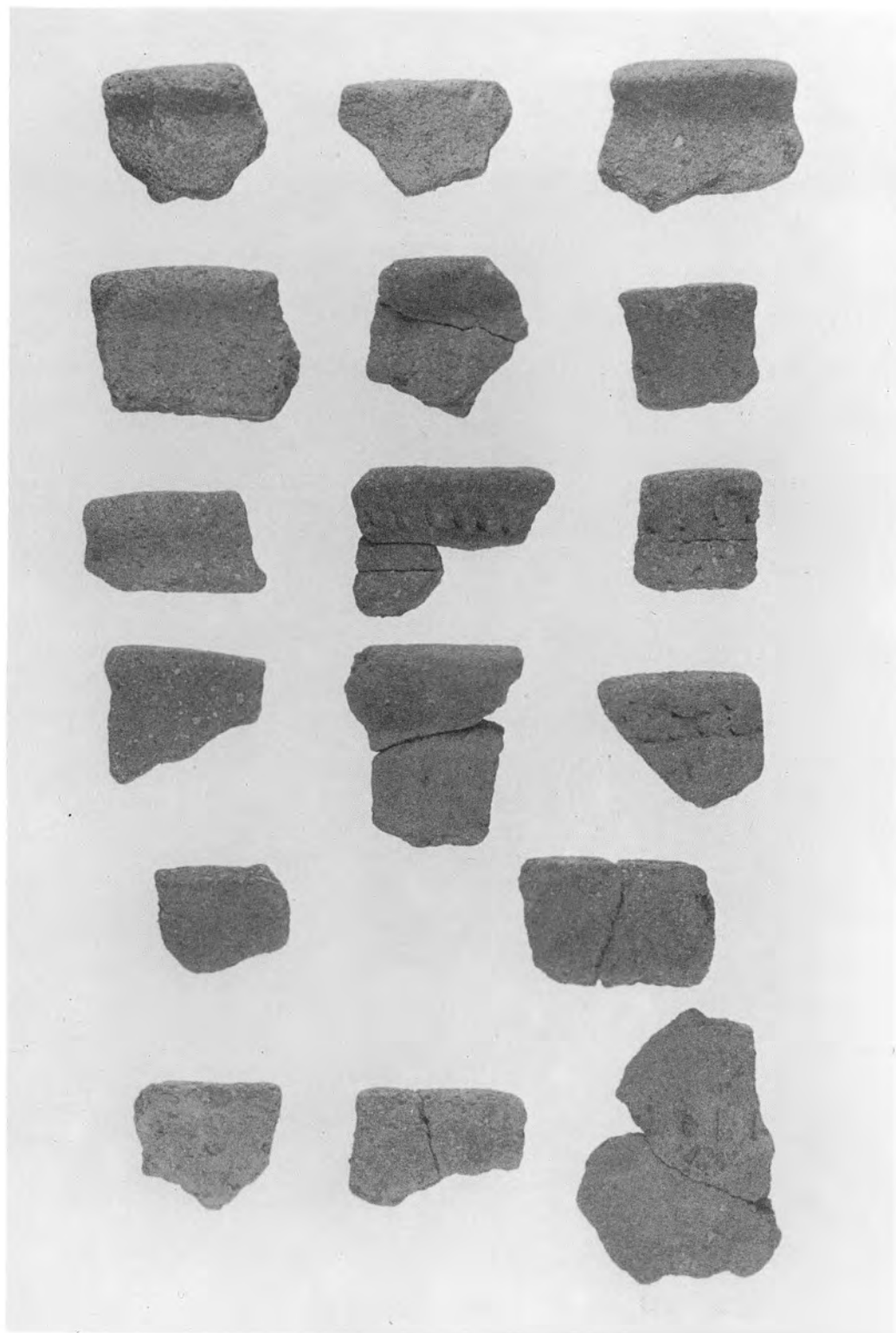
图版32. 土器



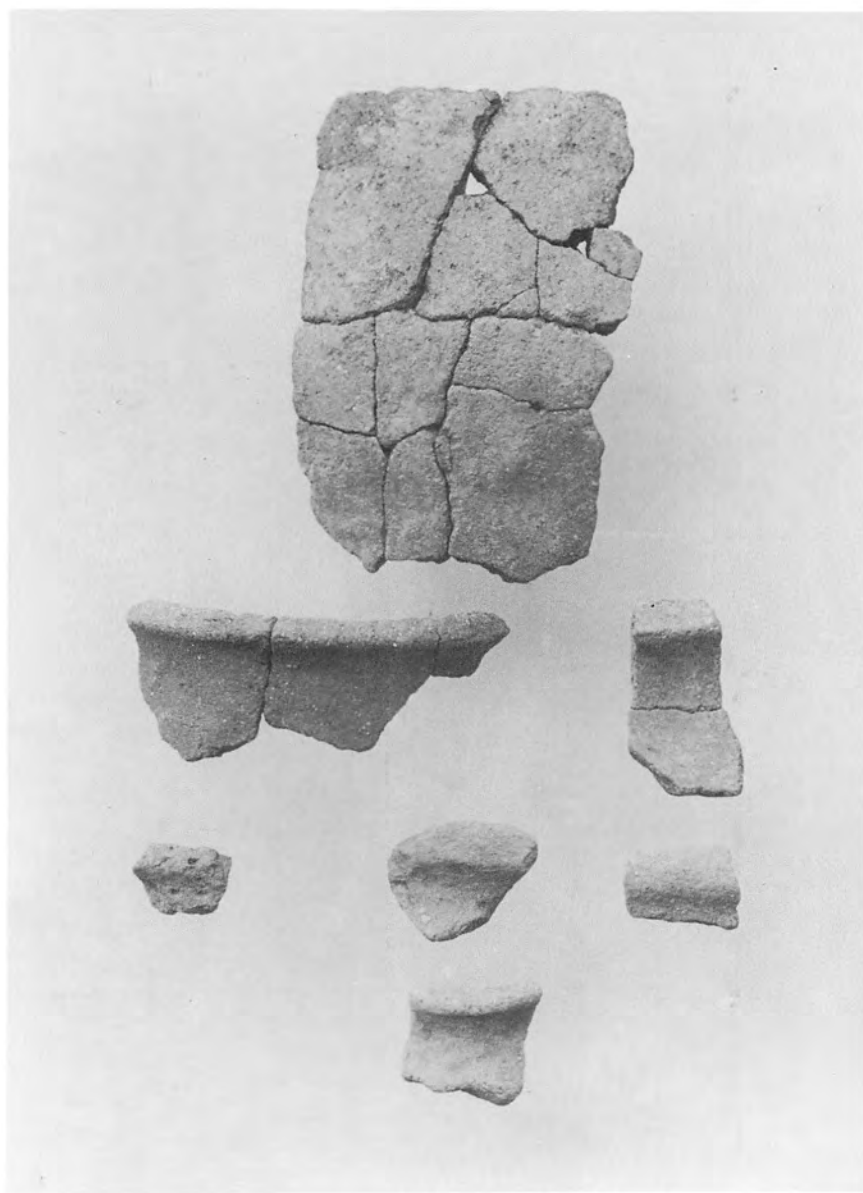
图版33. 土器



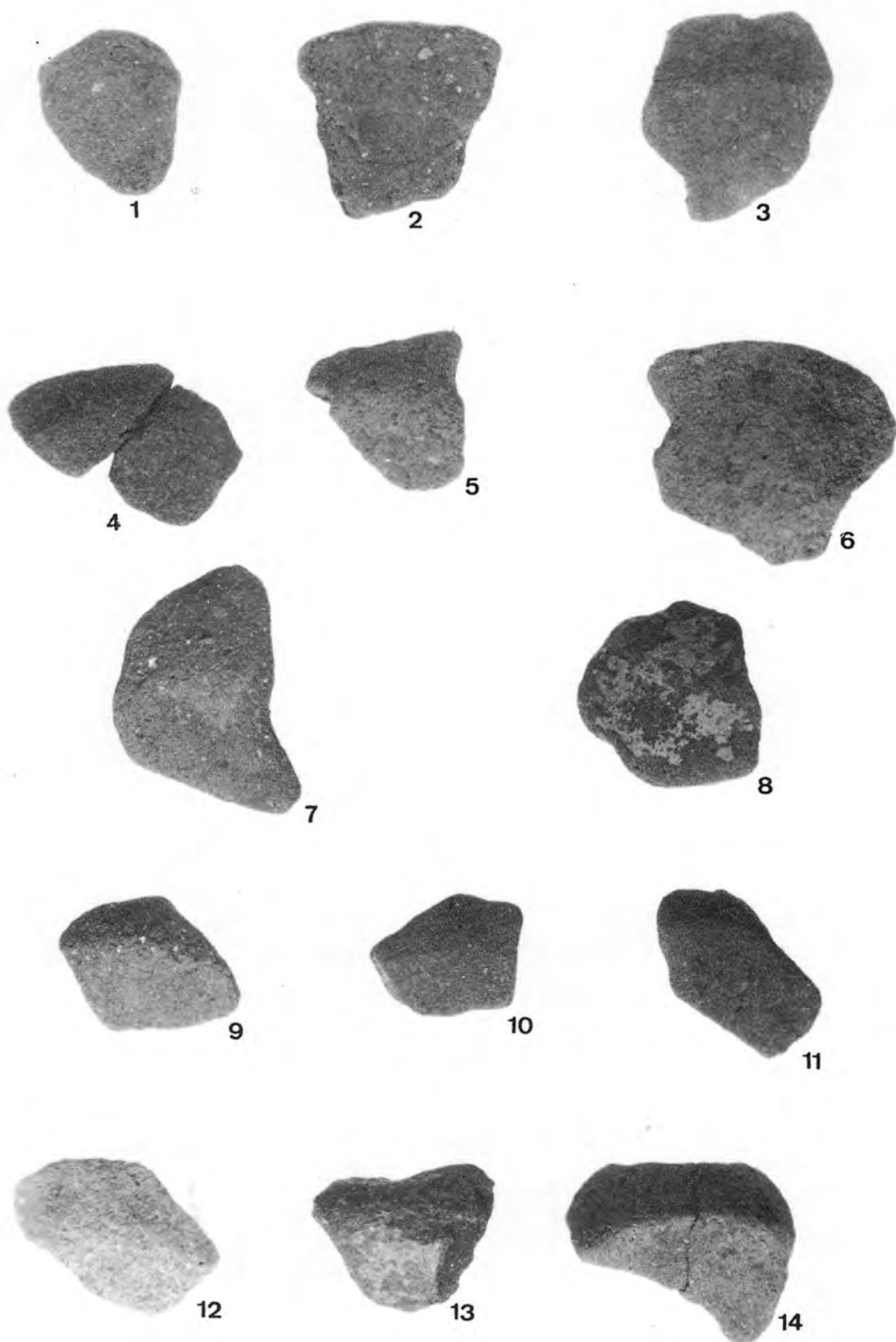
图版34. 土器



图版35. 土器



图版36. 土器



図版37. 土器

古宇利原遺跡発掘調査報告書

印刷 1983年 3 月25日

発行 1983年 3 月31日

編 集 今帰仁村文化財保存調査委員会
T E L (0980) 56-2647・2645

発 行 者 今帰仁村教育委員会

印 刷 沖縄高速印刷株式会社
T E L (0988) 89-5513
